
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN ! 4

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！4

【Nコード】

N9902I

【作者名】

cocconeko

【あらすじ】

[http://ncode.syosetu.com/n0370f/「HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！3」](http://ncode.syosetu.com/n0370f/HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！3)の続編です。相も変わらず、超ド級のおませ幼女と、見た目は青年中身は老人のヘタレ賢者が、海賊に振り回されつつ、探し物の旅を続けております。

よくあるというが、ありがち（前書き）

長らくお待たせいたしました。

とか書きつつ、本当に待っていてくれる方がいるのかドギマギしつつUPです。

オリジナル小説サイト（<http://soranoshinshoku.douseitsu.com/>）立ち上げましたので、よろしければそちらも覗いてやってください。

よくあるというか、ありがち

「えーっと」

空は高く、蒼く澄みわたり。

遠くで小鳥の鳴く声が聞こえる。

そよぐ風に髪を遊ばせて、眼鏡を掛けた長身の青年が、小さく唸った。

「爽やかね」

「そうだね」

青年のすぐ隣には、ふわふわと眩しい金色の髪の少女が、今日の空のように蒼くて綺麗な瞳をキラキラさせていた。

少女の、言葉とは裏腹に、素っ気ない物言いだったが、青年は、事実目の前に広がる景色は爽やかそのものなので、同意を示した。

「これを爽やか、って言うんですかい？」

二人の向かいに座る禿げ頭の、どこか愛嬌のある男が、呆れたようにため息とともに呟いた。

その声音が、ちょっとばかり緊張しているのは気のせいか。

「だって、風は心地良いし、草原はサワサワいってるし、お日様は優しいしさ」

馬車の幌の中。

他の旅人と共に、王都へ向かう道中である。

しかし、こんな道中にはよくある事で。

「まー、俺たちの状況以外は、爽やかだよな」

焼けた肌のたくましい男が楽しそうに、ニカリと、白くて眩しい歯を光らせて笑った。

「困ったな」

あんまり困った風でもなく、眼鏡の青年が、少し前に怪我をして、いまだに歩く事が出来ない自分の両足をさすった。

その、青年の視線の先には、御者が背後から銃を突きつけられつ

つ懸命に馬車馬の手綱を繰っている。

「何処にでも似たような奴らっているのは、いるもんだねえ」

間延びした発言は、日焼けした男の肩に、しなだれ掛かりながら座る、長い黒髪も艶やかな美女のものだ。

馬車の幌のなか、緊迫感のないのはこの一行のみで、他の乗客は奥へと固まつて震えあがっている。

「あ、あんたら、平気なのかね？」

初老の男性が、他の乗客を背に庇う体制を取りながら、一行へ声をかけた。

「いやあ、平気というか、このまま、馬車が目的地に着いてくれなかつたら、困るといっか」

答えになっているのかいないのか、分からない返事を青年が返した所で、馬車がガタンと派手な音を発して失速し、急停止した。

ワアワアと、馬車が騎乗した男たちに囲まれる。

たまに銃声も聞こえるのは、景気付けなのか威嚇なのか。駅馬車は現在、強盗団に絶賛襲われ中である。

後ろの幌幕に、鋭いナイフの切っ先がズブリと突き立てられた。

「わああああ!？」

「ヒュー!!!」

奥に固まつていた乗客たちが一斉に前に出て、御者のいる出口へと雪崩れた。

しかし、誰一人、外へ出ることはかなわない。

御者がとつくに襲われているのだから、当たり前である。

銃を突き付けられて、幌の中で逆戻りだ。

「あーあ。みんなひでえなあ。大丈夫かい?じいさん」

差し出された手に、先程まで他の乗客を背に庇っていたせいで、下敷きにされて倒れた男性が顔をあげれば、健康的に日焼けした男が、白い歯を覗かせて笑った。

「あ、ああ、ありがとう」

そのたくましい手に掴まれば、ひょいと立たせてくれる。

「さあ、どうする？」

その男が、側にいた少女へ嬉しそうに問えば、少女は肩にかかった自分のふわふわの金髪を、無造作にかきあげた。

「決まってるわ。思い知らせちゃいましょー！」

少女はそう言っつて、不敵に微笑んだ。

「さあて、やりますか」

「出来れば穩便に穩やかな旅行がしたいのにな」

「いいじゃねえか。こういう方が楽しくて」

「それは君だけだよ」

逃げ場のないこの状況で、彼らはたった五人で何をしようというのか。

「行くわよ！！」

少女が言い切るなり、足の不自由そうな眼鏡の青年が、何かを投げた。

「ぎゃ！？」

ちょうどナイフで切り裂いた幌幕の間から、乗り込もうとしていた強盗の一人が、ごん、という鈍い音と共に馬車から落ちた。

蹄鉄が向こうへ飛んで行くのが見えたので、投げたのはソレだろう。

「乗客の皆さんは、このまま幌の中に居て下さいね」

にこりと微笑み、いつの間にか長剣を手にした青年に呆気にとられれば。

「おらよつと」

かけ声ひとつで、御者を脅しつけていた強盗たちを楽しそうに放り投げている男が一人。

御者は、ぽい、と、そのまま幌の中に放り込まれた。

「ハイハイ、邪魔だよお前ら」

声に振り向けば、乗客を掻き分けて、幌の後ろの幕を止めていたロープをほどこきながら、禿げ頭はしっかりと、乗り込んで来る強盗たちを蹴り落として行く。

「ホラよ、お嬢！」

降りていた幌幕を上げ、禿げ頭が叫んだ。

「みんな！頭下げてて！」

少女の声に、わけも分からず、乗客たちが馬車の床に伏せる。

パパン！と何やら軽い音が立て続けに響き、チュイン、と甲高い音が頭上を何度か越えた。

そして怒号。

小さな少女が、強盗団相手に銃撃戦を繰り出しているのだと理解するのに、少々時間が必要だった。

「セイン！」

「はい」

少女が差し出した手のひらに、眼鏡の青年はぼんと、銀色の小さな塊を手渡す。

それは銃弾のカートリッジだった。少女は手馴れた手つきで弾を瞬く間に補充、装填して、ドドンと射ち放つ。

馬車の後方に陣取っていた強盗たちはさすがに左右に分かれ、距離をおく。

その隙について、一頭の馬が走り寄って来ると、大きく嘶いた。眼鏡の青年がいつの間にか幌の脇の幕をめくり、隙間から外へ飛び出した。

「キヤル！乗客の見なさんと、僕の援護よろしくね」

見れば、先程の馬の背に跨がって、瞬く間に駆けて行く。

「わたしを誰だと思ってるの！？」

言いざま、少女の銃が強盗たちを襲う。

なんと腕前か。

幌の中で強盗たちに姿が見えないのを良い事に、小さな隙間から次々に、彼らを馬上から撃ち落とす。

青年は青年で、馬を器用に走らせて、銃撃をかわしながら突っ込んでいく。

軌道を変え、スピードを増して走るために標準が定まらないのだ

ろつ。銃弾は常に彼の後方を過るのみだ。

銃を相手に、剣でわたり合うなど見たことがない。走り抜きざま、強盗たちの手に持っていた拳銃を弾き飛ばす。それだけでも見事なのに、たまにお遊びのように、頭の毛を真中だけ剃ったり、ベルトを切つてズボンをずり落したりしている。

「おー、やるねえ、賢者も」

「キャプテン、あんま乗り出すと危ないっす」

日焼け男と、禿げ頭も、他愛ない会話をしながらしつかりと、着実に強盗を投げ飛ばしている。

「俺の出番が無くなるじゃねえか」

馬車にとりつこうとした強盗の顎を蹴り上げて突き落としながら、キャプテンと呼ばれた男が楽しそうに青年を見やった。

「ギャンギャンの出番なんて、一切合財無くなってくれて構わないわ」

「お嬢は冷てえな」

すかさず答えた少女の眼は冷ややかだ。

「キヤルは本当のことを言っているだけだと思っけど」

いつの間にか戻ってきた青年も、にこやかに冷たい。

彼の帰還に、乗客たちがそつと外を見れば、駅馬車の周りを囲っていた盗賊団は逃げ出すか気絶するかして、すでに散り散りになっていた。

五人組

「旦那。はつきり言っちゃあいけませんぜ」

禿げ頭がそう言つて、青年が馬から馬車へ移動するのを手伝つ。

青年は馬の鼻面を撫でてやると、手を借りながら、元いた場所へと座りなおした。

青年に続いて、彼の連れも、何事もなかったかのように、元の場所に収まつた。

しかし、ほかの乗客たちはそうもいかない。みんな固まつたまま、まだ呆然としていた。

「タカ。お前後で覚えてる？」

「あらやだ。手下いじめよ。手下いじめだわ」

そんな呑気な会話が、彼らの行動と、まったくもってちぐはぐしているのだが、本人たちは気にした様子もない。

「キヤルちゃん、すまないね」

怪我をした御者を手当てしていた黒髪の美女が、金髪の少女の頭を撫でた。

「ほら。なにせこの人、目立ちたがりで寂しがりだろ？こんなこと言っているけど、セインさんとキヤルちゃんに、ちゃんと褒めてもらいたいのさ」

「な！ば！馬鹿言つてんじゃねえよジャムリムお前！」

「へー」

「ふーん」

「あー」

なんだか、どんどん変な方向へ話が流れていく。

「あ、あのお・・・」

手当てが終わつたらしい、御者がおずおずと手を挙げた。

「発車してもよろしいでしょうか？」

もつともな提案をする。

「馬はみんな無事ですし、点検をして、走れるようなら動いたほうが良いんじゃないか」と

「ああ、ごめんね。それはそうだね。ほかの乗客の皆さんも、何事ありませんか？お怪我は？」

御者の提案を受けて、サインと呼ばれた眼鏡の青年が馬車の中を見渡した。それに、乗客全員が頷く。

眼鏡の青年の問いかけが合図になったのか、ようやくこの場所から移動できると安心したからか。乗客たちはいそいそと、各々の位置を確認し、落ち着ける場所を見つけて席に着いた。

駅馬車に、ようやくいつもの賑わいが戻る。

それを見て乗客に何事もないのを確認すると、御者は荷台を降り、車輪や馬たちの綱などを点検してゆく。

何事かがあつてはまずいので、護衛に禿げ頭がついた。

「あの」

御者が、裂けた幌の応急処置をしながら、小さく尋ねた。

「お宅ら、どういう団体さんで？」

「あー？あー……。うん。普通、そう思うわなあ」

ぼりぼりと禿げ頭を掻きながら、うーん、と唸った後。

「どういう団体かって言われたら、何でもねえんだけどもよ」

などと言うが、あの腕の立ちっぷりで、何でもないわけがない。

「どっかのお偉いさんの護衛かと思っただがね」

御者が言うのも尤もで。

「護衛つちゆうか、護衛を訓練しに行くだけどさ」

「へえ！そりゃ、達人なんでしょうなあ。強いわけだ」

妙に感心しながら、御者がにっこりと笑った。

「で、ものは相談なんだがね？」

「は？」

つまりは、目的地に着くまででいいから、用心棒をしてくれないか、という事だった。

たしかに、普通駅馬車には用心棒が付くのが当たり前だ。用心棒

がいたつて、先ほどのような盗賊や山賊に狙われるのだから、いな
いほうがおかしいのである。

「今回は、ほれ。あの町で足止め食ったうえに、用心棒なんざ雇っ
ている余裕もなかったしな。崖崩れやら倒木やらで、そっちのほう
に人件費取られちまったから」

この駅馬車に乗った町では、ちょうど嵐に遭遇したのと、へんな
泥棒集団が発生した。おかげで、足止めを食いそうになったのだが、
爆発騒ぎや盗難騒ぎのおかげで、ルートを変えてでも駅馬車を走ら
せることになったのだった。

「報酬は出るのかい？」

「もちろん！大きな町に着いたら、組合に掛け合っただけで貰う
よー！」

護衛を勤めるような連中を訓練するのだから、下手な護衛よりよ
ほど腕が立つに決まっている。

真剣な面持ちの御者相手に、禿げ頭はつるりと頭を撫でて、にや
りと承諾した。

「よし。旦那がだめでもおれっちとキャプテンで何とかなるしな。
金になるならやるぜ」

「おお！ありがてえ！あんた、名前は？」

「おれっちはタカってんだ」

「じゃあ、タカ。よろしく頼むよ！」

にこにこ頼まれて、悪い気はしない。タカは、これで商売が出
来たとばかりに、上機嫌で幌の中の定位置に戻って、他の四人に用
心棒の件を説明した。

御者は御者で、御者台に戻ると、乗客全員の定員数を確認し、よ
っぽど安心したのか、鼻歌交じりに馬車を発車させる。

馬車はゆっくりと動き出し、どんどんスピードを増していった。

この御者もほかの乗客も知らないことではあるのだが、運が良か
ったというべきか。

確かに、この五人にかかれば大船に乗ったも同然である。

タカは泣く子も黙る海賊船クイーン・フウエイル号の一味だし、彼がキャプテンと呼ぶ男こそ、そのまま海賊王と名高いキャプテン・ギャンガルド本人であったし、金髪の少女は、見た目こそ可愛らしいが、これでもゴールドン・ブラッディ・ローズの二つ名をもつ凄腕のヘッド・ハンター、キャロット・ガルドその人である。

そして、一番謎な眼鏡の青年なのだが。彼は数か月前に、キャルが引き抜いた伝説の聖剣、大賢者セイン・ロズドの本体であり、化身である。

まったくもって、そうは見えないが。

ちなみに、黒髪の美女はジャムリムという。ギャンガルドの愛人であり、今のところ、海賊王を制御できる唯一人の貴重な人材だ。

城壁

馬車は一行を乗せ、とりあえず何事もなく、無事に次の停車場のある街が見える場所まで順調に辿り着いた。

今度は大きな街で、宿屋もホテルも選り取り見取りらしく、キャルやジャムリムなどは、同乗した若いカップルからいろいろと情報を聞き出してはしゃいでいる。

「しかし、凄い城壁だな」

すっかり御者と意気投合したタカは、御者台に座って前方を仰ぎ見た。

「この領主様の家が、代々軍人の出でね。この地方を任されたときに、城下町まで城の壁で囲っちゃったそうだ」

「へえ。すげえや。でっけえ要塞みたいだぜ」

タカが感心するのも無理はなく、巨大な壁にぐるりを取り囲まれて、広い荒れ野の中に、その街は唐突に現れた。

外からは、城壁に阻まれて内部を観察することは難しい。ただ、奥に小高い丘があり、その上にこれまた堅牢そうな城が建っている。

あれが、その領主とやらの城に違いないのだが、城と壁が作り出すその様は巨大な軍艦を思わせた。

「何？何が凄いの？」

女性陣の輪の中に入らず、暇なセインが御者台に顔を出す。

「わ。旦那。歩けねえんですから、無理しないで下さいよ」

「だって、暇なんだもの」

ガタゴトと揺れる馬車の振動だって足の傷に響く筈なのに、歩かない足を引きずってうろろされるのは、かえって周りが気を使うそれを承知でこうやって顔を出すのだから、余程暇を持て余していたのか。

「まあ、今までじっと座りっぱなしだったからなあ」

困ったように眉尻を下げるタカに、セインも、ごめんね、と一言

謝って、タカが掴み易いように両手を差し出す。

タカも、差し出された両手を取って御者台に移動させてやること、自分の両手をセインに差し出し返した時だった。

急に、セインの手が引っ込められた。

「ちよ、何するのさ！」

がっちりと脇を固めて、セインが叫んだが、その固められた腕ごと左右から大きな手で挟まれて、長身を持ち上げられる。

「ん〜？俺も暇だから」

犯人はギャンガルドだ。

「持ち上げなくていいし！痛いし！こら！」

腕をホールドされては、今のセインでは抵抗できない。相手はもちろん、それを知っているの嫌がらせだ。

「ほう。そうかそうか。でもねギャンガルド。この状態でも両手は合わせられるって分かってるのかな？」

普段より低い声音に、ギャンガルドの口元が、ひくりと引きつった。

「だ、旦那？」

伸ばそうとしたままの両手の行き所を失わせていたタカまで引きつった。

「あらセイン。これ使ったほうが早いわ」

ギャンガルドの背後から聞こえた幼い少女の声に、今度は御者まで引きつった。

かちりと撃鉄を起こす音。

少女が手にしているのは拳銃で、その拳銃をセインの手に握らせた。

「ありがとう。キヤル」

「どういたしまして」

につこりと微笑み合う二人は本気だ。

「と、いう事で。降ろしてくれないかな？」

肘から下しか動かせない状態でも、背後に密接する脇腹くらいは

着実に撃ち抜ける。

「ちえー。冗談が通じないぜ」

渋々とセインを降ろしたギャンガルドに、キヤルが微笑んだまま
呟く。

「あんたの冗談は冗談にならないのよ」

「お嬢。怖いから・・・」

涙目になったのはタカだ。

「まあまあ。みんなで何をもめているんだい？いいから、外をこ
よ。セインさんだって、外を見たかつたんだろ？」

細い腰に両手を当てて、ジャムリムが割り込んだ。

御者を含めて六人で、馬車の外を見るのは狭苦しいが、当初のセ
インの目的はジャムリムによって、ようやく達成された。

「へえ。街全体が要塞になっているんだね」

感心して呟く。

「そうなんですよ」

御者がセインを振り返った。

「あの壁の上の凹凸は砲台で、もうちょっと近付けば見えるんです
がね、転々と小さな穴が開いていますね。新鮮な空気を取り入れ
るっていう目的を含めて銃を撃つためのものなんですよ。それで、
所々に見える櫓が見張り台です。門なんかカラクリの橋になって
いて、敵が来たら入り口の蓋にしちまうから誰も入れないようにな
つちまうんですよ」

本領発揮とばかりに、指さしながら、御者が観光名所の案内人宜
しくしゃべりだす。

「凄いいねえ。じゃあ、大きい街なのに、ぐるっと堀が掘ってあるの
？」

「詳しいですね!？」

「だって、門が掛け橋なんですよ？」

満面の笑みで話し込んでいた御者が、急に顔を赤くした。

「すいませんね、はしゃいじまって。生まれ故郷なんですよ。久々

に帰って来たもんですから」

急に、しゃべりすぎたと恥ずかしくなったらしい。

「いいじゃないか。故郷に帰って来たなら、うれしくもなるさ」

ジャムリムが城壁を見上げる。

美女の賛同に、御者はさらに頬を赤くした。

そんなことをしている間にも、城壁は馬車が近づくにつれ、どんどん大きくなってゆく。

「なんというか。圧迫感があるわね」

壁の真下に来る頃になると、壁の威圧感是否応なしに増した。

「立派だけど、これはちよつと・・・」

御者には聞こえないように、キヤルに続いてジャムリムも呟く。

街の入り口は堅牢確固たるもので、さほど大きくはないのは、敵の大量侵入を防ぐためのものなのだろう。

セインの言った通り、深く広い堀が掘られており、水も張られていない。が、水の代わりに、堀の底には鋭く尖らせた槍が乱立しており、あまり気持ちの良いものではなかった。

到着（前書き）

えー、年末年始休暇に書きだめする予定が、休日出勤及び体調不良のため、まったく執筆出来ず。

大変申し訳ありません。

なんかね、休暇に入った途端にね、咳も鼻水もとなくなりましてですね。せつかくの休暇をひたすら寝て潰したっていう・・・もったいなかった・・・。

みなさんも、くれぐれも疲労による体調不良にはお気を付けくださいねー。でないと、医者に叱られますよー。

到着

左右に一人ずつ立っている門番が、街の中に入る人々をチェックしていく作業は流れるようで、人の数の割に細い橋の上でも、そんなに混雑はしていないように見える。

それでも大きな街だけあって、旅人の出入りは多い。行き交う人々の雑踏の中、駅馬車も門番の前まで進み出た。

「よう！ご苦労さん」

「ああ、お前さんか。ご苦労さん。どうだい？調子は」
御者と門番は顔見知りのようで、親しげだ。

「まあ、見ての通りさ。少々やられちゃった」

補修だらけの馬車を、御者が振り返って示せば、門番の男も、所々破れた幌に気づいて、眉をしかめた。

「あちこちやられちゃってまあ。使えない用心棒でも雇っちゃったのか？」

「いや、色々あって用心棒を雇えなかったのさ」

「おいおい。それでよく無事だったな」

「まあな。運が良かったんだろ。死にかけたけどな」

物騒なのか呑気なのか分からない会話を続けながら、御者が通行証を見せ、門番がそれをチェックする。仕事はしっかりしているようだ。

「はい、すいませんね。・・・よし」

馬車の後ろに回り、乗客を一瞥すると、あっさりと許可を出した。
「行って良いぞ」

「ありがとう」

馬車がガラガラと門を潜ろうとしたところで、セインが大声を上げた。

「すみません！待って下さい！」

何事かと驚く門番に、動けないセインの代わりに、キャルが顔を

出した。

「ごめんなさい。私の連れの馬が一頭、その辺にいるはずなんだけど、一緒に中に入ってもいいかしら？」

小さな少女が大きな瞳で首をかしげて尋ねる姿は愛らしい。

門番も、精一杯怖がらせないように笑顔を作って対応する。彼なりに和んだらしい。

「馬？どの馬だい？お嬢ちゃん」

問いかければ、可愛らしく微笑んで、指をさす。

みれば、毛艶の良い綺麗な馬が一頭、こちらを見ている。ずいぶん立派な馬だ。

「あれかい？」

「あの子よ。クレイ！」

少女が呼べば、嬉しそうに近寄ってくる。

「へえ、良い馬だね」

「私の連れにはもつたいないくらいよ」

連れというのは、先ほど大声を上げた青年だろう。

「大事にしてやりなよ、あんた」

「はい。ありがとうございます」

声をかければ、青年は素直にぺこりと頭を下げた。

「良いよ。連れて行きな」

「ありがとう。門番さん」

「ありがとうございます」

許可を出せば、馬まで嬉しそうに嘶いて、仲良く馬車と並んで門を潜って行った。

ガラガラと駅馬車が街中を進む中、馬車の幌の中で、変な悲鳴が響いた。

「むぎゃー！」

足を踏まれたギャンガルドが、思わず飛び上がったのだ。

「ギャンギャン。さっき笑ったでしょ」

「せ、せめて確認してから踏んでくれねえか？」

先ほどの、門番相手の時に、猫を盛大に被ったキヤルに、実はこっそりと笑ったギャンガルドだった。

まさか気づいていたとは。

「背中に目でも付いてんじゃないかねえのか？」

「あら。失礼しちゃうわ。そもそも可愛さも女の武器だわ。利用しないほうが馬鹿よ」

「おや。キヤルちゃん良い事を言うねえ。可愛らしさだって女の武器だよ」

ジャムリムまでキヤルに同意をし始める。

「ねー」

「ねー」

美女と可愛い少女が二人で手を合わせて首を一緒にかしげる様は、確かに目の保養だ。

ただし、中身を知っていなければ。

「キャプテン。こればかりは勝てないっすよ」

ぼん、と、タカに肩を叩かれて慰められ、海賊王は情けなく眉尻を下げた。

「女の子って、可愛くて良いよねー。見て癒されるし」

心の底からそう思っているのか、セインがのほほんと笑っている。背後に花が咲いているのが見えるような呑気さだ。

「お前さん、お嬢の中身知ってて、本気で言ってるのか？」

「は？何が？」

思いつき不思議そうに、質問を質問で返されて、ギャンガルドは呆れた溜息を吐き出した。

「さつきから失礼ね」

「痛ててててて！」

今度は脇腹の肉を捻られた。

「私はいつだって可愛いわ！」

「自分で言うなよ……」

げんなりと、ギャンガルドがキヤルに抓って捻りあげられた自分

の脇腹をさする。鍛えた筋肉で出来ている体だが、皮膚への直接攻撃には弱いらしい。真っ赤になってしまっていた。

「元気で良いねえ。おちびさんは充分可愛さ」

御者が笑いながらそう褒めれば、キヤルはギャンガルドの時とは全く違う極上の笑顔で礼を言う。

「ありがとう！」

そんなことをしているうちに、早々に馬車は停留所へと到着した。

城壁の町

ざわざわと賑わう広場のそばに、停留所は設けられていた。

行き交う人々の邪魔にならないように、馬車は器用に停車する。

御者の腕はさすがといったところか。

「さ、着いたぜ。お客さん方。王都方面へ行きなさるんなら、出発は明日の朝八時にまたここへ来てくんないや。切符はこちらに」

説明しながら、御者はバタバタと乗客の下車の準備をする。

荷台の後ろの幌幕を全部上まであげて、折りたたみタラップを設置すれば、お年寄りでも楽に馬車の昇降ができる。

乗客一人一人に丁寧に挨拶をし、切符を確認して、女性や子供、お年寄りには手を貸す御者は、この仕事が本当に好きなのだろう。

「おや、最後はお前さんかい？」

「ええ、どうも。足を怪我しているので、上手く動けなくて。ご迷惑をおかけします」

タカの肩を借り、ゆっくりと馬車から降りるセインの移動に、御者も手伝ってくれる。

「ああ、こりゃ、確かに馬が必要だわ」

馬車から降りて、クレイの背に跨ると、包帯だらけのセインの足に御者が気づいて、ひとり納得しては頷いた。

「ありがとうございます。明日もまた、利用させてもらいますね」

「そりゃあ、毎度あり！でも、明日からは別の御者になりますんで、残念ですが、俺とはここまでですよ」

「それは残念」

そんな会話をしていけば、タカがわざとらしく咳払いを見せて見せた。

「ああ、いけね！忘れるところだった！」

ぺちん、と額を叩いて停留所の受け付けに走った御者は、すぐに引き返して来て小さな巾着をタカに渡した。

「これ、用心棒代。あと、こっちはオマケ」

にこにこ手渡されたそれは、王都までの人数分のチケットだった。

ほかの乗客たちは足早に去ってしまった後だったが、誰か見てやしないかと、タカは一瞬きよきよるとあたりを見回してしまった。

「い、いいのかよ？」

こっそりと耳打ちすれば、景気よくばしばしと背中を叩かれ、タカは眉をしかめた。

「あんな見事なもん見してもらったんだ！見物料だよ」

「そうかい？じゃあ、もらっちまうぜ」

「持つてけ！それに、あんな別嬪、滅多に見れないしなあ」

でろりと鼻の下が伸びた御者の視線の先にいるのは、なるほど。

「ジャムリムの姐さんか・・・」

美人にや滅法弱いのは、誰でも一緒ということか。それでも貰えるものは貰っておくのが海賊根性。

「じゃ、遠慮なく」

本当に遠慮なく、タカはチケットと巾着を懐に仕舞い込んだ。

「何からなにまで、ありがとうございます」

「危ないところを助けてもらったんだ。あんた方は命の恩人だよ。

お礼を言うのはこっちの方さ」

セインが頭を下げれば、御者が手を差し出した。セインも、手を伸ばして御者と握手を交わす。

「また、いつかお会いしましょうや」

「またいつか」

にこやかに手を振って御者と別れを告げ、一同は広場へと足を踏み出した。

大きな時計を中心に、広場は人々に憩いの場を提供している。その広場につながっている一番大きな通りには、市が立っていた。

「へえ。大きな町だけあって、さすがに物資も豊富だね」

セインの顔が、心なしかほころぶ。

「見てみたいものが沢山あるわ！これは無駄使いしてしまいそうに魅力的だわ」

キヤルは、セインの腹にすっぽり収まる形でクレイの背中に跨っていた。久々の賑やかで華やかな街並みにご満悦である。

彼女の鞆は、現在タカが運搬している。車輪が付いているので、キヤルの鞆の上に自分たちの荷物を載せて歩けば、楽なのだそうだ。

「とにかく、先に宿だろ。駅馬車は明日まで動かねえんだから」
ギャンガルドがもつともな提案をした。

「ふうん？君のことだから、このまま飲み屋にでも直行するのかわかっただのに。案外考えているんだねえ」

馬上からセインが、疑うような視線を向けた。

「俺だつてこれでも一応、船の長だぜ？優先すべきは優先するさ。まずはあんたの足だ」

「はいはい。足手まといは宿屋でおとなしくしてますよ」

まだ疑っているらしいセインに、ギャンガルドは大げさに溜息をついてみせる。

セインはそんなギャンガルドから視線を外し、ジャムリムに笑いかけた。

「ジャムリムさんは？休憩しなくても大丈夫？」

長い間馬車に揺られていたのだから、疲れも溜まっているだろう。

「そうだねえ。セインさんの足もそうだけど。ちよっと休憩したいし、やっぱり宿屋は探しておいた方が良いんじゃないかな。酒屋がくつついてりゃ、ベストなんだけど」

「なるほど」

酒屋付きの宿なら、ギャンガルドがどこかへ行ってフラフラとあちこちの女性に手を出す心配もなくなるということか。

「行動が読まれてまずせ。キャプテン」

「お前は黙ってる」

ギャンガルドが、タカの頭をぺしりと叩いた。

城壁の町2

「しかし、本当に城壁に囲まれてんだな」

家々の隙間から、レンガ造りの赤茶けた壁がちらちらと、どこへ行っても見える。ギャンガードが、感心したような、呆れたような声を出した。

「町ぐるみで要塞なんだよ。ほら。向こうには畑もあるし、ちょっとした農場もあるみたいだし。井戸もあちこちに設置されている」

「へえ。いくらでも籠城できるようになってんだ」

「うん。水の供給は多分地下水なんだろうけれど。オアシスが町になっただらうね。良く出来てるよ」

馬上では、良く見渡せるらしい。セインが町を観察しながら、しきりに感心している。

しかし、女性の興味は目下、それどころではないらしい。

「ねえセイン！クレイを止めて」

「どうしたの？」

「あれ！」

大きな瞳をキラキラと輝かせて、キャルが指したのは、可愛い雑貨の並ぶ、これまた可愛い張り出し窓の店舗だった。

「おや、可愛いね」

ジャムリムの表情もほころんだ。女性はみんな、だいたい可愛いものには目が無いものらしい。

「でしょ？後で絶対ここに来るわ！だから早く宿屋を決めちゃいましょー！」

すでに店の扉の中に突進しそうなキャルの興奮ぶりに、セインはなんだか不安になった。「無駄遣いしちゃだめだよ？」

「何よ、悪い？」

「メッソーモゴザイマセン」

無駄遣いするつもり満々らしい。

「こんなお店がある町に来るのも、久しぶりなんだもの。ちょっとくらい良いじゃない」

「僕としては、そろそろ紅茶の茶葉が欲しいところなんだけれど、これからも旅は続くのだから、余計なものを買って、荷物を増やしたくない。鞆を持つのは、だいたいセインなのだ。今はタカが荷物係を申し出てくれているけれども。」

「大丈夫よ。お金に困ったら、最高の賞金首がここにいるじゃない！」

「あー、その手があったかー」

ノリノリのキャルに、全くその通りと言わんばかりに頷くセインの二人に、慌てたのはギャンガルドだ。

「こら。俺は非常金庫扱いか？」

冗談だと分かっているにしても、相手は賞金稼ぎでも有名なゴルドン・ブラッディ・ローズと、伝説の聖剣だ。本気になられたら困る。「ギャンガルドだったら、捕まったって簡単に逃げ出せるでしょ？」

「逃げ出した後が大変苦労するだろうが」

「あー、二人とも。宿屋なんだけどさ。あのあたりなんかどう？」

二人の終わりそうにない話題に、セインが割り込んだ。

「看板が出てますね」

タカがすかさずチェックする。
セインが見つけたのは、ジャムリムの要望通りに、一階が居酒屋、二階がフロントで、三階からが客室になっている、ちょっとアンティークな香りのする、小洒落たホテルだった。

「ホテルじゃねえか」

店の作りを見上げながら、ギャンガルドが眉をしかめる。

確かに、この豪快な海賊王に、アンティークなホテルなぞ、ついでに似合わない。

「女性の好みを優先してみると、こういう所もたまには良いかと思つて」

セインの言うとおり、こういうときは女性を中心に動くのが身の

為だろう。

でないと、後々何を言われるのか分かったものではない。

「きゃあ！素敵！」

「こんな高そうなところに泊っても良いのかい？」

思った通り、女性組の反応は上々である。

「見た目の割に安いはず。ふうん。公共の施設なのか。それで安いのか」

表に出された看板を眺めながら、タカがしきりに唸っている。

「公共のつて、ここの領主が経営でもしているの？」

「そんな感じみたいです。持っていた館をホテルに改して、旅行客を受け入れているようですよ」

「ああ、そんな説明まできちんと書かれているのか。律儀なのか狡猾いのか」

これは、旅人には良いアピールになる。きっと、ホテルの経営は町の宣伝も兼ねているのだろう。

「部屋が空いていれば良いのだけど」

セインがタカの手を借りてクレイの背からキャルを降ろし、自分も降りる。

「見て来ますよ」

「頼むよ」

足取りも軽くホテルの中に入ってゆくタカに、ギャングルドが複雑そうな顔をした。

「どうしたの？」

「あいつ、もうすでに俺の手下っていうより、賢者の従者って気がする」

そのムツと膨れた表情に、セインは思わず笑い出した。ジャムリムまでが笑っている。

「な、何だよ！」

「それ、嫉妬？」

「はあっ?!」

思ってもみなかつた指摘を受けて、ギャンガルドは、ぱくぱくと魚のように口を開け閉めする。

「部屋、充分空いてますぜキャプテン！旦那！」

そこへ戻ってきたタカを、ギャンガルドが睨んだ。

「な、なんですか？」

「お前が賢者に懐くからだろうが！」

「へ？」

何の事だか解らずに、タカが目を丸くした。

「言つとくが、俺の手下が俺以外の奴の下につくなんざ有り得ねえ」

今度は、頭の皮が剥けるんじゃないかと思うくらい、ぐりぐりとギャンガルドに撫でまわされる。

「ええーっと、えっと、えっと・・・？」

状況が掴めず、ギャンガルドとセインとジヤムリムの間を忙しなく視線を彷徨わせたタカだったが、がしりと頭を鷲掴みされ、動きが止まる。そのまま、自分の目線に、ギャンガルドの目線が合わさった。

正直、怖い。

「えっと？・・・おれつちが旦那に懐くって、だって旦那今怪我人ですし。面倒見てやんねえと。あと、おれ、キャプテン以外、キャプテンだなんて思ったことねえっすよ？」

とりあえず言い訳を試してみる。

「んなこたあ、分かってるんだよ。部屋、空いてるんだろ？」

何故ギャンガルドに頭を撫でまわされたり、鷲掴みにされたりしなきゃいけないのか、わけがわからないまま正面からにつきりと微笑まれて、一生懸命こくこくと頷いた。

満面の笑顔が怖い。

「へえ、余裕があるから大丈夫だって言っちゃした」

「よし」

タカの答えに満足したのか、ギャンガルドは先頭を切ってホテルへと入って行った。

「あんまり気にしなくてもいいわよ」

すれ違いに、キヤルからそう言われたが、夕方は首をひねって皆の後に続いたのだった。

「きゃあ！可愛いわ！」

「うん。いいね」

ホテルに入るなり、女性二人はあちらこちらをチェックして忙しない。

「こういうの、女性って好きだよな」

セインも、きよろきよろと見渡しながら、心なしか嬉しそうだ。

「お前さんまで喜んでるって言うのはどういう事だ」

「だって、綺麗じゃない？」

つやつやの木製の壁には、所々木組み細工が施され、正面にあるフロントに続く階段は緩やかな螺旋で手摺も丸く、先の部分には可愛らしい天使の彫刻がラツパを吹いている。床も木製で、木の種類をいくつか変えて、こちらも壁と同様、木組み細工で飾られていた。

「へえー」

ギャンガルドとタカも、改めてホテルの内部を見回した。

「天井からシャンデリアがぶら下がってら」

入り口から入って、左側。丸いアンティークなテーブルが、これまたアンティークな椅子とともに並び、奥にはカウンター席がある。夜にはバーテンが立っているのが、とても似合いそうなカウンターだ。

昼間は普通にカフェテリアになっているのだろう。ウェイトレスらしいエプロン姿の少女が、こちらをうかがっている。

奥のテーブルにカップルと、数人の客が座って、楽しそうに話をしていた。

そして、中央にシャンデリア。螺旋の階段と相まって、舞踏会でも開かれそうな雰囲気である。

「部屋もきつと可愛いわ」

「キヤルちゃんあたし、一緒に寝ようか？」

「それも楽しそうね！」

ジャムリムもキヤルも、階段を上ってはしゃいでいる。

彼女たちの先にある階段の踊り場には、大きなステンドグラスが、壮大な神話を物語って輝いている。

「本当に、こんな立派なホテルが格安なの？心配になって来た」

タカに肩を借り、松葉杖で歩きながら、セインは口元を引きつらせた。

「フロントで聞いて来ましたけど、あの値段で大丈夫ですぜ。心配しなさんな旦那」

「そうそう。心配しすぎは怪我の元だぜ？」

ギャンガルドもタカも、肝が据わっているのか、大雑把なだけなのか。

「両方だろうな」

ぼつりとつぶやいたセインだった。

「預けた馬の納屋はあっち？」

フロントに着くなり、セインはクレイの所在を確かめる。

「ええ。お預かりしましたお馬なら、飼葉と水を差し上げております。いつでもお会いできますよ」

「ありがとうございます」

「いいえ。お部屋は三つでよろしいですね？では、書類にサインを。・・・こちらが、お客様の鍵となっております。係の者がご案内致しますので、ごゆっくりどうぞ」

フロントボーイが言うなり、別のボーイが、セインの様子から気を使ったのだろう、車椅子を引いて来る。

「こちらへどうぞ」

「へえ。こついうのも準備してあるんだ」

「足の不自由な方も、お出でになりますので常備させていただいております」

セインが車椅子に座ると、ボーイはそのセインの座った車椅子を

押しながら、全員を用意された客室へと案内した。

途中で乗ったエレベーターも、木製でデザインが古く、階を表示する案内板が半円になっており、針で示すタイプのもだった。これも、可愛いと女性陣に好評だった。

部屋の説明を受け、鍵をボーイから受け取り、チップを渡して帰らせると、キャルとジャムリムは部屋割もそこそこにして、買い物に出かけてしまった。

「よっぽど楽しみにしていたんだねえ」

荷物を任されて、男三人取り残された。

「部屋割なんだけど、僕とキャルはいつも通り二人で一部屋もらうよ。ダブルの部屋を三つ取ったんでしょ？残りの二部屋はそっちに任せるよ」

セインがボーイから貰った鍵を二つ、タカに渡す。

「まてまて。賢者ひとりにさせられるか。何かあつたらお嬢に換金されちまう」

言いながら、ギャンガルドは、セインが入ろうとした部屋の扉を閉めてしまった。

「ちよつと。何するのさ」

ムツとして睨みつけるが、ギャンガルドはニカリと笑って、

「こっちの部屋で、男三人、親交でも深めようや？」
などと言う

「悪いけど、僕、君との親交は充分に深めているから遠慮するよ」

「えー。カードするにしたって、タカと二人じゃつまらねえ」

「・・・ポーカーで僕からお金巻き上げようって腹でしょ？言っとくけど、僕強いよ」

にっこりとセインが笑う。

「・・・カードゲームなんざ知らないと思ったのに」

「お生憎さま。タカ、悪いんだけど、荷物、持ってきてくれる？」

言うなり、器用に車椅子のまま扉をあけて、中に入ってしまった。
「ああ、ポーカーがしたいなら、さっきのホテルの下のラウンジに

でも行けばいいよ。きつと暇な旅行客が相手してくれるんじゃない？」

タカからキャルの鞆を受け取りながら、セインは室内を見渡している。どうしても付き合ってくれそうにない。

「じゃあ、ごゆっくり」

最後にまた拒絶の笑顔を残して、部屋の扉を閉めてしまった。

「キャプテン。旦那に付き合ってもらいたかったら、たぶんお嬢と一緒にでない」と

「やめとくよ。賢者にボロ負けすんのがオチだろ。あー。つまんねえ」

つまらないと言いながら、顔は嬉しそうだ。

これはまた、何か企んでいるのかもしれない。

諦めの悪いギャンガルドの、ギャンガルドらしい一面だ。周りは迷惑なのだが。

「つまんねえから、荷物置いたら、さつさと町に出るぞ」

「姐さん待たないんですか？」

「待ってたら日が暮れるだろうが。出先でつかまえりゃ良い」

セインのことは別にして、ギャンガルドもこの町には大いに興味があるらしい。

さつさと部屋に荷物を放り込むと、部屋のチェックもそこそこに、さつさとタカを連れて町へと繰り出した。

ホテルに一人、残されたセインは、ギャンガルドたちが出かけたことは気配で分かったので、安心して部屋でのんびりすることに決めた。

開け放った窓からは、家々の屋根が連なり、その向こうに、やはりレンガの壁が見える。

入り込む風は緩やかで気持ちがいい。

「さて、うるさいのもいなくなったことだし、キャルが帰ってくるまで、いくらか足を治しておかないとね」

セインは動かせない足をさすると、車椅子をベッドへと寄せた。

セインロズドの姿を取れば、早めに完治できるだろう。

セインは伝説の聖剣、大賢者セインロズドの本体であり、鞘でもある。剣の姿を取ることができ、その姿なら、人の姿でいるよりも、ずっと早く怪我を治すことができる。

構造は、本人にも分かっていない。

車椅子に座ったまま、セインロズドになることもできないので、ベッドに横になろうと両腕に力を込めた時だった。

誰かが、部屋の扉をノックした。

「・・・誰だろう？」

知っている誰かの気配のどれでもない。

「ホテルの人かな？」

降りようとした車椅子の車輪の向きを変え、扉に向かう。

「はい？」

返事をすれば、聞いたことのある声があった。

「突然失礼致します。私、駅馬車でお世話になった者ですが」

扉を挟んで、少しこもって聞こえる声は、駅馬車で知り合った、初老の男性のものだった。

「ああ。どうしました？」

どうやってか、ホテルの場所を探して会いに来たらしい。

他の乗客を、強盗団から守ろうと背中に庇っていた姿を思い出す。あの勇敢な男性が、わざわざホテルを探して尋ねてくるなど、どうしたことだろうか。

セインは快く扉を開けて、男性を迎え入れた。

奇妙な条例

「帰るわ」

ジャムリムと、広場につながる大通りの洋品店でショッピングを楽しんでいたキヤルが、急に顔を上げた。

「どうしたんだい？いきなり」

驚いたジャムリムが、手にしたアクセサリーを棚に戻しながらキヤルの顔を覗き込んだ。

「あれ」

キヤルが指をさした先は、店の外が見える大きな窓。その窓の向こうには、ギャンガルドがいた。

ジャムリムが手を振ると、気が付いたギャンガルドも軽く左手を上げる。

「何？彼のこと、そんなに嫌いかい？」

からかうように訊いてみれば、キヤルの頬はぷくりと膨れる。

「別に、嫌いつていうわけじゃないわ。単に信用できないだけよ」

それは本当なのだろう。キヤルの性格からして、嫌いな人間と旅など出来っこない。

「それに、あの顔見ているだけで、何だか腹立たしくなってくるのよね。不思議だわ」

そう言いながら、店に入ってくるギャンガルドを凝視して、視線から外そうとしない。

そんなキヤルの様子に、ジャムリムは思わずくすくすと笑いだす。

「警戒心丸出したねえ」

「だって、警戒しているもの」

そんな会話を聞いていたのか分からないが、一見爽やかな笑顔で、ギャンガルドはタカを連れて店の中に入って来た。

「ギャンガルドったら、キヤルちゃんに何かしたのかい？」

小さく笑いながら、ジャムリムはギャンガルドの額をぺしりと叩

いた。

その腕を掴んで、ギャンガルドは眉尻を下げる。

「なんで俺がお嬢に何かしなくちゃなんねえんだ」

腕をつかんだ手を離して、両手を上げて降参のポーズをとった。

そのギャンガルドを、下から見上げつつキヤルが睨む。

「そのわざとらしい仕草と、胡散臭い笑顔が駄目なのよ」

「ずいぶんな言われようだなあ」

「そう？普通だわ」

男前で、日に焼けて筋肉も逞しく、たいていの女性なら、ギャンガルドのフェロモン丸出しの笑顔で頬を染める。しかし、そのギャンガルドのフェロモンは、キヤルに対しては全く効いたためしがない。

「ま、お嬢には大人の俺様の魅力が分からないのさ」

ふう、と、これまたわざとらしく溜息をつけば、急に耳を引っ張られた。

「あたしに対して魅力的ならそれで良いだろう？」

「ジャムリムが、悪戯っぽく睨んでいる。」

「もちろんさ」

慌てて、白い歯を見せて微笑んでみたギャンガルドだったが。

「キヤルちゃんが信用できないっていうの、なんだか分かる気がする」

「ジャムリムも微笑んで、引っ張っていた海賊王の耳を離れた。」

「おいおい。お前まで勘弁してくれよ」

「ふふ。良いんだよ。そういうところがギャンガルドなんだから」

言いながら、ジャムリムはギャンガルドの鼻の頭を指で弾く。

弾かれた鼻をさすり、ギャンガルドは先ほどよりも、さらに眉尻を下げた。

「ジャムリムには参るよ」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

そうして軽くキスを交わす。

「あーあ。やってらんねえや」

そんな二人から視線をそらして、タカがポリポリと頭を掻いた。キヤルはキヤルで、腕を組んで仁王立ちでギャンガルドを睨んでいたのに、タカを相手に笑顔に戻った。

「タカはずつとギャンギャンと一緒にだったの？」

「買い物もあつたし、結構キャプテンって運が強いから、ジャムリムの姐さんとお嬢に、絶対町で会うだろうなあと思って」

たしかに、この大きな町の、沢山並ぶ店の中で、二人を見つけ出したギャンガルドの勘は野生の獣並みかもしれない。

「運が良いとかいふ問題じゃない気がするわ」

ぼそりとキヤルは呟いた。

「そついや、お嬢」

ジャムリムの肩を引き寄せて、ギャンガルドがキヤルへ振り返る。

「何よ？」

「この町が妙なの、お嬢なら気づいてんだろ？」

「ま、そういう所がギャンガルドよね」

大きな町に着いたというのに、ギャンガルドが酒も飲まず、ギャンブルもせず、ジャムリムやキヤルを探すためだけに街中をうろついていたとは思えない。

「面白いが、つまらん町だぜ」

四人が居るこの店もそうであるのだが、どの店も、観光客に向けているのだろう。看板に、必ず一言添えてあるのだ。

『条例により、当店は夕方五時に閉店させていただきます』

今まで様々な町や店を利用したが、こんな奇妙な条例は見たことも聞いたことも無い。

「商売つて、仕事帰りの人たちが帰るくらいの時間が書き入れ時よね？」

「レストランでディナーも食べやしねえぜ」

ギャンガルドが酒を飲もうと、ホテルの一階に降りた時、やつぱりそんな看板が掲示されていた。ホテルで夜に酒を出す店が無いというのは、まず滅多にお目にかかれない。というか、無い。

一番儲けが入りやすい接客サービスだからだ。

旅行者は酒を口にし、疲れを癒そうとする事が多いものだし、庶民の一番手軽な娯楽の一つでもある。

それで、食事はどうなっているのかとホテルマンに訊ねれば、「ホテルのサービスは特別条例により許可を頂き、五時以降でもきちんとしております。ただ、レストランは許可を頂いた件とは別になつておりまして、ディナーは各お部屋に配膳させて頂いておりますので、ご安心下さい」などと微笑まれて終わった。

「ホテルのラウンジの意味があるのかねえ？」

首をかしげるジャムリムに、キヤルも一緒になつて首をかしげる。「大通りのお店全部の看板だつたり掲示板だつたり、そんな事が書かれているのよね。五時に閉店しなければならない理由って、なんなのかしら？」

喫茶店、キャンディショップ、ブティック、レストランや、果ては道端の outlet にまで掲示されていた。

「役場に行つて聞くのも良いけど、面倒だね」

言つたり、キヤルは奥でこちらの様子をうかがっている若い店員を呼びつけた。

「ねえ。今の会話聞いていたでしょ。私たち旅行者なのよ。教えてもらえないかしら？」

につこりと、お出かけ用のスマイルで話しかけているのに、セリフの端々になんだか圧力が見え隠れしているのは気のせいではないらしい。引きつった営業スマイルを返してしまう若い店員は、まだまだ修行が足りていない。

「町のすべての営業は、基本的に五時までなんですよう」

いかにも服飾系のショップ店員です、という、雑誌から切り抜きでもしたかのようなスタイルの店員は、それでも商売のチャンスと

ばかりに答える。

「そんなことは分かっているのよ。私が聞きたいのは、なぜ五時に閉店してしまうのか、ってことよ」

呆れたようなキヤルの眼光に、店員は一步引いた。

「条例でそう決まっているからですよ」

キヤルが一步前に出た。

「だから。看板に書いてあることは知っているのよ。どうしてそんな条例が制定されたのか聞いているの。私たちの会話聞いていたわよね？」

「うう、六時には、家族団らんを取らないといけないからですよ」

店員はすでに涙目である。

「何それ？」

これ以上、この店員に話を聞いても、余計に面倒臭いと判断したのか、キヤルは気に入って目をつけていた髪留めをその店員から購入して、店の外へ出ようと全員を促した。

ジャムリムはいつの間にか、しっかりと洋服を何点かギャンガルドにおねだりしていたようだった。

「六時に家族団らんって、どういう事かしら」

若い店員の事だ。彼女なりに簡単に分かりやすく、今どき風に脚色されているだろう。

「あれ？タカじゃねえか。皆で買い物かい？」

ぞろぞろと、大通りを歩いていたものだから目立ちでもしたのだろう。小さい少女と美美女のカップルと禿げ頭の男といった、世にも奇妙な集団に、気安く声をかけてきたのは、あの御者だった。

「おお！なんだ、こんなすぐに再会するなんて、縁でもあるのかね」
タカがうれしそうに返事を返す。

「家族にはもう会って来たのかい？」

「おお。今日は久々に一家団らんよ」

そういえば、この御者は、この町の出身だった。

「あのよ、この町の出身のお前さんに聞くのもなんだけどよ」

タカがそう切り出せば、御者はもう分かったようで、ひとつ溜息をつくくと、少し寂しそうに笑った。

「あー、変だろ？この町」

「いや、変っていうか。まあ、店がほとんど五時に閉店って、やっていけないのか？」

率直な疑問だ。

「他の町じゃ、せめて七時だし、飲み屋は下手すりゃ朝までやってるもんだ。俺もそれが普通だし当たり前だと思ってるが、この町は違う」

御者は言いながら、くい、と、通り沿いに設置してあるベンチを指で示した。座って話をしたいらしい。

御者を真中に挟んでベンチに座ると、御者はきよろきよろとあたりを見回し、小さな声で説明を始めた。

「この町は家族っていう枠に囚われているのさ」

そんな一言から始まった。

この町の領主である城の主、パンナは夫と子供たちと共に暮らしているのだが、生い立ちが不幸だったからなのか、とにかく家族、という集団にこだわっているというのだ。

つまり、家族は寝食を共にし、朝六時に家族全員が起床して六時半には朝食を取り、仕事のある者は仕事へ出かけ、家に残る者は家事をこなす。そして、必ず一家揃って午後六時には夕食を食べ、週に一度は家族会議なるものを開かねばならないのだという。

これらの事柄が出来ていなければ、その一家は家族の歯車が狂っている、という理由で、町の行政から指導が入るらしい。

「六時に食事をしなければならぬから、五時にはみんな店を閉めて家に帰るのさ。これが、この町の奇妙な営業時間の真相だよ」

何とも言えない空気が、あたりに漂った。

「余計、訳が分からないわ」

人の家庭にまで口出しする行政とはいかかなものだろう。しかも、

めちやくちやな内容である。

「パンナ様は幼少のときにお父様、前代の領主様を亡くされていて、ご家族も多かつたからそれなりに大事にされて育ったんだが、お寂しかったんだろうなあ」

「そういう問題かよ」

タカが眉をしかめた。

「一番大変なのは、俺たち町の住人より、城のお嬢様だろうよ。パンナ様は末の弟君を可愛がって、お嬢様には厳しくされているらしいからな」

「なにそれ？自分の家族だって、その、歯車？噛み合っていないじゃない」

「そうなんだよなあ。それ自体に、パンナ様がお気づきになっていらっしやらないから、こんななんだよ」

御者は深く深く、息を吐きだした。

「俺がこの町を出たのも、この条例が嫌で嫌で。家族一緒に全部行動、全ての中心は家族。それって、重いだろ。しかも押しつけられてだぜ。家族って、そういうもんじゃないだろ」

家族。

そんな集団とは縁遠いキヤルだが、御者の言いたいことは何となくだが分かる気がする。

たとえば、セインは、今やキヤルの家族ともいえる気がするが、そんな風に押し付けられた存在ではないし、一緒に旅を続けているから、自然と食事は一緒にとってはいるけれど。

そう。一緒にいるのが自然で、勝手にそうなっているのが、当たり前なのがセインとキヤルの関係だ。

家族とは言えないような気もするし、言えるような気もする。

「俺たちにも一緒に飯食う家族みたいな仲間はあるけどよ。こうでなきゃ駄目って決めつけはねえけどなあ」

考え込むキヤルの隣で、タカが唸った。

「ま、端的に説明すれば、基本的に小さい集団で、血縁関係にある場合が多いのが家族ってもんだ。ここの領主様が、何を思って家族団らんの時間を無理やり作らせてんのか知らねえが、やれ、って言われてやらされている方が、家族の歯車ってやつは壊れちまうんじゃないねえの？」

ギャンガルドが、つまらなそうに背伸びした。

「飯食う時間も決められて、良くわからん家族会議とやらも開催を決められて、大変だな」

「そうなんだよな。家族会議だったって、家族で何をそんなに話し合う必要があるのか分からねえ。誰かが病気したとか、そういう場合なら、話し合いも必要だろうけどよ。家族ってな、いちいちそんなことしなくたって、普通に会話してりゃいいんじゃないかねえのか」

御者はまた、ひとり溜息をこぼす。

「俺は自分の両親や兄弟を大事にしたいって思うし、会えば嬉しいし、やっぱり家族だなんて思うんだ。でも、押し付けられんのは嫌だ」

「そりゃ、そうだろうなあ」

「この条例が元で、実際崩壊した家族もあるが、パンナ様は泣きながらそれを責め立てて、結局町から追放しちまった。パンナ様のご家族も、何度も説得しているらしいんだが、理解して下さらないらしい。悪いお方じゃないんだが、どうも自分の思い通りにならないと駄目な方で」

全員が押し黙った。

何とも言えない空気が、再びあたりを満たす。

「わがままなだけなんじゃ・・・」

「あ。それ言ったらこの町は終わるから」

全ては、領主のパンナの、思い込みによるお節介なのだという。

「まあ、労働時間が短くって助かる、なんていう奴もいるけどよ。

パンナ様に心酔して賛同している奴らもいる。福祉はしっかりして

いるからな。けどよ、大概の連中は、チャンスさえありや、この町から出ていくのさ」

この町に到着したときには、あんなに嬉しそうだった彼の顔は、暗く沈んでしまっている。

「ああ。それで、この町、なんだか元気がないのか」

全ての店が夕方には閉店してしまい、六時には各々の家に帰らなければならぬこの条例の下では、娯楽も、他人同士の憩いの場も、すべて規制されてしまう。

「友人と飲みにも行けねえのか」

「そういうことさ」

行くとしたら、休日になる。しかし、休日が合うかと言えば、同僚でもない限り、合わないことの方が多いだろう。

「あー、……そりゃ、つまんねえなあ」

「だろ？」

全員で一斉に頷いた。

「まあ、そういうことだ。旅行者はこの条例には引つ掛からねえが、店は全部閉まっちゃうからな。酒が飲みたいなら、こうして俺みたいに、今のうちから酒屋へ買い出しに行つた方が良いぜ」

がさりと、御者は持っていた紙袋を持ち上げた。中身は酒瓶らしい。

「酒屋はどこだい？」

「ああ、その通りの、あの緑の看板がそうさ。俺の名前を出せば、安くしてくれるぜ」

気前よく、酒屋の場所を教えると、彼は四人の知る、馬車を駆っていた時の嬉しそうな笑顔に戻って去って行つた。

なんだかんだで、やはり家族に会うのは嬉しいのだろう。

「なんか、あんまり長居しちゃいけない気がするわ」

御者を見送りながら、キヤルが肩を落として呟いた。

「どつちにしたって、俺たちや長居出来ねえだろうが」

「まあね」

いつもなら勢いよく食ってかかってくるはずのキヤルの反応の鈍さに、ギャンガルドは思わずキヤルの顔を覗き込んだ。

「なんだか、眉間にしわを寄せ、複雑な表情だ。」

「何だ、お嬢。家族に憧れでもあったか？」

「げいん！」

「ぐは！！！」

鼻にキヤルの頭突きをくらって、ギャンガルドがよろめいた。

「帰るわ！セインが待ってる」

くるりと踵を返し、傍の出店で揚げ菓子をいくつか買つと、キヤルは先ほどとは打って変わって、鼻歌を歌いながらホテルへと歩き出した。

「ギャンガルド？」

「何だ？」

名前を呼ばれて振り向いた途端に、ジャムリムに耳を引っ張られた。

「いててててて！！！」

「デリカシーの無い男は嫌いだよ」

ジャムリムは怒っていた。

「あーあ。見てらんねえや」

タカはぼりぼりと頭を掻き、結局ワイワイと賑やかな三人に紛れてホテルへと向かうのだった。

しかし。

ホテルに辿り着いて、セインの待つ部屋へ入ったキヤルが、青ざめた顔で飛び出した。

「どうした？お嬢」

まだ部屋に入ろうとしている状態だったギャンガルドが、キヤルの様子に驚いて振り向いた。

「いない・・・！！」

「は？」

「セインがないの！！」

一同から、一斉に血の気が失せた。

騒動の始まり

一度深呼吸して、ギャンガルドがキヤルの頭を撫でる。

「賢者がいないって、出かけているだけかもしれないねえだろ？落ち着いて考えてみる」

言いながら、ギャンガルド自身も自分を落ち着かせようとしているようだった。キヤルが根拠なく、物事を判断するような子供でないことを、承知しているからだ。

しかし、いなくなつたというのは、子供ならまだしも、あのセインである。

「滅多な事でもない限り、大丈夫なのが賢者だって、お前さんが一番よく知っているだろうが」

言いながら足早に、先ほどキヤルが飛び出した部屋へと急ぐ。

ドアが開け放たれたままの部屋の中には、いつもの大きなキヤルの鞆が、ベッドの横に無造作に置かれたままになっている。セインが使っていた松葉杖と、車椅子が残されて、なるほどセインの姿は影も形も無い。

視線を移す。部屋にひとつしかない窓も、内側からカギがかけられており、カーテンが日の光を取り入れるために開かれている以外は、開けられた様子はなかった。

ひやりとした汗が背中をつたうのを、ギャンガルドは無理に無視した。

「おいおい。杖も車椅子も無しに、両足が不自由な状態で出て行つたつてののか？」

「どうやってよ?!セインがいくら器用だからって、そんなの不可能よ!」

キヤルが叫んだ。

「旦那の足、じっとしていれば治るって言ってましたぜ?それだったら、もしかしたらとっくに治って……るわけ、ないか」

タカが、なんとか慰めようと口を開いたが、セインの包帯を替えていたのはタカ自身だ。いくらセインが常人よりも頑丈で、怪我の治りが早いといっても、たかが数時間の間に回復するような怪我なら、とつくの昔に治っている。セインの足がどういう状態なのか、一番よく知っているのはタカだろう。

松葉杖も車椅子も無しに、人の手も借りずに移動する手段なんて、あとは這いずるしかないことくらい承知していた。

それに、キヤルの鞆が放置されているのが、一番違和感があった。この中には、キヤルの身分証明証にもなるハンターパス以外にも、大事なものが沢山詰まっている。

セインが放置するはずがないのだ。

「ほらほら。突っ立ってないで男ども！」
べしべしと、ギャンガルドとタカの背中を叩いたのはジャムリムだ。

「セインさんが消えたって言うなら、誰かが連れて行ったとしか考えられないじゃないか。あの人は今、自分で立って歩けないんだから。松葉杖と車椅子がここにあるなら、他に移動できる手段は？クレイはいるのかい？」

「そうよ！クレイ！」

言うなり、キヤルは走った。

ホテルに到着した際、セインがクレイの居場所を訊いていたのを思い出したのだ。

「あの！お客様！」

物凄い形相のまま、物凄い速さで、フロントを横切る小さな少女とその一行に、ホテルボーイが何事かと声をかけた。

「ごめん今忙しいの！」

「すまねえな、後で話があるからよ」

「じゃ、またね」

ボーイを見もせず、一行はホテルの中庭へと飛び出した。

「クレイ！いる？！」

大声に、賢い馬は嘶いて応えた。

セインの愛馬は、しっかりとホテルの厩の中に居た。

「クレイもおいてけぼりを食ったのね」

落ち着かない様子で、ががつと蹄で地面を何度も蹴って、クレイはまた嘶いた。

「よしよし。大丈夫よ。ほんと、引っこ抜くんじゃなかったって、何度思わせるつもりかしらねあのメガネのっぽ」

クレイの鼻面を撫でて、キヤルはぼそりと呟いていた。

「心配でしようけど、クレイはここにおいて頂戴」

キヤルがなだめると、言葉が分かるかのように、クレイはぶるぶると顔を振った。

「大丈夫よ。あのバカを背負って走れるのはあんただけなんだから、いざとなったら手伝ってもらうから安心して」

ひひひん！

「あ。笑った」

クレイはぱちぱちと瞬いて見せた。承知した、ということらしい。

「ありがとう」

馬の鼻面に、ちゅ、とキスをすると、キヤルは勢いよく振り向いた。

「どうすんだ？お嬢」

「決まっているわ。探す！」

「・・・まあ、それしかないわなあ」

来た道を、ずんずんと、来た時と同じ速度で突き進む少女の後ろに、やはり同じように大人三人が続いて、ホテルの中へと戻った。

戻るなり、きよるきよるとキヤルが周りを見渡す。

あわててフロントボーイが飛び出した。先ほど、声をかけてきたのと同じ人物だった。

「お客様、何かご用がございますか？」

普通に接客用の微笑を張り付けたボーイは、フロントのカウンター越しに少女を覗き込んだまま、顔を掴まれた。

「あ、あの？」

小さな両手で両頬を挟まれたまま、身動きが取れない。

「ご用も何も、用が大有りだわ」

「は、はあ」

「あなた、うちのメガネのつぼ、見なかったかしら？」

鼻先まで顔を引き寄せられて、ボーイの腹はカウンターの上に乗った。足が浮きそうので、つま先立ちをしたら攣りそうになった。

「め、メガネのつぼ？」

「両足が不自由な背の高い男なんだけど」

そこで、彼はようやく、本日一人だけ車椅子の使用を許可した客がいたことを思い出した。

「ああ！車椅子の方ですね？今日はお出かけになられていないと思いましたが」

自分の言葉を聞くなり、キャルが表情を変えたのを見ると、ボーイは眉をしかめた。

「いらつしやらないのですね？」

こくりと、言葉もなく頷くキャルに、ボーイも何かを悟ったのか、こくりと頷き返した。

お待ちください、と言うと、ようやく小さな手が自分の顔を解放してくれたことに安堵しながら、フロントの奥の、従業員室を覗き込む。

「誰か、メガネをお掛けになった背の高いお客様をお見かけしていないか？」

「えー？見てないですねえ」

「見てません」

「さー？」

そんな声が聞こえてくる。

「あれ？俺がご案内した車椅子の方ですか？」

「ああ、お前がご案内したんだっけ」

会話を交わしながら、フロントボーイが、見たことのあるドアボ

ーイを連れて戻ってきた。

「そのお客様なら、お部屋へご案内した後はお見かけしておりませんが、お会いしたいと訪ねて来られた方がいらっしやいました」

ドアボーイが言うなり、キヤルもタカも、ボーイに飛びついた。

「あ、あのっ？くるしっ！」

詰襟の襟元をぎゅうぎゅうに掴まれて、息が詰まったらしい。

「お客様！落ち着いてお客様！」

飛びついた二人に、フロントボーイが飛びついた。

「冷静に！冷静にお願いいたします！」

「どこのどいつ！そいつはどこのどいつなの！」

「おら！隠しだてするとタダじゃって痛て！」

ぼかぼかと、タカとキヤルの頭の上に大きな拳が落ちた。

次に、ベリベリ、と音がしそうな勢いで、ドアボーイが二人から引きはがされた。

「頭冷やせ。お前ら」

ギャンガルドだった。

「悪いね。いなくなっちゃったのが、俺たちの大事な連れでね。足が不自由な分、心配なんだよ。分かるだろ？」

にかりと笑った。見えた白い歯が光ったような気がした。

ボーイ二人は、男が発する妙な圧迫感に気押されながら、お互いの手を取り合ってこくこくと頷いた。

「あの、お客様たちがお出かけになられてから、そんなに長時間は経っていないかと思えます。初老の男性がお見えになられまして、失礼、禿げ頭の男性と、私が言ったんじゃないやありませんよ。金髪の少女と、メガネの、背の高い男性と、黒髪の美女と、日に焼けたハンサムの御一行をお探しだとかで」

「初老？」

「え、ええ。ちょうど、お客様たちの特徴と一致しましたので、お部屋番号をお教えしましたが」

タカの特徴だけ『禿げ頭』だったのが何とも言いようがなかった

らしく、丁寧に詫びを入れるあたり、このホテル従業員は普段から就業態度は真面目なのかもしれない。

キヤルは口元に手を当てて、眉を吊り上げた。

「ありがとう。他に質問をいくつかいいかしら？」

挑むような視線に、ドアボーイも居住まいを正す。

「ど、どうぞ」

「初老の男性というのは、中肉中背の、身なりは結構良さそうな感じの人よね？」

「え、ええ。やはりお知り合いで？」

「・・・知り合いつていう内に入るのかしらね」

視線を流すと、キヤルは考え込むような表情のまま、質問を続けた。

「他に、ありきたりな質問だけれど、怪しい行動をしているような奴らは見なかったかしら？例えば、大きくて長い袋を担ぐかして、運ぶような行動」

「大きくて長い・・・」

ドアボーイが考え込むと、フロントボーイがそつと手を挙げた。

「あの。もし、誘拐をお考えでしたら、もしかしたらなんですけど、しどろもどろに説明するには、ホテルのリネンなど、クリーニングに出すときに使うカートがちょうどいいかもしれず、先ほどルーム係が一台足りないと報告に来たばかりだという。

「私もルーム係と一緒に探していたところだったので、もしかしたら」

「それだ！」

言い終わらないうちにびしりと指を差された。

壁の街の娘

「そのカートはどこに集められるの?!」

「収集場所は一階の裏口近くの倉庫です。ご案内します」

さつと、踵を返すフロントボーイを、ギャンガルドが片腕を挙げて制止させた。

「お前さん、さつきから用量が良いが、心当たりでもあるのかい?」
海賊王の言葉に、キャルはハツとした。

そういえば、テキパキとすすぎていると言っていていくらい、このボーイの行動は、こちらに都合がいい。

ホテル側としては、宿泊客が行方不明になったなど、認めたくないはずだし、そもそも、連れが誘拐されたかもしれないなどと、本気で信じる方が一般的におかしい。こういう場合は、騒ぐ客を宥めて、念のために警官が役人を呼ぶのが普通ではないか。

「お疑いになられるのは当然のことでございます。当ホテルからの説明をご希望でしたら、後ほど支配人をお部屋へ向かわせますので、ご安心ください」

フロントボーイは接客用の微笑みを顔に張り付かせたまま、丁寧に答えた。

「ふん。訳ありみてえだな」

「申し訳ございません」

ギャンガルドの言葉に、もう一度丁寧に頭を下げると、急ぎましよう、と言つて、全員を裏口まで案内した。

なるほど、クリーニングの業者に引き渡すためだろう、丈夫な帆布で作られた、車輪付きのカートが何台か並べられている。

リネンや汚れものを一気に回収するため、長身のサインでも膝を曲げればすっぽり入ってしまうような大きさだ。

それらを、ボーイはぶつぶつと呟きながら、もう一度数を確認し始める。

「おかしいな」

眉をしかめるボーイに、キャルが怪訝な視線を向けた。

「どうしたの？」

「いえ、先ほどは確かに一台足りなかったのですが、今はちゃんと数が足りているのです」

言うなり、裏口の外で作業していた小太りの女性に声をかけた。

「マーサ！カートの数が合っているようなのですが。心当たりは？」

洗濯物を仕分けしていたルーム係らしい彼女は、ひよいと顔を上げて、人の良さそうな笑みで返した。

「ああ、さつき外に放置されていたのを見つけたんですよ。これが終わったら報告に行こうと思っていたんですが、丁度良かった」

「見つけた場所はどこですか？」

ジャムリムが何でもないフリをして訊ねる。

ホテルの従業員でもないジャムリムから質問されて、彼女は一瞬不思議そうな表情をしたが、一か所を指さした。

「あの場所です」

全員が、指の先を追う。

そこは、荷馬車の停車場だった。その手前に、まるで置き忘れたように放置されていたという。

「これは」

「決まりね」

表情をゆがめるホテルのボーイと、その一点を見つめるキャルの表情は対照的だ。

「まったく、どこの誰だ？面倒臭いことしやがって」

顎をさすりながら、ギャンガルドだけが言葉とは裏腹に、楽しそうにやりと笑った。その眼光は既に鋭い。

「キャプテン、面白がつてる場合じゃねえです」

こっそりタカに耳打ちされたが、ギャンガルドは構わない。

「奇妙な条例の町で、訳ありのホテルに、誘拐ときたら、当然楽しいだろうが」

「まあ、キャプテンの好きそうな事ばかりですけど」
「だろ？」

夕方は仕方がないとばかりに、自分の頭をポリポリと掻いた。
荷馬車の停車場に、いかにも不自然に放置されていたカート。

確かに、ホテルの中を怪しまれずに人間ひとり運ぶのに、これほど適した物はないだろう。カートの中にセインを詰め込み、ここまですんで馬車か何かで連れ去ったと推測される。

しかし、一体何のために？

「理由はいろいろ考えられるが、まあ、賢者が賢者だとバレたって事はなさそうだし。俺たちは旅の途中の、要するに旅行者だ。そんなヤツを攫って、誰が得をする？」

「そうですね。旦那、足が今動かせねえから不自由だし。余計に謎っすね」

海賊二人が話し込んでいるのに気づいたキヤルが、じつとギャンガルドを見つめる。

「なんだ？お嬢。俺様に見惚れてんのか？」

言った途端に、足を踏みつけられて、ギャンガルドが飛び跳ねた。痛む足をさするギャンガルドを尻目に、キヤルは考え込む。

「そうよね。事情を知らない連中から見たら、私たちは普通に旅行者だわ。でも、あの馬車で乗り合いになった乗客は、少なくともセインが剣の使い手だっていうことは知っているわね」

「それに、お前さんが銃の使い手で、二人ともに桁違いに腕前が良いつてことも、俺たち二人が拳銃持った奴と素手で渡り合えることも知ってる」

確認するように呟くキヤルに、ギャンガルドが追い打ちをかける。
「俺たちが戦い慣れしているのは実戦を見せちまったから、そりゃもう、話のタネにはなるだろうな」

にやりと、ギャンガルドが牙を剥くように笑った。

「もちろん、あの爺さんはそれを知っている」
では。

「腕が立つ人間が欲しかった？」

「多分な」

それで、剣の達人ではあるが、足が不自由で、人や馬の助けがないと満足に動けないセインを、比較的連れ出しやすいと狙ったのか。しかし、腕の立つ人間が何故必要なのか。

「それについては、わたくしからご説明致します」

唐突に、少しトーンの低い女性の声が響いた。

「皆様方には、大変な失礼とご迷惑をおかけ致します。わたくしがこのホテルの支配人、パムル・ヴェータ・デュナスと申します。以後、お見知りおきを」

丁寧に頭を下げ、こちらをまつすぐに見据える彼女は、美人、とまでは言い難いが、何か印象が強い。それは、平凡な彼女の顔立ちの中で、一際暗く光る瞳のせいだと気づくのに、さほど時間は必要なかった。

身に着けたロングドレスも、単調なものでフリルもレースも無い地味なものだったが、逆に彼女に似合っている。

しかし、そんな事などキヤルにはどうでも良かった。

「説明してくれる、って言ったわね」

「はい」

鋭いキヤルの声音にも、パムルは顔色一つ変えずに頷いた。

「ここでは何ですので、よろしければ移動しましょう」

キヤルが彼女から視線をそらすのを合図に、パムルは立ちつくすボーイに指示を出し、セインが居たはずの、キヤルとの客室へと向かった。

「申し訳ございませんでした」

目的の部屋の内部に全員が納まると、まずは深々と頭を下げられる。

「潔いのね」

半ば呆れたようにキヤルが唸った。

「当ホテルは、実を言いますとこのような事態が起こることを想定

して、わたくしが運営しておりますので」

下げた頭のまま、パムルが言う。

「は？そりゃどういふ事だ？」

ギャンガルドの眉がはねた。

人が誘拐されることを前提としてホテルを作ったとも言つのか。

「正確に言えば、優れた人物の誘拐事件が起こりうる状況が、この街の中では日常化している、という事です」

顔をあげたパムルの顔色は、先ほどと打って変わって青白い。

「優れた人物が誘拐される理由は？」

ジャムリムが先を促す。

「わたくしの弟の、家庭教師を務めさせるため」

全員が、一瞬間き間違いかと思った。

「は？」

「ですから、弟に優秀な家庭教師を付けて、教育をさせるために、旅行者の中から目的に合った人物を選び出し、誘拐するのです」

突拍子もない話だ。

全員が全員、もう一度、パムルの言葉を、頭の中で整理する。

「待つて。優秀な人物を攫って特定の人物の教育をしているっていうことよね？」

聞いた方が早いと判断したのか、キャルが口を開いた。

「はい」

パムルは、素直に応える。

「その特定の人物が、あなたの弟？」

「はい」

「あなたの弟にそこまでの理由は？」

「……弟は、少し精神的な成長が遅く、知能の遅れを心配され、また、それを不憫に思ったのでしよう。わたくしたちの母が、弟に少しでも良い教育を、と」

「あなたのお母さんって、もしかして……？」

パムルはこくりと、小さく頷いた。

「この壁の街の領主。パンナです」

ギャンガルドは眉間にしわを寄せ、夕方は頭を抱え、ジャムリムは大きく息を吐き出し、キヤルは怒りで顔が真っ赤になった。

「馬鹿な領主を持つと、その下で暮らす街の人たちは大変ね。それで？うちのセインが、あなたの母親に誘拐されたっていう確実な根拠はあるの？」

肩を震わせながら、キヤルがパムルを睨む。

「ホテルの従業員から聞き出した、あなた方を訪ねて来たという男は、母付きの執事で間違いありません。それから、新しい剣術の教師が見つかったのに、足が不自由らしいと城の使用人がこぼしておりましたので、間違いはないかと思われます」

パムルの声音は、少し震えているようだった。

壁の街の娘 2

従業員に、人数分の紅茶を用意させて、彼女は大きく息を吸い込んだ。

「まずは、失礼でなければ、お茶をどうぞ。一息ついてからお話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

どちらかといえば、落ち着きたいのは彼女の方であつたらしいが、フレーバーを仕込んでいたのだろう、紅茶に混じるバラのふくよかな香りは、ありがたいことに全員の気持ち落ち着かせた。

「申し訳ございませんが、この街の異常さには、皆様最早気がついておいでのことと理解しても？」

運ばれたカップをそれぞれ手にし、壁に寄りかかるなり、ベッドに座るなりで、全員で、部屋の中央に立つパムルを取り囲む。狭い部屋の中、意図したことはなかったが、彼女には十分圧迫感があるだろう。幾分、彼女の暗い瞳が揺れている。

しかし、それもキヤルには関係がない事だ。

「朝と夕の六時に、家族そろって食事を摂れ。あのバカげた条例のことよね」

きつぱりと、刺でも生えているのではなからうかと思わせる声音で言い放つ。

パムルはそつとキヤルの顔を見返し、小さく頷いた。

「そうです。その条例でもお分かりいただけるように、母は家族という集団にこだわり続けています」

「家族にこだわって、変な決まり事で人様を締め付ける理由が分からねえな」

睫毛をふせ、パムルは両手で持つカップの中の紅い液体を見つめた。

「本当に、申し訳ありません」

「さつきからそればかりだけど」

キヤルが睨む。

「母は、家族という集団を、異常に愛しているのです。それは、母が幼いころに、父親を亡くしていることに由来しますが……。その執着が、弟に向けられているのです」

つまりは、精神的に幼い息子へ、家族というものの象徴を見出し、ている、ということらしい。

「ですので、弟が成長することは、領主の家族である自分の一家がまとまる事であり、引いては領地全部が成長する事に繋がるのだと本気で思い込んでいるのです」

「・・・なんだそりゃ」

思わずタカが呟いた。

「おっと」

あわてて口をふさいだが、パムルはそれを見て微笑んだ。

「いえ。わたくしも、そう思いますのでお気になさらずに」
疲れきったような笑顔だった。

「つまり、領地を守り、弟が精神的にも、人間的にも成長するためには、優秀な家庭教師が必要だと思っているのです」

それは納得できる。

領主の息子というからには、将来はこのあたり一帯を治める領主になる存在なのかもしれない。そうでなくとも、この地を治める一端を担わせるつもりでいるのだろうから、その当人が子供じみた精神年齢では、領民はたまったものではないだろう。

問題は。

「待て待て。優秀な家庭教師が必要だっつーのは分かった。分かったが、何故誘拐だ？」

「そうなのです。誘拐なぞ、恐ろしいことをせずとも訳を話し、正式に雇い入れれば何も問題はないのですが」

タカの疑問に答えながら、パムルの眉間に皺が寄る。

「何分、母は思い込みが非常に激しいのです」

彼女の、カップを持つ手に力が入った。ぴしり、とヒビが入った

ような音がしたのは、この際気のせいだと思つ事にする。

「この街へ来るまでにご覧になつたでしょうから、分かるかと思いますが、我が領地はほぼ荒れ野。人が住んでいる地域はこの町を含めても、ほんの僅かです。必然的に、領内に優れた人材は少ない。ではどうするか。他の領地に頭を下げてでも家庭教師にふさわしい人物を招くか、或いは、旅人から探し出すか」

この壁の街の領主は、後者を選んだ。

幸い、この街は壁のおかげで難攻不落を謳われ、オアシスを元に生活も潤い、観光に訪れる旅人も多い。なら、わざわざ使者を出し、高価な手土産を持って他の領地に頭を下げに行かずとも、網を張っているだけで人々は往来する。

「でも、旅人というのは、普通目的があるから旅をしているものです」

そこまで聞いて、キヤルが盛大に唸つた。

「あー！いい。いいわ。なんとなくわかつた」

大げさに頭を振り、頭痛がするとも言いたげに、額を抑えた。

「あれか。優秀な人材を見つけたところで、家庭教師を断られたんだな」

眉を吊り上げて頭を抱えるキヤルの代わりに、ギャンガルドがパムルの言わんとしていたことを言い当てる。

「そうです。弟がひとり立ちするまでの間、という期間を設けたところで、いかに高待遇を提案しようと、城に留まってくれる人物は少なかったのです。中には、高給に喜んで残つて下さるような学術者もいましたが」

「だからって、単純に誘拐して無理に家庭教師をさせているっていうのかい？」

ジャムリムも、呆れたように肩をすくめた。

「分かっています。誘拐なんてしたところで、そんな扱いをされた人々が、いったいどんな態度をとるか。その行為がいかに非常識で犯罪であるのか。しかし、母は理解しないのです」

「・・・悪いが、弟よりも、あなたのお袋さんを医者に見せた方が
良いんじゃないかねえのかい？」

ふるふると、肩を震わせるパルムに、タカがそつと同情の視線を
送る。

「父もわたくしも、それは考えましたが、母はあれでも領主です。

医者が恐ろしがつてしまつて・・・。あとはもう、家族で出来るだ
けの事をしよう」と

「それで、このホテルか」

こくりと、彼女は小さく頷いた。

内装が豪華で接客も一流。おまけに運営は領主の娘で信用があり、
対して料金が安いとなれば、このホテルに宿泊する旅人は必然的に
増える。そうなれば、自分の膝元で誘拐を防ぐ、もしくは発覚して
もすぐに行動に移せると見込んでの運営らしい。

客が誘拐される事を前提としたホテルなのだから、パルムが居な
い間にこのホテルの切り盛りをしているらしい、あのカウンターボ
ーイの言動は、これでしつくりする。

「他にも、いくつか宿泊施設を構えています。わたくしの経営でな
い施設には、協力してもらっています」

そこで、パルムは一気に紅茶を飲み干すと、大きな溜め息をこぼ
した。

「我が家の騒動に、お客さま方の大切なお連れ様を巻き込んだ事は、
なんとお詫びしてよいものか」

暗い瞳が、さらに暗くなつたようだった。

しかし、キャルは俯いてしまったパルムに、小さな胸を反らせて、
ずいと詰め寄つた。

「お詫びなんていらないわ。貴女、それでどうするつもりなの」

怒つた口調に、そつと顔を上げる領主の質素な娘は、それでも暗
い瞳に、なにか決意の色を浮かばせた。

「わたくしの家族の責任です。わたくしが、なんとか母を説得して、
連れ去られた方をお連れしてまいりますので、皆様はここでお待ち

なっていてくださいませ。もちろん、費用は当方で負担させていただきます」

拳を震わせながら力んでいきった彼女の額を、小さな指が素早く襲った。

「あいた！」

不意打ちでデコピンされて、パムルは額を抑えてのけ反った。

キヤルが、ふん、と、鼻息も荒く彼女を睨んでいた。

「悪いけど、待っているのは性に合わないの。それに、貴女のお母さんには一言言ってやらないと気が済まないのよね」

小さな少女に手痛い攻撃を食らったのだと理解するのに、多少時間を要したらしいパムルは、キヤルの視線をまともにつけて、目をぱちぱちと瞬かせた。

仕草も、やたら低姿勢なところも、姿恰好も、まるで大きな街を抱える領主の娘とは思えない彼女は、ひとえに苦勞を背負いこんでいるのだろう。

実際、背負いこみまくっているようだが。

そういえば、親切な御者も、領主の娘が大変な思いをしているようなことを言っていた。

「貴女、やつれて不健康に見えるから、頼りにならなさそうなのよね」

正直な感想を、ストレートに口にするキヤルに、ギャンガルドもタカもジャムリムも、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「す、すみません。最近胃腸が痛んで、食欲も湧かないものですから……」

結構な重症らしかった。

「いいわ。貴女には案内してもらおうから」

言うなり、キヤルはパムルの腕を掴んで、ぐいぐいと引っ張りながら部屋の扉を開け放つ。

なかば引き摺られながら、パムルは足をもつれさせつつ着いて行く。

「え、あの、今からですか？」

「当たり前じゃない。善は急げ！って言うでしょ？」

小さな体に引つ張られてよろめくパムルを、脇から支えてギャンガルドがウインクした。

「ま、攫われた奴が一筋縄じゃ行かねえだろうから、心配はいらねえよ。ただ、思い立ったら即行動つてのがお嬢の良いところだ」

その隣で、ジャムリムが笑う。

「キヤルちゃんとセインさん、ワンセットじゃないと、こっちも落ち着かないし」

二人の後ろで、タカが頭の後ろで手を組みつつ、溜め息を零した。

「旦那、心細い思いしてなきや良いんですけどねえ」

その一言に、パムル以外の全員がそつとタカを見やったが、本人は気付いていない。

「みんな言いたいことがあるなら、直接本人に言つてやるといいわ！攫われるなんて大間抜け、見つけたらタダじゃおかないんだから！」

振り返りもせず怒鳴るキヤルに、パムルはさらに申し訳なさそうに、小さく俯いて、ぽつりと呟いた。

「大事な方なんですネ」

「当たり前だわ」

やっぱり振り向きもしないキヤルに、パムルが後ろを振り返ると、大人三人は、なんだか楽しそうだ。

仲間が一人、居なくなつたというのに。この人たちのあべこべな反応は何だろう。

不思議に思う彼女だったが、目の前で真剣に、一人で他の人数分まで怒っているような少女に視線を移すと、なんとなく、納得してしまつた。

まだ会つた事もない、その足の不自由なセインという青年は、い

ったいどんな人物なのか。

少し、不謹慎だと思いつつ、こっそりとその青年に出会うのを楽しみに、相変わらず低い位置から腕を掴まれて引っ張られつつ、バランスのとりにくい状態のままホテルを後にした。

腹が立つのもひと苦労

「う……」

ぼんやりした意識のまま目を開けてみても暗闇で、果たして自分は本当に目を開けているのだろうか、一瞬不安になる。

何度か瞬きを繰り返すうちに、暗さに目が慣れて、少しだが物が見えて来た。

眼鏡は掛けたままのようで、セインはほっと息をつく。

きよろきよろと辺りをうかがう。

結構な広さの部屋に、カーテンの閉められた大きな窓。壁は結構な代物で、さまざまな装飾が施されているうえに、ところどころに絵画が飾られている。

「こういうパターンは、だいたいお城の中の部屋だよな」

では、自分は街の中央の丘の上に建つ、あの城の中に連れて来られたのだろうか、ぼんやりする頭で考える。

ふるりと、頭を振って、思考をはっきりさせるつもりが、逆に眩暈を起こした。

「僕、どうしたんだっけ？」

発した声も、なんだかカラカラしていて、自分の声とは程遠いように聞こえた。

思ったより、ダメージは大きいらしい。

それでも、自分の状況を把握する努力は惜しまない。緊急事態であることは分かり切っていた。

ホテルに辿り着き、ギャンガルドの誘いを断って部屋の中へ入って、それから？

「ああ。そうか」

呟くだけでも喉がヒリヒリ痛むことによやく気づく。

体の感覚が戻り始めたらしい。

部屋の中で、寛ぎながら足の怪我を治してしまおうとしていたと

きに、駅馬車で出会った男性が訪ねてきて、扉を開けた。途端に変な薬品を噴霧され、油断していて吸い込んでしまった。

しまったと思った時には、もう意識は遠のくしかなく、気がついたのは、今さっきだ。

もそりと、手を動かしてみれば後ろ手で拘束されている。足は、さすがに気を使ったのか縛りあげられてはいなかったが、片方の足首に何か違和感があり、動かしてみればチャリチャリと、金属の擦れる甲高い音がした。

どうも鎖でどこかに繋がれているのか、逃亡防止に、重石でも付けられているのか。

歩けないことくらい分かっているだろうに、趣味が悪い。

眩暈も、喉の痛みも、噴霧された薬品の後遺症だろう。何を使っただかしのれないが、人を何だと思っているのか。

なんだか段々腹が立ってきたサインだ。

おまけに、すぐそこにベッドが見えるのに、自分が転がされているのは床の上である。絨毯が敷いてあるとはいえ、ひどい扱いだ。

声を出すと喉が痛むので、鈍くなった頭で考えるだけ考える。

サインロズドの形態になっていないのは良かったと思うべきだろう。

窓を見やれば、カーテンの隙間から光が差して見えた。近寄れば、外の様子を窺えるだろうか？

思い切って、這ってみる。

腕も足も使えない状態で前進するのは一苦労だったが、足の鎖は結構長いらしく、なんとか窓まで辿り着くことが出来た。

「へえ……」

カーテンの隙間から覗いた外は、日中の日が差して明るく、空も風いである。遠くまで見渡せる街並みは、やはりここが、あの丘の上の城内であると教えてくれた。

「こういう仕打ちは、久しぶりすぎて困っちゃうね」

ずいぶん昔に捕虜になった事があったし、色々と変な誤解をされ

た揚句に独占欲から監禁されたこともある。

そんな己の過去を思い出させるこの状況に、セインは眉根を寄せた。

せめて、喉の痛みを何とかしたい。

再び、室内に視線を巡らせると、奥にある豪華な扉が小さく開いた。

「あなたが僕をここに連れて来たの？」

なんとか窓に寄りかかり、するりと慣れた足取りで入室した女に声をかける。

なんとというか、開けた扉の隙間の割に、まるまるとした体形の、小柄な女だ。

彼女は、セインが起きているとは思ってもいなかったのだろう。小さな目を精一杯見開いて、盛大に驚いている。

「信じられない！」

彼女の第一声がそれだった。

「まあまあ、暗い部屋なこと！」

小走りに駆け寄って、窓に寄りかかるセインなどお構いなしに、派手な音を発ってカーテンを開けた。

一気に室内は陽光に照らされて明るく輝きだす。

やはり、相当豪華な部屋である。

「さ！お前。仕事ですよ！」

お前、というのはセインのことらしい。彼女が、ぱんぱん！と、二度手を叩くと、車椅子を引いた、黒いワンピースに白い前掛けをした少女と、かっちりとしたカラーのシャツに黒のスラックスといった青年が部屋に入ってきて来ると、すすす、とセインの元に寄ってきて、ささ、と彼を車椅子に乗せてしまった。

「お前は我が息子の家庭教師になったのですよ。しっかりと剣術を仕込んでやって頂戴」

彼女はそのまま踵を返し、あっけに取られてポカンとしたままのセインなど目に見えていないようで、そのまま部屋を出て行ってし

まった。

しばし、室内に沈黙が訪れる。

「……………あの」

とりあえず、すぐ横に立つ青年に声をかけてみる。

ちらりとこちらを見下ろし、しかし直ぐに視線は元に戻してしま
った。

それでも、次に彼はもそもそストラックスのポケットに手を突っ
込んで、小さなナイフを取り出すと、車椅子の上のセインの背中を
押して上体を傾けさせ、手首を拘束していた縄を切ってくれる。

やっと自由になった手を目前に持つてくれば、やはり赤く痕にな
ってしまっていたが、動かしてみても異常はないので、骨も大丈夫
だろう。

少々、血が滲んでしまっていたが、これである程度は身動きが出
来る。

「ありがとう」

思わずお礼を口にしたが、ふい、と、そっぽを向かれてしまった。

あとは、足の鎖だけなのだが、見てみれば、自分の足から長く伸
びた鎖の先端は、部屋の柱に取り付けられていた。

剣術を教える、などと言っているので、鉄球でも付けられている
のかと思ったが、これでは部屋から出ることもかなわない。

しかし、今度は前掛け姿の少女が無言で屈み込み、セインを忌々
しい鎖から解放してくれる。

「……………ありがとう？」

さすがに、疑問に思っていると、車椅子を押され、部屋から出て
しまった。

「あのさ。どこに行くのかな？」

一言もしゃべらない使用人らしき二人は、黙々とセインを運ぶ。

仕方がないので大人しくしていると、また眩暈に襲われる。

気持ちの悪さに、目をつむり、車椅子の背に体を預けるように寄
りかかった。それで眩暈が治まるわけではないが、世界がぐるぐる

回っているより、臉の裏側が回っている方が視覚的にも精神的にも優しいだろう。

それに、どんな体勢でも運ばれてしまうのだから、楽な姿勢で出来るだけ体力は温存しておきたい。

突然、ぴたりと車椅子が止まった。

うつすらと目を開けると、緑に囲まれた、小さな屋根のある建物の中だった。

風が心地よい。

どうやら、庭の中の東屋まで連れて来られたらしい。

しかし、眩暈も、喉の痛みも治まらない。段々と、頭痛もしてくるようで、手足の拘束がなくなるとも、身動きはできそうにない。

どう考えても、ホテルで嗅がされたあの薬の後遺症だ。

本当に、忌々しい。人を何だと思っているのか。

「薬の中和剤です」

声のする方を見やれば、青年が錠剤を差し出し、少女が水の入ったグラスを持っていた。

じっと、二人の手を見ていると、怪しまれていると思ったのだろう。青年が、もう一度声を発した。

「飲まないで、辛いですよ」

そうは言われても。

「信用出ると思う？」

痛む喉を押さえて相手を見上げたら、彼はしばし考え事を始めたようで、サインを見下ろしながら口元に手を当てて動かなくなった。どうしようかと、こちらも考えあぐねていると、急に青年は少女からグラスを受け取り、その中に錠剤を入れて、水の中に溶かし込んでしまった。

それを、少女の手に戻す。

何をしたいのかと見ていると、

「大人しくして下さい」

一言。

本当に一言だけ短く告げると同時に、セインは後頭部を押さえこまれ、鼻をつままれて上を向かされ。

「!?!」

いきなり何をするのかと、抗議しようと思った口の中に、先ほどの錠剤を溶かし込んだ水を流し込まれた。

「がっ?!カッ!がぼぼっ!」

これは何の拷問だ!

訴えたくても、水は容赦なく喉の奥まで流れ込み、呼吸をしたくても鼻をつままれていたため苦しくて、動かせる両手で青年の手を引き剥がそうとするが、二人を相手に力が出ない。

結局嚙下してしまった。

「かは!えふ!げぼげぼ!ごぶっ」

ようやく空気を吸い込んだら、思い切りむせて結局、ひどく苦しい思いをする。

「申し訳ありません」

さらりと無表情で謝罪されても、セインの咳はなかなか止まらず、涙目で青年と少女を睨んだ。

「体調が悪いままでは、剣術の稽古は出来ないと思ひまして」

「.....」

なるほど、とは思いが、なら、無理に飲ませる前に口で伝えてほしいものだ。今みたいに。

しばらくゼイゼイと呼吸を整えざるを得ず、大きく胸が上下するのを、なんとか宥める。なんとなく喉の奥が、まだヒューヒュー鳴っているのは、この際無視をすることにして、とつとこの城から逃げ出す決意を固めた。

頭の中は、すでにどうやって車椅子のまま脱走するかで一杯だ。

自分の今の状況を作り出した張本人は、多分あの部屋で見た、それなりに高給そうなドレスを着た小さな目の、あのまるまるとしたおばさんだろう。どんな事情で自分なぞを攫い、剣術を息子に教えるなどと言うのか。物凄く偉そうにしていたが、いったい誰なのか。

色々気にはなっていたが、そんなことはもう、どうでもいい。知ったことか。

なんなのだ。人の事情や都合を一切合切無視しまくったこれらの仕打ちは。

「剣術の稽古だつて？どうしてこんな歩くこともできない僕がそんなことしなくちゃならないのさ！僕をあのホテルに戻してよ！」

落ち着いてきた呼吸の下、無駄と分かりつつ怒鳴った。

「それは出来かねます」

簡素な答えが頭の上から降ってくる。分かっているにしても腹は立つものだ。

「もう我慢できない！帰らせてもらおうよ！」

車椅子を走らせようと、車輪に手を掛けたが、青年が車椅子を押さえこんでしまつてびくともしない。

「困ります」

「困っているのは僕だ！君らじゃない！」

背後で車椅子を抑え込む青年の首に手を伸ばす。

がっしりと彼の首の後ろを掴み、胸倉を掴んで勢いに任せて前方へ投げ飛ばした。

背の高いセインは、腕も長い。まさかこんな攻撃を食らうとは予想もしていなかっただろう。軽々と飛んで行った。

ばさん！と、乾いた音を発して、植え込みの中に人型の窪みを作つて沈んでしまつたが、セインは驚いて大きく眼を見開いた少女を後目にさつさと車椅子を走らせた。

ぱつと見、庭は城の前面に配置されたものらしく、この広大な敷地を抜ければ、街への坂道に辿り着けそうだ。セインは迷わず、城を背にして進む。

「お待ちください」

しかし、前方に飛び出した少女にぶつかつて、急停止させられた。

「きゃあー！」

「わあー！」

幸い、転ぶことはなかったが、セインは彼女の小さな胸に顔を突っ込むことになった。

「わあああ！」

慌てて少女から身体を離す。

「うっ……」

胸は女性の急所でもある。少女は眉をしかめてしゃがみ込んでしまった。

「ご、ごめん！大丈夫？」

逃げるのも一瞬忘れて、少女の顔を覗き込む。小さく少女が頷いて、ほっと安堵する。
が。

そこで眼鏡がずれている事に気づき、掛け直す、どうもフレームが曲がったようで、鼻の上でカクカクしてしまう。

「あああー！」

この街に眼鏡屋はあるだろうか。
もう、泣きそうだった。

ふ、と、奇妙な気配にセインは振り返る。

なんだか酔っぱらってでもいるのか、よたよたとした足取りでこちらへ向かってくる若い男がいた。

「へえ。あんたが新しい剣術の先生？」

男が近寄って来て声を発すると、ささ、と、しゃがみ込んでいた少女が立ちあがり、そそ、と頭を下げた。

それがまた気に入らなくて、セインはムツとした表情を隠そうともしない。

「誰？」

人を訪ねるなら、まずは自分から名乗るのが基本だという事も知らないのだろうか。

男はにやにやと笑いながら手を差し出した。

「俺？俺はルキ。ここの息子っていうのやってる」
言い方がいちいち癩に触る男だ。

着ている衣服は立派なものだが、それらをだらしなく着崩して、格好良いとでも思っているらしい。せつかくの良い仕立てがもったいない。おまけに、似合ってもいない。

「着崩し方も、ただ着崩せば良いってものじゃないと思うけど」

握手なぞする気も起きず、差し出された手には視線もくれない。

「はん！馬鹿が居たぜ。俺の好き勝手だろ」

会ってすぐさま馬鹿呼ばわりか。

なんというか、馬鹿と言う方が馬鹿、という使い古された言葉がピタリと当てはまる人間がこの世に存在するとは。ある意味奇跡だ。差し出した手を握ってもらえないと理解したのか、ルキと名乗った男は両手をポケットに突っ込んだ。

「あつこに倒れてんの、あんたがやったの？」

親指で植え込みに出来た人型の窪みを差す。

一瞬出された手は、すぐにまたポケットに突っ込まれる。

いちいち出し入れして、面倒ではないのか。

「だったら？」

「別に？あいつ、結構強いのに、あんたなかなかやるなあって思っただけ」

喋っているだけでムカムカしてくる人間なぞ、久しぶりだとセインは眉間の皺を深めた。こうして対面して、同じ空気を吸っているのも気に入らない。出来れば視界にも入れたくない。

しかし、ルキはそれなりに力自慢であるらしい。肩の肉を盛り上げらせ、腕の筋肉を見せつける。

なるほど。それなりに上背もあるし、首周りは太く、体格もいい。何も知らない人間が見たら、セインより強そうに見えるだろう。

しかしそれは、見えるだけの話だ。

ああ。単なる筋肉馬鹿か。

そう判断する。

筋肉があるだけで強いか、といえば別にそうでもない。腕力も握力も、それは強いだろうが、格闘技となると、使いどころが違ってくる。

しかしそれを理解しない者は案外多い。力任せなだけで、それを相手に利用されたら自滅するだけなのだが、この男もそういう、脳みそも筋肉で出来ている類なのだろう。

自身の最大の武器を見せびらかして自慢するだけの、格闘技のかの字も理解していない。

生まれの差ってなんだろうね

「ルキ！ルキはどこです？」

背後にそびえる城の方角から、甲高い女の声が響いた。

聞き覚えのあるこの声は、たしか、閉じ込められていた部屋で、最初に聞いたあの声だ。

そつと、セインは振り向いた。

まるまると太った女が、スカートの裾を掴みあげ、こちらへ向かって走って来るのが見えた。

それは、やはりあの不遜な女だった。

「冗談じゃない！」

ここであの女に捕まって、また訳のわからない要求をされるのは真つ平だ。

セインは車椅子の車輪を掴む腕に力を込めた。先ほどよりは、腕に力が入る。

無理やり飲まされたあの薬のようなものは、確かに眩暈と喉の痛みを和らげてくれているようだ。

車輪は徐々に勢いを増して回転する。

「お待ちくださいませ」

「うわ！」

背後から車椅子を抑え込まれ、急停止させられて、身体が車椅子から転げ落ちそうになった。

「危ないですよ」

無表情のままセインの身体を支えて、車椅子からの落下を防いだのは、先ほど投げ飛ばしたあの青年だ。

車椅子は、その青年と、前掛けの少女の二人掛かりで抑えられていた。

「危ないのはどっちだ」

全員の意識が、多分この城の主であろう彼女に集中している隙に、

出来るだけ遠くに逃げたかったのだが、慣れない車椅子ではそうも
いかないらしい。

舌打ちしたい気分で、セインは背もたれに凭れかかった。

「何をしているの！ 剣術の稽古はどうしたのです?!」

怒鳴り声にもう一度振り向けば、怒鳴られたというのに、ルキが
あの女に手を振っている。

まるまるとした彼女が、遠くから眼を剥いて走って来る姿は、な
かなか迫力があつたが、あのボールのような体形は、転がった方
が早いかもしれない。

「お袋! どうしたの?」

「どうしたの、じゃありませんよ、ルキや。お前に剣術の教師を見
つけたのです。良く先生の言う事を聞くのですよ」

そんな親子の会話を背後に聞きながら、セインは呆れながら頼杖
をつく。

いったい、いつ自分はこの馬鹿息子に剣術を教えるなどと承知し
ただろうか。ちなみに、彼女がこの城の主で間違いないなら、この
地域一帯を統べる領主、だということになる。

「やれやれ」

思わず深い溜め息が出た。

「これ。そこのお前。こちらにお出でなさい」

「.....」

どこまでも不遜な態度に、セインは無言で応える。もちろん、振
り向きもしない。

「呼んでいるのが聞こえないのかえ? 足だけでなく、耳も不自由な
ら、家庭教師は務まらないではないか」

「.....」

無視を続けていると、少女がセインの袖を軽くだが、引っ張った。

「な、何?」

思わず声を出す。

「何じゃ? 妾に向かって何だとは」

「失礼ながら、パンナ様に言った言葉ではございません。この者は、私に言ったのでございます」

不機嫌さを隠そうともしないパンナと呼ばれた、おそらく領主に、少女が深々と礼を取る。

「妾の呼び掛けには答えず、使用人には応えらると言うのかえ？」

パンナの言葉に、セインは思わず振り向き、ぼそりと呟いた。

「あのさ。僕、あんたが誰なのかも知らないし、あんたの息子の家庭教師になる事も承知した覚えはないんだよね」

すると、パンナは心底驚いたようで、使用人の二人を怒鳴った。

「なんと！まだ説明もしていなかったのかえ?!」

人を拉致して閉じ込め、歩けないのを承知で鎖で拘束しておいて、説明をする、しないの問題でもないと思うのだが、彼女はそうは思っていないらしい。

「こういう事は、気付いた者がすれば良い事ではないか！まさか誰も気付いていなかったのかえ？」

「えー……」

セインは今すぐ、この場所から逃げ出したくなった。

先ほどのからの、この、世間ずれした、というのか、可笑しげな発想は訳が分からない。天然であるのは間違いがなさそうだが、理解し難いし、したくもない。

「どうでもいいんだけどさあ、お袋」

そこへ、どこまでもマイペースな声が響く。

「もうすぐ六時だぜ？お袋の大好きな家族団らの時間なんだけど、いいの？」

「……は？」

何だ、その、家族団らの時間とは。

さらに訳が分からなくなっていると、リーン、ゴーンと、大きな鐘の音が響く。見れば、この城の正面に大きな時計塔が眺えられていて、仕掛け時計が巨大な花を開かせ、中から人形たちが行進を始め出していた。

その中の一体が、中央の鐘を鳴らしている。

パンナと使用人二人は慌て出した。

「パンナ様。只今五時でございます。我等はお暇させていただいてもよろしいでしょうか？」

「うむ。仕方あるまい。家庭教師を元の部屋へ戻してから、早よう帰って親御さんを安心させてやるが良い」

「ありがとうございます」

「それでは、失礼いたします」

わたわたと、そんな会話を交わしたかと思えば、相変わらずセインの事情はどうでもよいらしく、さつさと車椅子をくるりと回転されて、元いた部屋へと連れられて行く。

「え？え？え？」

考える暇もない。どうなっているのかと問いたただそうとすれば、車椅子を押す少女から、ひっそりと耳打ちされた。

「今はおとなしく従って下さい。パンナ様とルキ様のいない場所で、詳しく説明致します」

「え？」

結局、脱出するどころか何も出来ないまま、最初に目覚めた部屋へ連れ戻される。ぱたんと扉が閉まり、足も鎖に繋がれた。

もちろん、抵抗しなかったわけではないが、青年だけならいざ知らず。女の子を投げ飛ばしたりするわけにもいかないのです、結局、振り出しに戻ってしまった。

連れて来られた当時と違うのは、車椅子に乗っている事と、彼ら二人が、かいがいしく世話をしてくれる、というところだろうか。

あの、パンナという領主に、暇を告げていたのだから、セインを部屋へ閉じ込めたら、すぐにいなくなってしまうのかと思っていたが、彼らはセインの食事の準備までしてくれた。

「さて。まずは名前を聞こうかな。僕はセインというんだ。君らは？」

小さなテーブルの上に置かれたスープとサンドイッチを前にして、

セインは二人を見上げた。

少女の方が、こくん、と小さく頷くと、青年を見上げ、青年も、彼女の瞳を見やってから、やはり頷いた。

口を開いたのは、青年だ。

「俺はカールと言います。こっちは、妹のラル」

「兄妹か」

「はい」

彼らはパンナの夫、クロムに拾われてこの城の下働きをしているのだという。

「この街は、パンナ様の理想の上に建っているのです」

「理想？」

彼女の父が、彼女の幼いころに他界した事が始まりなのだという。「パンナ様は先々代の領主の子供、九人兄弟の末娘なのです。父君が早くに他界し、寂しい思いをした上に、姉君達は結婚し、兄君達は先代である母君から領地を分け与えられ、この城を次々に去りました。ただでさえ末っ子で甘やかされて育ったパンナ様には、耐えられない事だったのでしょう」

最後に残った自分がこの領地を任され、母親と二人で暮らすうちはまだ良かった。母親に甘えていられたからだ。しかし、結婚すると夫に依存するようになり、子供が出来る、子供に執着するようになった。

「最終的には、家族というものに異常な愛情を示すようになり、自分と同じ末っ子のルキ様を、非常に甘やかすようになったのです」

そこまで一息に説明すると、カールは悲しそうに眼をふせた。

多感な時期に、仲の良かった兄弟達が家を出て行き、ただっ広い城内で母と二人きりで過ごすというのは、いかに使用人が大勢いても、寂しい事だったのかもしれない。

そこで、セインはあの、五時に鳴りだした時計塔の鐘を思い出した。

「待ってよ。あの鐘が五時に鳴るのって、どういこと？六時に家

族団さんの時間がどうのつて、ルキつて奴が言っていたと思っただと」

あんなに大きな、街中に響き渡るような鐘の音が、五時になるまで一度も聞こえなかったという事は、自分が気を失っていた事もあるのかもしれないが、他の時間は鳴らさない、ということだ。では、何故五時に鐘を鳴らすのか。

今度は、カールに代わってラルが話し出す。

「あの鐘は、五時の終業時間を伝える知らせなのです」「は？」

「・・・まだ、貴方はご存じないのですね。この街は、いかなる理由があるうとも、特殊な職業を除き、五時には仕事を終わらせませぬ。飲食店然り、雑貨店然り」

それは、一番の稼ぎ時に店を閉めているのではないだろうか。

「それは、酒場も？」

「それだけではありません。役所も市場も病院も、ほとんどすべてです」

役所は、普通二四時間営業だ。いつ、ヘッドハンターがハントした賞金首を連れて来るかわからない。ここにはそんな賞金首やヘッドハンターは近寄らないのだろうか。

つい、キヤルの仕事を中心に考えて、セインは首をひねった。

「理由は？」

「簡単です。六時に家族全員で食卓を囲まなければならぬからです」

「・・・は？」

思わず、セインは眉間に皺を作った。

「この街は、朝六時と、夕方六時に家族全員そろって食事を摂らなければならぬのです」

ラルは、噛み砕くようにゆっくりと繰り返した。

「条例で決められているのです。もし、これを守らなければ、行政から指導が入り、罰則を科せられます」

「念のために聞くけど、誰が、何のためにそんな条例を作ったのかな？」

「パンナ様が、家族を持つ領民が家族を大事にすれば、領地は発展し、犯罪も減ると判断して制定しました」

「……へえ」

答えは予想通りだったが、なんと馬鹿馬鹿しい。

家族を大事にすることは確かに大切だが、それと食事を家族一緒に六時に摂ることは、大きくズレている気がする。

そもそも、余計なお世話である。

「言いたいことは分かるんだけど……」

そこで、セインはハツとして、目の前の二人を見上げた。

「あれ？じゃあ、君たち帰らなきゃ！」

家族そろって食事を摂らねば罰則を受けるというのなら、先ほどの庭でのやり取りを見れば、城に勤める使用人たちも例外ではないという事だ。

しかし、ラルは首を横に振った。

「私たち兄弟は、いいのです。親がいまさんから」

「あ……。ごめん」

それでは、兄妹だけの、二人きりの家族なのか。

思わず口を衝いて出た謝罪の言葉に、ラルは首をかしげた。

「何故謝るのです？貴方の方が、私たちよりもひどい扱いを受けていると言っているのに」

「ああ、いや、だって」

もごもごと口の中で、言葉をつぶしていると、無表情だった彼女は、ふわりと笑った。

「お優しいんですね」

年相応の、少女らしい笑みに、セインもなんだかほっとして、つられて笑った。

「そうかな？良く、ヘタレだって言われるけど」

そう言えば、兄妹でくすくすと笑う。

「やっぱり、お優しいんですよ」

カールにまで言われて、セインはへらりと笑った。

先ほどまでの無機質な表情は、兄妹がこの城になじんでいない証拠にも思えた。

「君たちが、二人きりの家族だって、パンナは知らないみたいだったけど」

「はい。私たちはこう見えて、クロム様の密偵なんですよ」

「へえ？そんな重大な事、僕なんか喋っちゃって良いの？」

話を促し、スープに手をつけながら、セインは二人にも夕食を摂るように勧める。

自分だけ、彼らの目の前で食事を摂るのは気が引けた。幸い、サンドイッチは一人で食べきれないほど量がある。

しかし、二人は顔を見合わせて、話が終わってから食べると言う。

一応、セインはこんな扱いを受けてはいても、領主の息子の家庭教師。使用人より地位は上なので、使用人の自分たちは食卓を共には出来ないのだそうだ。

「その、家庭教師って、僕のほかにも居るのですよ？」

あまり納得はできなかったが、彼らを困らせてしまうのも不本意なので、セインはおとなしく自分の腹を満たす事にした。

「今は、科学の教師と、語学の教師が居ますが・・・」

「パンナ様は、普段は良き領主様でいらっしゃるのですが、非常に思い込みの激しい方でいらっしゃいます」

「僕みたいなのを、無理やり連れて来て、勝手に家庭教師にしてしまつと？」

「有り体に申し上げれば、その通りです」

セインの食事を世話しながら、兄妹は申し訳なさそうに眉をよせた。仕草が似ているのは、やはり兄妹だからだろうか。

「数学は、クロム様が直々に教えていらっしゃいます。少しでも、被害を減らすためと仰って」

ラルが眉間のしわを深めた。

「と、言う事は、領主の旦那様は、快くは思っていないんだね」

「それはそうです。こんな、人を攫って無理やりに言う事を利かせるなんて。恐ろしい事ですよ」

いかに自分の息子が大事で可愛いと言っても、やり過ぎだ。

幸いにも、パムルの夫は、きちんとそれを理解しているらしい。

「やめさせることは出来ないの？」

「それが出来れば、こんなに苦労はしません」

「それもそうか」

ふう、と、溜め息がセインの口からこぼれた。

明日また、きつとあのルキとやらに、剣術を教えろ、という話になるに違いない。もし、今日のように部屋から連れ出してもらえれば、逃げられる算段がつく。

そんな事を考えていたが、兄妹は先ほどの溜め息を違うように捉えていたらしい。

「大丈夫です。貴方は、私たちが責任を持って、城の外へお連れします」

「・・・へ？」

突拍子もない事を、カールが笑顔で口にした。

可笑しな人々

「どういう事？」

あの無理に薬を飲ませた行動と言い、逃げ道を塞いだ事と言い、とても彼らがセインを自由の身にしてくれるとは思えない。今だって、この部屋へ連れ戻して、鎖で拘束なんぞしてくれている。

今度は、セインが不機嫌に眉間に皺を作った。

「先ほど、私たち兄妹がクロム様の密偵だという事は申し上げましたね？」

「それは聞いたけど。クロムって、パンナの旦那だよな？」

「クロム様は、何度かパンナ様と話し合いの場を設けました。しかし、パンナ様はあのような方ですので、下手をするとご自分の全てを否定されたと言って癩癩を起してしまわれるので、どうしようもないのです。そこで、娘のパムル様と協力し合い、奥様の眼の届かぬよう、密かに活動しているのです」

「それは・・・何というか・・・」

娘がいるのも初耳だったが、それ以上に、夫と娘が秘密裏に行動しなければならぬというのも、どういう家族なのかと驚く。家族に固執しているわりに、彼女は自ら自分の家族を崩壊させている。

「仰りたい事は、なんとなくですが分かります。私たち領民は当事者ですから」

小さく笑うカールとラルに、セインは手にしていたサンドイッチを皿に戻した。これでは、この街はいつか、この城の家族のように崩壊するのではないだろうか。

「クロム様とパムル様は、貴方のように無理やり連れて来られた方を、ご本人の意に反し留め置く事を良しとはしておりません。私たちは、そういった方々が城に連れ込まれた場合、パンナ様に悟られぬように逃がす手助けをするために、密偵をしているのです。ただ、こちら側の提示する労働条件を気に入って頂けるのなら、城の中に

お住まいをご用意いたします」

そう言つて、二人が提示した条件は、かなり良いものだった。

「・・・ただの家庭教師一人に、これは破格な待遇だね？」

住居、食事が付いて、剣術の稽古の時間以外は自由。一日の大半が空き時間なのに対し、月の給料は役人の三倍はあるのではないだろうか。

「そのかわり、城の外には出られませんけれどね」

「ま、そうだろうけど」

もちろん、城の外への出入りが自由だろうが、セインは断るつもりだし、そもそもこの条件でだつて、残る人間は少ないだろう。

誰だつて、自由を拘束されたくはない。

「僕は早々にみんなの元へ帰りたいんだ。君たちがそれを手伝つてくれるなら、そりゃ嬉しいけれど」

ちらりと兄妹を見上げれば、二人ともにつこりとほほ笑んだ。

「今日の夜。パンナ様が寝静まった頃に、お迎えに参ります」

「それまで、不自由かと思いますが、どうか我慢してください」

初対面での無表情とは打つて変わった二人の態度に、セインはじつと兄妹の顔を見つめた。

「だつたら、足の鎖くらい、解いてくれても良いんじゃないの？」

そう言えば、ラルが表情を曇らせた。

「申し訳ございません。それは出来かねます」

「何故？」

どうせ今夜助けてくれるなら、足の鎖は無意味ではないか。

明日にでも行われるであろう、次の剣術の稽古の時間に、鎖も解かれるだろうから、その際に逃げ出そうと目論んでいた。それが、夜に逃げ出す手伝いまでしてくれるという。思わぬ手駒に、願つたりかなつたりだが、それまでこの状態のままなのは、やはり腹が立つ。

それに、拘束さえ解いてくれれば、セインは誰の手も借りずに、いつでも逃げるつもりでいた。

ゴーン、ゴーン、と、また鐘の音が鳴り響く。どうやら六時になったようだ。

「そろそろ、来る時間です。私どもは、これにて失礼させていただきます」

鐘が鳴り終わると、ペこりと、ラルが頭を下げ、カールが出口の扉をそつと開ける。

兄妹の動きが慌ただしくなった。

件の条例で指定された六時になったのだから、戻らなければならぬのは、なんとなく分かるのだが、そろそろ来る時間、と言われても、何が来るのか。セインは慌てて二人を引きとめた。

「ちよつと、話はまだ」

言い終わらないうちに、カールがそそくさと頭を下げ、ラルの腕を引っ張る。

「すみません、また後ほどお伺いしますので」

扉の奥に消えたカールに引っ張られながら、ラルが顔だけ出して早口で告げる。

「あ、お食事はそのまま置いておいていただいて宜しいです。係りの者が下げに参りますから」

「え？ちよ、待って！」

引きとめる間もなく、ぱたんと扉は閉まってしまった。

伸ばした腕が宙に浮いたまま、セインは口をぱくぱくと開閉させるしかなかった。

「な、何なんだよ！もう！」

憤慨して、ヤケ食いとばかりに、残りのサンドイッチを頬張る。

スープは、既にぬるくなっていたが、無理やり胃の中に流し込んだ。

結局、足の鎖はそのままだ。

ぶん、と、鎖に繋がれた足を振り上げた。じゃりじゃりと、耳障りな金属音が響いたが、気にしない事にする。

包帯でぐるぐる巻きにされた足は、意に反してゆっくりとしか持

ち上がらなかつた。それでも、昨日までは振り上げる事も出来なかつたことを考えれば、傷はだいぶ良くなっているようで、まだまだ痛みはあるが、無理は出来そうだ。

「さて。逃がしてくれるとは言っていたけど、どこまで信用したのか」

一人になつてみると、改めてこの部屋がずいぶんと上等なのに気付く。

「人を閉じ込めとくわりに、何だろうね」

多分、家庭教師を引き受ければ、この部屋がそのままあてがわれるのだろう。

壁に掛けられた絵画は良いとして、いくつかの蝋燭とランプで照らされた室内は、豪華なものだった。いかにも城の一角にある客室といった所か。

シャンデリアは光を弾いてきらきらしているし、絨毯は寝転がされていた時に既に気付いていたが、毛脚は長く、足音くらいは消してしまうだろう。天蓋の大きなベッドはふかふかで、鎖で繋がれた身としては、逆に気味が悪い。

ふう、と、溜め息をついてみる。

窓辺まで近寄り、見下ろせば、車椅子に座っている今なら、最初に見たときよりも外の様子が良く見て取れる。

夕暮れで日も落ちて、大分薄暗くなつてはいたが、景色はまだ街の外まで見渡せる。

巨大な壁に囲まれた街の中に、明かりが灯つてゆく。人々の営みがそこに見えて、なんとなくだが安堵する。

反面、壁がそれらの家々を覆い尽くし、抱き潰しているようにも見える。

「見た目そのままの街、か」

領主の歪んだ愛情に囲われた街。

分厚く街を抱き込む壁は、パンナの腕そのもののように見える。

「キヤル、無茶してなきやいいけど」

本当なら、今頃はセインが紅茶を淹れて、キヤルとたわいない会話を交わして、一日の疲れを癒している頃だ。

「怒ってるかな？・・・怒ってるよね」

彼女が買物に出かけている間に拉致されて、こんな所に監禁状態であるなんて、我ながら情けない。もう、とっくにセインがいなくなった事に気付いているだろう。

キヤルが腕を振り上げて怒っている姿が目に見え、セインは泣きたくなった。

「絶対、殴られる」

八歳の少女の鉄拳は、どうしてそんなに痛いのか、一度聞いてみたいくらいに、かなり痛い。

思い出すだけで涙目になるセインだった。

「・・・それとも、いつそのまま」

ふと、漏れ出た言葉に、思わず自分で口を塞ぐ。

このまま、キヤルと分かれて、今度こそ、誰も知らないような場所までひっそりと自分を封印してしまった方が良いのではないだろうか。

そんな思いが過ぎる。

キヤルに言ったら、それこそ烈火の如く怒るだろう。

「でも、僕はやっぱり、災いしか呼ばない存在だから」

今はまだ良い。セインが、伝説の聖剣、大賢者セインロズドと分かっている人間は少ない。しかし、いずれ自分の正体が知れたらどうなるだろう。今までは、セインの存在そのものが突拍子も無さ過ぎて、気付かれずに済んできたが、必ずしもバレないとは限らないのだ。

実際、あの海賊王にはあっさりとして正体を見破られてしまっている。ギャンガルドが大抵の人間よりも勘が鋭く、また、発想が柔軟だったためでもあるが、他にも彼のような人物がいらないわけではないのだから。

五百年の間、聖剣と呼ばれながら自らを封印してきた賢者は、ゆ

つくりと車椅子の背に身体を沈め、疲れた視線を外へと向けた。窓から見下ろす街は静かに黒ずんで、明かりがきらきらと瞬き、光の宝石箱のようだった。

ぼうつと、街の明かりを見つめていると、扉がノックされた。

部屋の壁に取り付けられた古い時計を見上げれば、まだ六時半。兄妹が迎えに来るだろう、「夜」とは言い難い時間だ。

そういえば、何かが「来る」と言っていた。

「誰？」

食器を下げに来た係りの者が、それとも。

セインが扉へ車椅子を向ける。

「お身体のお加減は如何でしょうか？」

扉の向こうから聞こえたのは、聞き覚えのある男の声だった。

「・・・人を勝手にこんな所へ連れてきて、加減もなにもあったものじゃないと思うけど？」

「その節は、大変申し訳ない事を致しました。扉を開けてもよろしいでしょうか？」

「・・・どうぞ」

促せば、そつと扉が開かれ、セインをこんな状況へ追いやった張本人が立っていた。

「何か用？」

深々と頭を下げる初老の紳士は、出会った時と変わらず、品の良い服装と仕草で、とてもセインを薬で気を失わせて拉致したとは思えない。

そんな彼に油断したのも確かだ。

「もう、体調は宜しいようですね」

「・・・」

薬の後遺症の事を言っているのだろう。セインが無言で答えたのに対し、男は勝手に肯定と看做したらしく、しきりに頷いている。

「私はこの城でパンナ様の身の回りのお世話をさせていただいております、カントと申します。お名前をお聞きしても？」

「・・・」

セインはムツとして、窓の外へと視線を移す。

無礼な人間が、今更取り繕ったって遅い。正直に名乗ってやる義理はない。

「・・・仕方ないですな。では、当家の坊ちゃんにはお会いなされましたね？」

ちらりと、軽くカントと名乗った男を睨む。

自分でも、眉間に皺が刻まれているのが分かる。なんとというか、この男の態度が腹立たしい。

大体、その坊ちゃん、というのは、あの庭で対峙したルキとかいう、頭の悪そうな、この城の跡継ぎの事だろう。あんなののために自分はこんな窮屈で嫌な思いをさせられているのかと思うと、それだけで頭痛がする。

「貴方のような剣豪でしたら、きっとパンナ様も満足されるはず。

坊ちゃんを、一から鍛え直して下さいませんか」

また、カントは深々と頭を下げた。

「嫌だね」

何だ、その、自分勝手な頼み事は。

「鍛えるだつて？あの馬鹿を？御免被る！他を当たってくれないか。それで、僕をさっさと仲間の元へ帰してくれ」

セインは苛立ちを隠さずにカントに向かって言い放った。

声音は充分に抑えられていたが、静かに告げた言葉は、全てに刺を生やしているようだ。

「お願いでございます」

「僕を帰してくれ」

頭を下げたままのカントと、鎖に繋がれたままのセインの会話は平行線を辿る。

「僕以外にだつて、剣術を教えられる人物はいるでしょう？僕みたくに攫ってきたり閉じ込めたりしないで、ちゃんと訳を話して家庭教師になつてもらったら？僕はあんな我が儘勝手な人間に物を教え

られるほど、出来ちゃいないんだ」

わざと、足の鎖を鳴らしてやった。

がちゃん、と、乾いた音が室内に響く。

カントは、その音に、ようやくセインが鎖に繋がれていると理解したように、眼を見開いてセインの足首に取り付けられた枷と鎖を見やった。

「おお、繋がられておりましたか。なら、逃げ出す事は叶いませんな。おわかりでしょう?」

「何が?」

もしかして、この男。セインがもし、鎖に繋がれていなかったら、あの兄妹の代わりに鎖を取り付けるつもりだったのか。言外にそれに気がついて、セインは眉間に深い皺を刻んだ。

本当に、この城の人間たちは、皆一様におかしい。

気味が悪い。

気持ち悪い。

何故自分たちの行動がおかしいと、少しも疑いもなくいられるのか。異常ではないか。

なんてところへ来てしまったんだろう。

別に取りつて食おう、というワケでもなさそうだし、危害を加えるつもりもないらしいが、精神的に持ちそうにない。

セインの背筋に、冷や汗がつつたう。

「時間はたっぷりとございます。ゆるりと、お考え下さい」

それだけ言うと、カントはテーブルの上に放置されていた食器類を片付け、再び頭を深々と下げると、ぱたんと扉を閉めて出て行った。

がちゃり、と、しっかり鍵を掛けられたのは、音と気配で理解したが、早々に出て行ってくれて良かったと、セインは安堵の息を

漏らす。

「何なんだよ、本当に。早く帰りたい」

眼鏡を外して、セインは窓の外を見やった。

街の明かりは明るさを増し、空の色は濃い藍色に姿を変えていた。

食事って性格出るよね

街中に、六時を示す鐘が鳴り響く。

城の一角。食堂の間で大きな鐘の音を聞きながら、キヤルは頬杖をつき、目の前に並べられてゆく豪華な料理の数々を睨んでいる。

甘辛く煮詰められた豚肉、カリカリに揚げたニンクスライスがちりばめられたサラダ、野菜と鶏肉のゼリー固め、大きなエビのポイル、南瓜のスープ、等々。

大皿に乗せられたそれらの料理は、すべて大盛りだ。

正直、食べきれない。

海賊二人に女子供二人。

プラス、この城の家族四人。こちらは男女二人ずつ。

合計八名。

この八名でもって、やたら大きなテーブルに乗せられて行くこれらの料理を、食べ尽せと言うのなら、無理だと大声で怒鳴ってやりたい。

そんな事を思っている間にも、主食のパンが登場する。

バスケットに並べられた焼きたての香ばしい匂いに腹を鳴らしながら、パンだけで三種類も用意されている事に気付いてまたげんなりと肩を落とした。

「必要な量だけ出せば良いのに」

まあ、でも、これだけの量を毎日食べているのなら、この城の主であり、この地域一帯の領主でもある、一番上座に鎮座する女が、まるまると太っている事には納得する。

「いらなければ、残して下さいね」

向かい側に座るパムルが、キヤルの溜め息に気がついたようで、こっそりとそんな事を言う。

「でも」

もつたいない。

そう思ってしまうのは庶民だからだろうか。

「分かりますが、食べすぎは体に毒ですよ？」

苦笑いするパムルに、キヤルは首をすくめて見せた。

パムルも、並べられている食事の量が多い事は、充分に分かっているらしい。

「さあさ、食事が整いましたね。今日はずいぶんと久しぶりに、パムルがお友達を連れて来てくれたのだから、乾杯しますよ」

上座に座る、パムルの母、パンナが、酒の入った手元のグラスを高々と掲げた。

「乾杯！」

嬉しそうなパンナとは対照的に、バカでかい食卓に居並ぶ面々の表情は優れない。

パムルは無表情にパンをちぎり、キヤルはムスツとしたままスープを飲む。タカは味を確かめながら吟味しているようだが、口には合わないらしい。ジャムリムはにこりともせずワインを口にし、ギヤングルドだけが遠慮なしにステーキをぱくついていた。

「ねえ、あんた美人だよな！俺さあ、あんたみたいのと付き合えたら死んでも良いなあ」

食事中にも関わらず、非常識な言動はルキだ。

当然、声をかけたジャムリムには無視されているのだが、そんなことは気にもしないらしい。一人で喋っている。

「ルキ。お行儀が悪いわ。お客様に失礼ですよ」

見かねたパムルが弟を睨んだ。

「パムル。何ですか？急に怒鳴ったりしてみつともない！」

すかさず、パンナが怒鳴った。

「どちらがみつともないんだか」

ぼそりと呟いたのはキヤルだ。

「ねえ。いつもこうなの？」

パムルがルキを注意すれば、パンナが庇う。これでは、この弟が

馬鹿になっても仕方がないと思う。

パムルは力なく笑った。

泣き笑いの彼女の表情から、日常の事なのだと分かって、キヤルはふう、と、溜め息をつく。

ルキはパンナに叱られたパムルを、ニヤニヤして見ている。

その顔に、蹴りの一つも食らわせてやりたい。

「こんなの家庭教師にしようって、それこそ馬鹿じゃないかしら」
早々に、セインを連れ出す決意を固めたキヤルだった。

「さて、腹も膨れた事だ。行こうぜ」

ガタン、と、席を立ったギャンガルドは、ナフキンで口元をぬぐい、にやりとキヤルを見下ろした。

少々腹は立ったが、ギャンガルドの行動には賛成だったので、キヤルも席を立つ。もちろん、タカもジャムリムも、食事をする手を止めて立ちあがった。

少しためらったようだが、最後にはパムルも立ち上がる。

「何ですか?! パムル。お前のお友達は食事の途中に席を立つのですか」

驚いたように声を上げるパンナは無視だ。

「おい小僧」

ギャンガルドが手の中でフォークを弄びながら、視線は向けずに声を低くした。

自分の事かと顔を上げたルキに向かって、ひょい、と手首を軽く動かせば、フォークがルキの頬をかすめて壁に突き立った。

「気安く人の女に声かけてんじゃねえよ。お育ちが知れるぜ? 親の顔が見てみたいってね」

場の空気が固まったところで気にもせず、ギャンガルドは扉を開け、キヤル達にウィンクして促すと、パムルを抜いた城の一家を残し、全員で部屋を後にした。

かつかつと、廊下に足音が響きわたる。

「なんなの！あれ！」

「さあねえ？」

「分かりやすいつちゅうか、仕方ないつちゅうか」

「貴女、よくあんなのに毎日付き合っていてられるよ」

「す、すみません」

全員で、キヤルを先頭に、長い廊下を歩いてきた。

いつもなら、キヤルの歩幅に合わせてゆっくり歩くのだが、今はそのキヤルが早足なので、大人は普通に歩いても彼女を追い越す事はないようだ。

「そ、それですね、お父様の手配した者と合流する予定なのですが」

パムルとともに城にやって来て早々、彼女の父と対面したのは良いが、夕食の時間が迫っているからと、先ほどの食堂の間に通された。

人の良さそうな領主の夫は、パムルと同じで疲れたような顔をしていた。彼もまた、苦心しているのだろう。歩きながら新しく連れて来られた剣術の家庭教師の救出についての計画を、簡単にだが、分かりやすく説明してくれた。

慣れているようなその言動が、少し可哀そうにも思えたが、まずはセインの無事に、ほっと胸をなでおろした一同だ。

「私の手配では、彼は今夜、監禁されている部屋から連れ出せる予定だよ。合流するなら、そうだな。いつそ部屋まで迎えに行くかい？」

結構豪胆なクロムの発言に、キヤルは喜んだが、食事に付き合っている時間があれば、今すぐにでも連れ出したいのが本音だった。しかし、食事の時間の前にきちんと食卓に着席していなければ、パンナが癩癩を起すと聞いてしまえば、付き合わないわけにもいかなかった。

急な訪問者に彼女は良い顔はしなかったが、客が来た事そのものには、喜んでいるようだった。

もともと、人の世話をするのが趣味のようなところがあるらしい。厄介な性格だ。

そうして結局、先ほどのやり取りと相成り、どんなに豪華な料理でも、共に食事をする相手によって、不味くなるのなら食べないほうがマシ、と判断した全員が食堂の間を後にした。

「飯ってえのは、作った方も、美味いように食ってほしいもんでさ。パムの嬢さんには悪いが、おれなら、ここのコックは給料が良かったって御免だね」

いつになく、タカが怒っている。

食事というものは、その食べ方、好き嫌いで人となりというものが見える。

食べ物を粗末にし、好き嫌いの激しい人は、人間関係もそんなものだ。加えて我が儘。

逆に、好き嫌いなく何でも食べ、たとえ嫌いな食べ物でも我慢して食べる人は、割合、人に好かれ、努力家である事が多い。

あの、ルキというこの城の跡継ぎは、食事どころか態度に至るまで、タカに言わせれば、自分の料理を食べてほしくない部類の人間だ、という事だった。

「それは、言えるね。あたしなんか、一緒に食べてて食事が不味くなくて仕方なかったよ」

ジャムリムも、それでほとんど手が進まなかったらしい。グラスにばかり手が伸びていた。

「何にしたって、飯は楽しく美味しく食うもんだ。こりゃ、賢者も今頃一人でうんざりしてんじゃねえか？」

あの場に居なかったという事は、多分監禁されている部屋で、一人ないしは他の家庭教師候補と食事をしているとみて間違いはなさそうだが、なんとなく、そっちの方がうらやましく思えるのは何故だろう。

「本当に、すみません」

小さくなって全員の後ろに、遅れまいと一生懸命歩きながら、パ

ムルが先ほどからしきりに謝っている。

それに気づいて、キヤルが足を止めたので、全員が足を止め、パムルはジャムリムの背中に顔をぶつけて止まった。

「きゃ?!」

急に止まった一同に、急停止できずに突っ込んだパムルは、今度はぶつかってしまったジャムリムに、申し訳ありません、と、何度も頭を下げながら鼻の頭をさすった。

「パムル、謝り過ぎ!」

「は?」

キヤルが怒りの矛先を、今度はパムルに向けた。

「え、えっと、すみませ」

「だから、謝り過ぎ!」

「えっ?えっ?」

おろおろするパムルに、キヤルの指先がビシリと向けられる。

「アレの教育に関しては確かに家庭の問題かもしれないけれど、アレの言動にまで貴女が謝ることなんてない!」

「へ?」

唐突に指摘され、少々混乱してしまつて、間の抜けた声が出た。

キヤルの言うところのアレ、とは、パムルの弟のルキの事だろう。

もう、名前も覚える気もないのか、既に名前さえ言いたくもないのか。

両方だろうか。

とにかく、キヤルの言いたい事は、なんとなくだが理解はできるものの、自分の兄弟だ。アレでも。

アレがしてしまう行動に、自分は少なからずとも責任があると思つているパムルには、弟の後始末をしてきた経歴があり、謝つてしまふのは、もう癖みたいなものだった。

「で、でも、弟のしでかした事ですし」

「そこよ!貴女がいくら注意しようが、アレをまっとうに導こうが、親が邪魔しちゃ意味がないわ。アレがあんなのは、それに気づき

もしないアレ自身そのものの責任よ！だいたい、もういい歳して、未だに親だのなんだのに甘えてんのが気に入らないし、甘えさせすぎよ！パムルも！尻拭いし過ぎ！自分の尻ぐらい、自分で拭わせなさい！」

若干八歳の少女に、説教される内容ではなかったが、そこは百戦錬磨のヘッドハンターとして生きて来たキヤルである。有無を言わせぬ迫力があつたし、言っている事自体に異論は浮かばなかった。そもそも、ルキはキヤルの約三倍は生きているのだが、人生経験において、半端なく負けている。

「温室で育ち過ぎて視野が狭いのよ。だから馬鹿なんだわ。外に出なさい！外に！」

「私も、そう言っているのですが」

一人では生活できないと、我が儘を言っているらしい。

「あの食事の仕方が眼に浮かぶさねえ」

そんな事を、タカが呟いた。

彼は食事の仕方でも人の性格まで見破るらしい。

「今後、この領地は貴女が継ぐべきね」

「へえ?!」

また突拍子もない事を、肩を怒らせたままあっさりと言われ、パムルはまた変な声を出してしまった。

「はい！この話はこれでおしまい！実際、ここがどうなるうが、私には知ったこっちゃないのよ。セインよ、セイン！どこに居るの？」
ある意味、ひどい言いようだが、まったくもって正論でもあるので、大人たちは何も言わずにパムルの返事を待った。

「えっと、父の手配した兄妹が、この先の使用人部屋に居るはずですので、案内させましょう。皆さんは・・・」

上目で尋ねられ、もちろん、全員が頷いた。

「セインをこんな所に一時だつて置いておけないわ」

「わかりました。では、こちらへ」

計画では、騒ぎにならないように深夜、パンナが寝静まった後に

セインを連れ出す予定だったが、あの食堂の間でのやりとりは、全員がうんざりしていた。

こんな場所は、さっさと退場するに限るのだ。

相談しましょ

「あーうー、これ、どうしよう」

皆が皆、自分を助けに行動しているなどは露とも知らないセインは、一人途方に暮れていた。

足の鎖が重い。

ちゃりちゃりと、しばらくいじってみたものの、外れるわけもない。

鎖の先には、太い柱。この柱に鎖を取り付ける金具があり、それを壊せば、何とかなるかもしれない。ただ、壊したところで長い鎖は足についたままだ。

「邪魔だよねえ？」

どうしても、夜まで待てない。あの兄妹が信用できない、とか、そういうわけではないのだけれど、カントと名乗ったあの男が、またいつこの部屋へ様子を見に来るかと思うと、それだけでうんざりだった。

肺から大きく息を吐き出すと、セインはおもむろに両手を合わせ、手の平からセイノロズドを抜き出す。

ずぶずぶと、体液を滴らせて姿を現した細身の刀身を、ひと振りして己の血やら何やらを払う。

「んー、切れるかなあ？」

傍から見たら、状況はかなり切実であるのに、セインの声音はどこまでも呑気だった。

こきこきと、車椅子を移動して、鎖の繋がった柱の前になると、一閃。柱を切りつけた。

セインが柱と格闘し始めたころ。キャルたちはパムルの案内に沿って、使用人部屋の並ぶ区画へと足を運んでいた。

城内の奥まった位置にあるこの場所は、ちよつとしたホテルでも

経営できそうだ。それくらい、沢山の扉が並んでいる。

パムルがそのうちの一つをノックする。

返事もせずに、そろりと扉が開かれ、中から少女が顔を出した。

「あ」

そう言うと、少女はいそいそと扉を開け、全員を室内へと招いた。「いかがされましたか？」

全員が室内へ入ると、少女は廊下に誰もいないことを確認し、扉を閉めながらパムルへ顔を向けた。

室内には、少女のほかにも、青年も一人、椅子に座って寛いでいたらしい。驚いた表情で一同を見ていた。

ベッドが二つ並び、クローゼットと小さな箆笥、机と椅子があるくらいの小さな部屋は、急に増えた人口密度でぎゅうぎゅうと狭くなった。キヤルが遠慮なくベッドの上へ避難する。

「お父様から、ルキのための新しい家庭教師が連れて来られた事は聞いていますね？」

「はい。今夜、脱出させる予定ですが」

奥の椅子に座っていた青年が、慌てて立ち上がる。

「その方は、眼鏡をかけた、足の悪い方ですか？」

パムルが訊ねれば、ふたり同時にこくりと頷く。

「あの、その方が何か？」

「いつものように、パンナ様とカント様が寝静まった後に実行する予定ですけど」

三人のやりとりに、常習的にこんなやりとりがある事が知れる。

「本当に、苦労してんだなあ」

「こんなやり方で、いったいどれくらいの家庭教師がこの城に留まってるのか、是非知りたいね」

タカが気の毒そうに呟き、ジャムリムが呆れたように呟く。

「そうだな。それで、捕まえて来た家庭教師がしょっちゅういなくなっていたら、さすがに警戒くらいはするんじゃないか？」

珍しく、おとなしく話のやり取りを聞いていたギヤングルドが、

にやりと笑った。

「そうね。それくらいは予想できるわ。だからこそその手引きなんじゃないの？」

キヤルが、ベッドの上で腕を組みながらパムルを見やった。

「そのとおりです。最近、家庭教師になる事を承諾するまで見張りを置いたり、部屋に閉じ込めたり…。行き過ぎた扱いをする事が多いようです」

「でも、だからこそ僕たちなんです」

パムルの言を、青年が引き継ぐ。

「失礼。僕はカールといいます。名目上はパンナ様付きの客室係となっておりませんが、妹のラルと共に、クロム様に仕えさせていただいております」

彼が言うには、彼ら兄妹は、パンナの客専用のルームメイクを担当しているらしく、すなわち家庭教師として連れて来られた人々の世話をしているという。

しかし、それは表面上の事で、実際はクロムと連絡を取りあい、家庭教師を断った人物を、城外へ脱出させる手引きをしているのだという。

「ふうん。それで、あんたらは城主様に信頼されてんのかい？」

頻繁に連れて来た人間がいなくなれば、真つ先に疑いがかかるのはこの二人のはずだ。

「今のところ、パンナ様には。でも、この城の執事であるカント様には、そろそろ胡散臭がられています。まだ決定的、というわけではなさそうです。証拠を残していませんので」

それは、下手に動いたら尻尾を掴まれる、という事ではないのだろうか。

「用心に越したことはありません」

「それで、今回は早々に、連れて来られた本日中に計画を進行してしまおうと」

「ぶむ」

キヤルが口元に手を当てて、考え込む。

「今まで逃がした家庭教師候補は何人？」

「そうですね、今回が成功したら、五人目です」

「…なるほど」

他にも囚われの旅人がいるのなら、セインを助けるだけなのはおもったいないので、腹いせに一緒に逃がしてしまおうかと思っていたが、必要ないらしい。

「でも、既に四人も逃がしているなら、いい加減疑われているんじゃないの？」

「それは…」

パムルは何とか出来ても、その執事、とやらは誤魔化せないかもしれない。

「その、カントってな、どんな奴だ？」

ギヤンガルドの質問に、兄妹に代わってパムルが答える。

「昔から、我が家に仕えてくれていた男で、良くやってくれていますが、でも、少し過激な男で。人攫いを始めたのは彼なんです」

「執事が人攫いを、ねえ」

「ええ。デユナス家のためなら何でもすると言って…。実行するのも、だいたい彼です。ですから、今回セインさんを連れ去ったのも、多分」

「お宅の執事が自ら？」

「はい」

呆れかえる話に、一同から溜め息が出る。

「す、すみません」

「何度も言うけれど、貴女が謝る必要はないのよ」

肩をすくめて小さくなるパムルに、キヤルが視線を戻す。

「今夜、セインを外へ出してくれる予定だったところ、悪いのだけど、やっぱり今すぐ連れて帰るわ。案内してくれるわよね？」

兄妹の話からして、そのカントという執事が、既に疑ってかかっている事は間違いない。なら、カントがセインに対して何もしな

いでいるとは思えない。

「もちろんです」

パムルの暗い瞳が、何か決意したように瞬いた。

「善は急げ、といえますし。カントの事、既に気付いているとみて間違いなさそうですから、不意打ちを狙いましょう」

実はパムル。根暗なようで、実は行動力は物凄くあるらしい。

「まあ、でなけりゃ、ホテル運営したり裏で色々やってるわけないもんな」

しみじみと感心したギャンガルドだった。

さっそく一同は狭い部屋の中、ラルの説明でパムルがセインの閉じ込められている部屋を確認し、カールの用意した鍵を預かって、カントの徘徊しそうな通路を割り出す。

「今の時間でしたら、多分見回りが終わるころです」

「分かりました。では、お前たちはここに居て。疑いがかけられているとしたら、わたくしと一緒に居るのは不味いですから」

パムルの言葉に兄妹は頷くと、そつと部屋の扉を開け、廊下に誰もいないことを確認する。

「今です。お早く！」

カールの誘導で、全員が廊下へ飛び出した。

「どうか、お気をつけて」

「私たちは何とかクロム様にこの事をお伝えします」

「よろしくね」

カールとラルに見送られ、一同は廊下を駆け出した。

養虫の気持ちがちよっと分かったかもしれない

誰もいない廊下は既に薄暗く、夜の帳が間近であることを示している。

時々、設置されたランプに明かりを灯している使用人をやり過ごしながら、セインのいる部屋まで急ぐ。

全員の足音が、妙に響く気がした。

「ここです」

城の奥まった片隅で、パムルが足を止めた。

重厚な革張りの扉はピタリと口を閉ざしている。

「えらく立派な扉だね」

ジャムリムが見上げながら簡単な吐息をつく。

扉の周りは白い彫刻で飾られ、モチーフの草花が美しく絡まりあっている。

「客室ですから」

パムルがドアノブに手を掛けた。

がちやり、と音を響かせただけで、やはりノブは動こうとしない。

兄妹から預かった鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで静かに回す。

かちん、と、小さな音がした。

「待って」

小さいが、鋭い制止の声上がる。キヤルだった。

「お嬢？」

どうした事かと、訊ねようとしたタカの口をギャンガルドが塞ぐ。視線で促された先を見れば、廊下の向こうの角に、揺らめく影が見えた。

耳を澄ませば、微かに足音が聞こえる。

「早く中へ！」

全員が隠れる場所はないと瞬時に判断し、パムルは全員を眼の前の扉の中へと押し込んだ。

慎重に、素早く部屋へと潜り込み、細心の注意を払って扉を閉め、鍵を掛け直す。

室内は真つ暗だ。

「ベッドの下へ！」

真つ先に目に付いた大きな天蓋付きのベッドへ、全員を押し込んだ。

カーテンの開けられた、大きな窓の外から、微かな明かりが室内を照らす他は、これといったものは見当たらない。

ふと、違和感を感じたところで、扉のドアノブが、音を発して回された。

全員が息をひそめ、出来るだけ小さく身を縮ませる。

「おいたが過ぎますな」

男の声が響いた。

パムルの肩が、びくりと跳ねる。

静かに、キヤルがスカートの下に隠している銃に手を掛けた。

「このように明かりを消して、何の真似ですか？」

室内へ足を踏み入れた男の顔は逆光で見えなかったが、視線はこちらを向いていなかった。

と、いうことは、この部屋に居る別の人物へ向けられた言葉だということだ。

自分たちが見つかったわけではないのだろうか、警戒を解かずに息をひそめて様子を探る。何か、先ほどから違和感がある。

男も、同じ違和感を覚えたのだろう。慌てて室内用のランプに、手にしていたランプの灯を移す。

そこでようやく、この部屋に居るはずの人物の気配が、全く無いのだという事に気が付いた。

「しまった！」

大声をあげて、男が窓へ走った。

「くそ！」

外を見やっってから何やら悪態をつく、大急ぎで扉を開け放した

まま走り去る。

あつけにとられたのはキヤルたちだ。

ベッドの下の狭い空間で、お互いの顔を見やった。

「これは、何というか」

「ま、まず、こっから出ようぜ」

ベッドの下から這い出し、改めて室内を見渡せば、なるほど、自分たち以外は誰もいないではないか。

「逃げた？」

「みただね」

「ですね」

そうになると、全員でどつと肩の力が抜けた。

「だーから、言ったじゃねえか。あの賢者だぜ？」

がしがしと頭を乱暴に掻きながら、ギヤンガルドが片眉を上げる。

「何よ。だつてセインよ？あの足よ？無理でしょ。色々と！」

キヤルが頬つぺたを膨らませた。

「さっきの男、あれだろ？執事つて奴」

タカが聞けば、パムルがこくりと頷いた。

「彼が我が家の執事、カントです」

「なんか見た事あると思つたら、馬車で一緒だった男じゃないか？」

ギヤンガルドが顎に手を当てながら呟く。

「あ！そうだわ！逆光で良く見えなかつたけど」

山賊に馬車が襲われた時、他の乗客を背にかばつた男の顔を思い出す。

初老の、中肉中背で、いかにもそこらに居そうではあるものの、着ている衣服は上物で、物腰も上品だった。

貴族の執事なんぞしていると言われれば、なるほどと納得がいく。

「しかし、あんな風に正義感のある人間が、人攫いなんぞするもんなんだな」

だからこそ、セインも油断したのだろう。

「とにかく、セインが逃げ出したつて言うならまた色々計画が狂う

わ。多分、あのホテルに向かっていると思うから、こっちが先にセインを見つけないと」

キヤルが部屋を出ようと、毛脚の長い絨毯を一步踏み締めれば、パムルが首をかしげて窓際を指差した。

「あのう、あれは？」

見れば、カーテンの脇の壁際に、陰に隠れて車椅子がひっくり返っていた。

「セインさんって、歩けるのですか？」

「いや、あの状態じゃ、まだ歩くのは無理だぜ？」

セインの足を診ていたタカが、ごくりと唾を飲み込んだ。

彼の足は動かす事は出来ても、まだ立つのがやっとのはず。ぐるぐるに巻かれた包帯の下の足は、確かに治りが早いとはいえ、最後に包帯を巻き直したときはまだ内出血は引けておらず、赤黒いままだった。

「車椅子も無しに、どこへ行ったって言うのよ？」

キヤルの顔から血の気が失せ始めた時だった。

「あれ？」

大きなカーテンの揺れる、大きな窓の外から、金属がこすれるような耳障りな音が聞こえた。

「……っ」

微かに、聞き覚えのあり過ぎる声も聞こえる。

「まさか！」

いち早く気付いたキヤルを先頭に、全員で窓際へ駆け寄った。

「あら？」

確かに、声は窓側から聞こえたはずなのに、誰もいない。そういえば、さっきのカントとかいう男も、窓の外を確かめていた。

「ちよつと！どこに居るのよバカセイン！」

キヤルが怒鳴った。

「ひどいよー！」

すかさず、小さめながら声が返ってきた。

「ここだよ！もう、凄くしんどいんだけど」

声がしたのは窓の下。

よく見れば、大きな窓にはそれなりに、転落防止用の棧がしつらえてあり、その一番端に、何やら変なものが引っかかっている。

「何これ？」

しげしげと見やれば、何やら壁か柱の一部を無理に抉り出したような物体に、金属の金具が取り付けられており、その金具には、丈夫そうな鎖がこれまた取り付けられていた。

どうも、声はその先から聞こえるようだったので、キアルは背伸びをして覗き込んだ。

見えなかった。

「タカ。持ち上げてくれないかしら？」

身長が足りなかったらしい。

「こんなんで良いか？」

「ありがと」

ひよい、と抱えられたまま、ようやくと覗き込む。

「分かってやってるでしょ」

鎖に掴まって、半眼でこちらを見上げるセインが見えた。

「いいよ、もう。自分で上がるつもりだったし」

ぶつくさと口の中で何か不満げに呟きながら、セインが鎖をよじ登る。

足が使えないから、腕だけで登るのは苦労しそうだ。

「うわあ！」

急に引っ張られて、セインは悲鳴を上げつつ慌てて鎖にしがみついた。

「何やってんだ？んなどこで」

犯人はギャンガルドだった。

「あ、ありがとう。でも、もうちょっと穩便にひきあげてくれないか？」

「なんで？」

予告もなく引き上げられて多少驚いたものの、引き上げてくれた事には変わらないので礼を言ったのに。

「うん、いいや。そのへん君だし」

ひとりで妙な納得をした。

「窓の下にぶら下がってるなんて、何やってるのよ」

キヤルが、セインの前に仁王立ちになった。

「あー、ごめん？」

「ごめんじゃ済まないのよこのバカセイン！やっぱりあんたなんか引っこ抜くんじゃなかったわ！あたしを心配させるなんて良い度胸じゃないの！帰ったら紅茶！とびっきりの美味しいの淹れさせるから覚悟なさいよ！」

キヤルの怒号が飛んだ。

「うん。わかった。ごめんね？」

「いいん

へらりと笑ったセインの頭に、ゲンコツが落ちた。

「痛いよ！」

「痛いようにしてんのよ！」

いつもは届かないセインの頭頂部も、足のせいで床に座り込んでいる今なら手が届く。

早く足を治してしまおうと、セインは心ひそかに決意した。

行き先を決めよう 1

「だいたい、何で窓にぶら下がっていたのよ？」

もつともなことを、キヤルが聞く。

セインはちよつと天井を見上げて、ずれた眼鏡を直そうとして失敗しつつ、指を一本立てた。

「例えば」

「？」

「捕らえた相手が、放り込んだはずの部屋から消えていたら、どうする？」

急な質問に、応えたのはギャンガードだった。

「ま、普通、逃げたと思うだろうな」

面白そうににやりと笑うギャンガードにタカが相槌を打つ。

「逃げたと思ったら、追いかけるわなあ」

「ってことは、この部屋にいちいち鍵を掛ける必要もないわけでは？」

今度はセインが満足そうに続けた。

「このとおり、部屋の扉は開けっぱなし。僕は誰にも見られずに脱走出来るでしょ？」

えへへ、と笑う。

「まあ、君らが来てくれるなんて思いもしなかったから、助かったよ。とにかく、この部屋に長居は無用。早く出よう。僕、こんな所はもうこりこりだよ」

言いながら、ジャリジャリと鎖を引き寄せた。

「ちよつと待って」

鎖をまとめるセインの手を、キヤルが止めた。

「何これ？」

「へ？」

小さな指が示したのはセインの足首。

そこには枷が取り付けられていて、鎖は枷から延びている。
「何って、なんか気が付いたらあの柱に鎖で繋がれちゃっていたから」

ぶらりと、ちょうど手繰り寄せたらしい鎖の端を掲げて見せた。
セインの手からぶら下がる鎖には、先ほど窓の棧につつかえさせていた壁の残骸らしきものが、鎖の金具ごと揺れている。

セインが示した柱をみれば、床に近い部分に、削られて抉りとられたような痕跡。

あの凹みと、この残骸とを合わせたら、ぴったり合うのだろう。

「ふーん。足の悪いあんたを、わざわざ鎖で繋いだってのね？」

表情を変えずに、キヤルはパムルを見上げた。

「そういう事しそなのって？」

「え？はい、あ、あの、先ほどのうちの執事だと思います。こんな、足の悪い方を鎖で繋げるなんてひどい事……。申し訳ありません！」

セインの足の状態に呆然としていたパムルが、キヤルの言葉に慌てて頭を下げた。

「君は、ここのお嬢さん？」

「はい。パムル・ヴェーダ・デュナスと申します」

パムルは屈みこむと、セインの足をそと取り上げて、先ほどのこの部屋の鍵を取り出した。

「兄妹から預かった鍵に、小さな鍵が括りつけられていたのですけど、多分、この枷の鍵ですわ」

予想通り、枷に空いた穴と、小さな鍵は合致して、かちりと小さな音を発して枷が外れた。

「助かったよ。何とも重くてね」

「礼なら、私ではなく、貴方のお世話をさせていただいた兄妹に。わたくしは貴方に謝らなければならぬ立場ですから」

自由になった足をさするセインの前に、タカが車椅子を立て直して引いた。

「さて。早くこの部屋出ようぜ、旦那」

床に座ったままだったセインだったが、ふらふらとよろけつつ、何とか立ち上がって、タカに手伝ってもらいながら車椅子に座る。ようやく落ち着けると、肺から空気を吐き出して、セインはパムルを見上げた。

「自己紹介が遅れたね。僕はセインというんだ。よろしくね」

改められて名乗られ、パムルがあわててセインに頭を下げた。

「す、すみません。お察しの通り、わたくしは城主の娘です。この度は大変な失礼を」

深々と頭を下げる彼女に、セインは眉尻を下げて顔を上げるように促した。

「苦労しているみたいだね。君も、僕たちの脱走に協力してくれるの？」

パムルはハツとして、セインの眼を見つめた。

たった今会ったばかりで、名乗りはしたものの、お家の事情など説明もしていないのに、この男には既に見通されているようだ。

「何故、苦労しているなどと？」

「身内を悪く言うようで悪いけれど、君の母上に弟と、僕は会っているからね。あの二人に比べ、言動から君はずいぶんと常識があるように見える。それに、こうして皆に着いて来たつてことは、キャル達に協力してくれたんでしょ？なら、君自身は家の事や領内の制度の事とか、いろいろと何とかしたいと考えている。そうでしょ？」

言いながら、セインは車椅子を動かして、廊下へと移動する。全員がそれに合わせて動き、ジャムリムが車椅子を押し始める。

「良く、お分かりで」

車椅子の横に並び、セインを見下ろせば、にこりと微笑まれた。

「伊達に、君より長くは生きてないからね」

パムルはきよんとする。

セインは確かに自分よりは年上だろうけれど。あと数年もしたら、自分もこんなに物事を見通せるようになるのかと考えて、とても無理だと溜め息をついた。

一見頼りなさそうに見える細身のこの青年を、彼の何倍もたくましく見えるギャンガルドが目置くのが、なんとなく分かったような気がした。

「さて、この城は丘の上に坂を利用して建てられているだけあって、ちよつとややこしい作りのようだけれど……。僕らはまず、どこへ行ったらいいのかな？」

セインに訊ねられ、パムルは全員が廊下へ出たことを確認すると、再びセインの閉じ込められていた客室の扉を閉めて鍵を掛けた。少しでも時間稼ぎにするためだ。

「ここは、造りとしては四階になります。セインさんを連れて逃げるとしたら、車椅子を持ち上げて階段を下りなければなりません。このまま廊下を進めば前庭に出られますが、目立つので諦めた方がよいと思います。中間地点にある、使用人間の階段なら荷物用のスロープ付きですので、車椅子での移動も可能ですし、そこからなら地上に出るには二階分で済みますけれど」

走り出しながらパムルが説明する。

この城は丘陵を利用して、正面から奥に行くにつれ、傾斜を利用して階数が増える仕組みになっている。正面から入ると一階だが、そのまま真っ直ぐ突き進むと、いつの間にか二階になっているのだ。丘の斜面を平らにせず、てっぺんを正面玄関にして下り坂の上にそのまま城を建てたため、奥に行くにつれて下に階が増えるのだ。

「足の不自由な人間なら、スロープ付きの方が移動しやすいと気付かれていれば、そこで待ち構えられている可能性があるってことか」
ギャンガルドがにやりと笑う。

「ふん。なら、このフロアの階段を下りちまおう。城の中を進むのも面倒だしな」

「その意見は賛成だけれど……」

セインの眉間に皺が寄る。

「階段で、誰が僕と車椅子を運ぶのさ」

じろりと睨めば、

「俺様」

と、あっさりと言想どおりの答えが返って来た。

行き先を決めよう 2

「。パムル。階段はどこ？」

自分で話を振っておいて、セインは無視を決め込んだ。

「すぐそこです」

彼女の指さす先に、小さいながら豪勢な階段が見えた。

「急ぎましょう！」

駆け足になる彼女のあとに、全員が続く。

セインの閉じ込められていた部屋から出て、廊下の突き当たりを曲がってすぐ。城の正面とは反対側に位置する場所に、細い階段があった。

細いながらに、手摺には彫刻が施され、踊り場の端々には小さな天使や女神の像が微笑んでいる。

なんとも贅沢な装飾なのだが、それらをじっくり見ている余裕はない。

「この階段を下りると、城の裏庭に出ます。裏庭といっても、ほぼ森ですが、そちらから街へ降りましょう」

飛び込むようにパムルが階段を下りる。

「タカ、お願いしてもいいかな」

「へい。旦那、肩に掴まって」

タカがセインの長身を支えて立たせると、セインの腕を肩にまわし、階段を下りるのを手伝う。そのすぐ横をキャルが陣取り、後ろにジャムリムが付く。

最後に、なんとも微妙な表情で、車椅子を担いだギャンガルドが続いた。

「俺が運ぶつつつてんのに」

「車椅子運んでるでしょ」

セインよりも早くキャルが返す。

「いい加減に信用がないんだって事、自覚してほしいものだわ」

振り向きもせず、刺でも生えていそうな台詞をキヤルがぶつけるのだが、ギャンガルドは意に介していないようだ。

「まあいいや」

何をふっ切ったか知らないが、上機嫌に鼻歌まで歌い出す。

「楽しそうだねえ？」

くすくすと、笑いながらジャムリムがギャンガルドを見上げた。

「そりゃあ、な。海の上も楽しいが、こういふの、俺は好きだぜ？」
にやりと、白い歯を見せて不敵に笑う。
元々、こういふ性質なのだ。この男は。

海賊王ギャンガルド。

泣く子も黙るこの名を持つこの男は、心底現在の状況を楽しんでいる。

二階の踊り場まで来ると、廊下の奥から話し声が聞こえた。

慎重に、パムルが足を止め、全員を止まるように手で合図すると、彼女だけ、そっと廊下に姿をさらした。

「何事です？」

「これはこれは、お嬢様。ご機嫌麗しゅう？」

聞き覚えのある声は、あの執事のものだ。

「執事の貴方が、城の使用人を引き連れて、物々しいですわね」

「お気になさらず。野良猫が城内に入りましてな。皆で搜索しているのですよ。引っかき傷など付けられては、堪りませんからな」

鼻に着く物の良い方をする。本当に、あの馬車で知り合った紳士なのかと、キヤルは眼を丸くした。ついで、怒りで身体がプルプルと震えだす。

「キヤル？」

小さな声で呼び、セインがキヤルの頭を撫でる。

「分かつてる」

キヤルも、小さく返事して、気持ちを落ち着かせようと深呼吸し

た。

「ところでお嬢様。お連れになったお友達の皆様は、どうされました？」

「皆でしたら、とっくに帰っていますわ。この家ですもの。分かるでしょう？それとも、わたくしのお友達が何か？」

パムルがぎろりとカントを睨めば、カントはわざとらしく降参のポーズをとった。

「いえいえ、パンナ様のお話をお聞きしましたら、私めの知っている方々に似ていらっしやる風貌でございましたので、もしやと思っただのですよ。他意はありません」

物腰はあくまでたおやかで、なるほど紳士的だ。だが。

人を探るようなその目線は、嫌悪するに値する。

パムルはそれを一瞥して、鼻で笑った。

「わたくしを疑う暇があるなら、逃げた家庭教師をさっさと探す事ですわね」

射るような視線を受けて、カントは息を飲む。

「…ご存知でしたか」

「ご存じも何も。貴方がわたくしを疑っていることくらい、常日頃から知っています。それとも、そんな事にも気付かないほど、わたくしが愚鈍だとも？」

今度こそ、カントは顔色を失い、二歩、三歩と後ろへ下がると、深々と頭を下げ、その場をいそいそと去って行った。

慌てるその背中が見えなくなる前に、階段の踊り場の陰へ戻る。

「さ、皆さま、行きましょう」

再び先頭に立って、全員を誘導する。

「ふえー。パムルって、案外度胸あるのね」

キヤルが感嘆の声を上げると、恥ずかしそうにパムルが振り向く。「常日頃のうっ憤を晴らそうと思って。いわゆるやつあたりです」

「でも、あれはよっぽど肝が据わっていないと出て来ないセリフだ

よ

「ジャムリムまでが興奮気味だ。

「そうですね、まあ、日常茶飯事で、色々ありますから……」

「ちよつと視線が遠くなったパムルに、全員がなんだか納得して、それ以上は何も言えなくなつた。

「どれだけ苦労してるんだろう。この子」

「セインは半ば感心しつつ、小さく呟いた。

彼女の気苦労の多さは、この街を見れば良く分かる事だったので、度胸も苦労の賜物と思えば、一瞬頼もしく思えた彼女の背中も、哀愁漂つて見えるのだった。

「ストレスで、いつか倒れるんじゃないかねえの？」

「タカまでが、本人に聞こえないように小声で呟く。

「なるべくなら、助けてもらったお礼に何かしてあげたいのだが、旅人の身ではそういうわけにもいかず。

「こんなに苦労しているのだから、彼女の前途は明るいものであつてほしいと願わずにはいられない一同だった。

「さ、着きました」

「階段を降り切ると、少し開けたホールになつていた。

「そのホールの脇に、大きなガラス張りの扉があり、そこを開けると外へと出る事が出来た。

「まだまだ城の敷地内ではあるのだが、ひとまず城内から出られたというだけで、一同に安堵感が生まれる。

「街を出るまで、気は抜けないよ？」

「セインが釘を刺した。

「荷物も置きっぱなしだろうし、クレイの事も心配だし。一旦、あのホテルに戻らないといけないでしょ？」

「当然、待ち伏せされているだろう。

「しかし、そんなセインの心配を、キヤルは鼻で笑う。

「ふふーん。こうなると思つて、あたしの準備は万全よ！」

「言つたり、指笛を鳴らした。

「お嬢！見つかるって！」

慌てた夕方を無視して、指笛は響いた。

「大丈夫よ。ちよろつと短く吹いたただけだもの」

キヤルは全く意に介さない。それもそのはず、しばらくもしないうちに、馬の蹄の音が聞こえ始める。

「クレイを出してきたの?!」

驚くセインに、キヤルは大きく胸を反らした。

「そうよ。だって、セインったら立って歩くのがやつとで、走れないじゃない。それに、クレイもあんたを恋しがっていたしね」

「うわー」

まさかのまさかだった。

キヤルがにんまりと笑うのと、栗毛の馬が姿を現すのとは同時だった。

「クレイ！」

真っ先にセインの傍へ走り寄り、ぐいぐいと鼻面を押しつける。

「あらクレイったら。あたしにお礼は？」

キヤルが拗ねたように腕を組み、頬を膨らませれば、慌てたように、クレイはキヤルにも鼻面を押しつけた。

そのクレイの背中に、見慣れた大きな物体が括りつけられているのに、セインはぼかんと口をあける。

「キヤル」

「何？」

「君って、凄いなあ」

「当つたり前でしょ！」

クレイの背中には、キヤルの鞆とギャンガルド達の荷物が、縄で結ばれ、左右に乗せられていた。

「重かつたんじゃないの？」

気遣わしげにセインがクレイの長い顔を撫でるセインに、クレイは嬉しそうにすり寄った。

クレイの背中にセインが跨り、車椅子を庭の生垣の中に隠すと、

キヤルは意気込んで歩き出す。

「これで、心おきなくこの街から出られるわー！」

パムルの事情

しかし。

「いや、多分街からは出られないだろうね」

セインが遠く、街を囲む壁を睨んだ。

「この街を取り囲む壁が厄介だ。きっと、今頃既に、出入り口は封鎖されているだろうね」

「むう。じゃあ、どうしろって言うのよ！」

ぶくりと頬を膨らませ、キヤルが歩みを止めずにセインを見上げた。

そのキヤルを、器用にひょいと持ち上げて、自分の前に座らせながら、セインが思考を巡らせていると、道案内のために先頭を歩いていたパムルが振り返った。

「あの。もしよろしければなんですが」

彼女特有の、どこかオドオドとした遠慮がちな声音に、大人全員が苦笑する。

「何だい？良いから、言ってみなよ」

ジャムリムが先を促すと、パムルが森の一角を指差した。

「この森の奥に、私の自宅を兼ねた小さな家があります。そこにしばらく隠れていただこうと思っていたのですけれども」

そう言えば、この領主の娘は、何度か家庭教師候補を逃がしているのだ。それなりの準備はしてあったのだろう。

「それは助かる！って、え？」

パムルのありがたい申し出に、一瞬喜んだものの、何か引っかかって、セインは眉をひそめた。

自宅を兼ねた家。それはまた、何というか。

「えーっとお？その、自宅？」

「あの、はい。その、私、あまり城で落ち着けないものですから、家族に内緒で、こっそり建ててもらったんです。息抜きの場所とい

いますか、もう自宅ですね」

顔を真っ赤にして、また先頭を歩き出す彼女の、ほっそりとして小さな背中が、妙に哀れに見えた。

「家族の誰も知らないの？」

「はい。城の外のごく親しい友人にしか、場所を明かしていませんので、隠れ家には持って来いだと思えます。というか、普段から私の隠れ家なのですけれど」

と、いうことは、彼女は父親であるクロムにさえ、その場所を明かしてはいないのだ。

「…じゃあ、ちよつとお願いしようかな」

「分かりました。では、こちらです」

にっこりと微笑むパムルとは対照に、全員の笑みが引きつっていた。

パムルの隠れ家は、なるほど森の奥で、あまり手入れもされていないような場所にぼつんとあった。

城は木々に隠れて見え、辿り着くまでの道も、ほぼ無い。

それでも鬱蒼とした草きれの中にあるわけではなく、女性が行き来するにはさほど問題はないようだった。

「へえ」

呟いたのはギャンガルドで、着くなりぐるぐると家の周りを点検し始める。

「珍しいの？」

「まあな。海の上にはっかかりいるからな。船の点検同様、隠れ家にするってんなら点検しちまわねえと気がすまねえ。それに、小さいなんて言いつつ、たいした造りだぜ。この家」

確かに小さな家ではあったが、しっかりと二階建てでテラスまであり、細部の作りも凝っていた。

「あれ？どっかで見たとような？」

セインが首をかしげていると、先に中へ案内されていた女性陣が

ら歓声が上がった。

「可愛いじゃないか」

「こんな家に住みたいわ!」

それで、セインも思い出す。

「あ。ホテルに似ているのか」

木組みのタイル、華美ではなく上品にしつらえられた手すりや柱。なるほどね」

この街を訪れた際、宿泊先にと求めた、パムルの経営するホテルに雰囲気似ているのだ。もちろん、この家はあのホテルとは違い、古い館を改築したのではなく、新しく建てたものではあつたけれど。

パムルの好みなのだろう。華美な城の中とは大違いで、彼女の内面を思わせる。

案内された小さな馬小屋にクレイを繋ぎ、家の中に入れば、アンティークのように丸みを帯びた調度品が、控え目に並んでいた。

「中の物はご自由にお使い下さい」

「良いの?」

「はい。お夕食は皆さま済まされてはいると思いますが、足りなければキッチンが食糧庫になっていますので。食器も、片付けて下さればご自由に」

ホテルの支配人であるパムルらしい心遣いだつた。

「ほんと、領主の娘なんかにしとくの、勿体無いわ」

キヤルがしみじみと呟いた。

「それは、褒めていただいているのでしょうか?」

「だって、貴族の娘らしくないもの。すっごく好感が持てるわ!」

「そ、それは、その、ありがとうございます?」

キヤルの大絶賛に、疑問符の付いた礼を述べる。

「あはは。それじゃ誤解を招いちゃうよキヤルちゃん。貴族の娘つてのは、豪華なドレス着て、スプーンより重いものなんか持った事なくて、着飾るだけ着飾って、社交辞令が得意なだけで、何にも出

来ないもんだ。世間ずれもしているしね。それに引き換え、あんたはホテルの経営もしているし、この街を何とかしようとしている。立派なもんだよ」

「あ、ありがとうございます」

ジャムリムが褒めた途端に、パムルがワツと泣きだした。

「え？ちよ、あたし気に触るような事言ったかい？」

慌てたジャムリムに、パムルが頭を振る。

「ち、違うんです。私、わたしっ、今まで誰かに褒められた事も、認めてもらった事もなくて！すみませっ…、う、嬉しくてっ」

「パムル…」

よしよし、と、ジャムリムもキヤルも、彼女の頭や背中を撫でた。さすがに小さなキヤルにまで慰められて恥ずかしくなったのか、ぐすぐすと、鼻をぐずらせながら、パムルが顔を上げた。

「みつともないところ、お見せしました」

ハンカチで涙を抑えながら頭を下げる。

「みつともなくなんてないよ。あんたが褒められた事がないなんて、そっちの方が信じられないよ。もっと自信を持ちな！」

ジャムリムの笑顔につられて、パムルもはにかんで見せた。

「私、これから父の元へ行っつて、状況を説明して来ます。皆さんを、必ず脱出させてみせます」

泣き笑いの顔は歪んで、決して綺麗ではなかったけれど、とても魅力的だった。

「ありがとうございます。僕らも、色々考えてみるよ」

「はい。では、私はこれで。この場所が見つかる事はないと思いますけれど、皆さま、どうかお気をつけて」

ぺこりと頭を下げて、彼女は城へと戻って行った。

外は真つ暗で、それでもランタンも持たずに、月明かりだけでしっかりと歩いて行く彼女の足取りに、本当にこの家で生活しているのだから事が窺えて、見送りに出たセインは、しみじみと溜め息を零した。

「あの子があんなにしつかりしているようでどこかビクビクしているのって、自分に自信がないからだだったんだね」

「良い娘だよなあ。切ねえなあ」

「どこかに良い嫁入り先は無いのかね？」

「うちの船員の誰かとかどうつすか？」

「駄目よ。嫁は港に置き去りでしょうが」

それぞれがそれぞれに、思いつきり溜め息を吐き出して、小さくなつて行くパムルの背中を見送ったのだった。

「僕も結構苦労性だと思つていたけれど、上には上がいるもんだねえ」

「アレは、苦労性つてレベルじゃないでしょ」

パムルの為にも、この街の現状を何とかしてやりたいところだが、あの領主とその息子の顔を思い浮かべれば、二度と会いたくないのも実情で。

「王様に言つて、何とかしてもらえないかしら」

「そうだね、考えておこうよ」

という結論に落ち着いた。

「今日は疲れたなあ」

ひとまず落ち着こうということで、セインがキッチンを拝借して、タカの手を借りながら紅茶を淹れる。

「攫われたりするからよ」

「キヤルだつて誘拐されたじゃない」

唇を尖らせるキヤルに、セインはギャンガルドを指差した。

「いつの話だよ」

「この間でしょ。そんなに間は開いていないわよ」

「あー、あんときは楽しかったつすねえ」

「なに？あんだ、キヤルちゃんを誘拐したりしたのかい？！」

「そーなのよ！出会いそのものが最悪なのよ聞いて！」

全員が、ようやくいつもの調子を取り戻し、一人住まいらしい小さなリビングは、賑やかな声で一杯になった。

「あー、ところで、明日なんだけど」

「なによう、せっかくギャンギャンいじめに盛り上がって来たのに」
「えー、俺いじめられてんの？」

紅茶の香りも相まって、セインと合流できたことで、全員に安心感が生まれていた。キヤルがいつになくギャンガルドに絡む。

「お嬢、あんまりうちの船長いじめないでやって下さいよ」

タカがセインの代わりにカップを配る。

「へえ、美味しいねえ」

ジャムリムが驚きながら紅茶を口に含む。

「まあ、夜も更けて来たし、多分今夜はあまり眠れないだろうから、とりあえず体力の温存はしといた方が良さと思うのだけどさ」

「そうだな。まあ、今日着いたばかりで色々謎だから、偵察には行ってえんだろ？」

ギャンガルドがキヤルの攻撃をかわしつつ、セインに応えた。

「大体の街の造りは分かっているのだけど、人の動きまでは把握していないからね」

「つつても、いいのか？」

「何が？」

「明日、あの姉ちゃん来るんだろ？」

確かに、パムルがそんなことを口にしてた。

「うん。今まで何人か逃がしているらしいし、今回も同様に逃がしてくれるつもりなのだろうけれどね」

このまま、パムルとクロムに任せておいても構わないのかもしれないが、どうにも気になることがある。

「ちょっと、ね。あの執事、多分何か、他に裏がありそうな気がするね」

カントと聞いたか。あの男の、紳士然とした態度が、含んだ笑みが、どうしてもセインの頭から離れないでいる。

「もしかしたら……」

「ジャムリムの町の連中か？」

流石、勘が鋭いというか、鼻が利くというか。

セインは小さく笑って、頷いた。

「結局、あの時は連中の雇い主はどっかの馬鹿な貴族だろうってことでカタが付いたけど、家庭教師に剣術の使い手を探していたって、あの執事の言い分と、重なると思ってるね」

「出来れば連れて来い、ってか？」

「そ。言ってる事、一緒でしょ？」

「ふむ」

ジャムリムが住んでいた町で、一行は盗賊団と刺客に襲われている。

結局のところ、勝手に自滅してくれたのだが、間抜けなことに雇い主の信書を持っていた。その内容が、王都で近衛兵の訓練をするために国王から召喚された剣術の使い手を、出来れば生かして連れて来い、それが出来なければ殺せ、というものだったのを、ギャングルドは思い出す。

「確かに、一致するわね」

急に、二人の会話に、キヤルが割って入った。

森の中の小休止

セインが城に呼ばれている事は、タカが御者に話をしている。それをあの執事が聞いていたなら余計に確証が持てる。

「そもそも、何であるの男、あの馬車に乗っていたんだ？」

「どこから乗車したのか、誰か見てた？」

全員で首をかしげた。

「確か、あたしの街を出て、次の停留所から乗って来たように思ったけどねえ？」

「馬車があの大雨のせいで迂回しまくったしな」

「執事って、仕えている屋敷を留守にしても良いものなの？」

「その辺はパムルに聞けば分かるんじゃないか？」

タカがキッチンにあったパスタを揚げ、砂糖をまぶして作った即席の菓子をテーブルに出し、セインが新しく淹れなおした紅茶のおかわりをしつつ、話は膨らんでいく。

「カントつつつたか。あの執事」

「うん。そんな名前だったね」

カシリと、パスタの菓子をかじり、セインがタカの言葉にうなづく。

「僕らの名前はまだ把握していないようだったけれど。彼が駅馬車に乗車して来たタイミングや、駅馬車に乗っていたそもその理由も、雇った連中の後始末のためだとしたら、つじつまが合うけどね。とっても間抜けた強盗団の雇い主が、彼だっていうのが、なんだかピンと来ない。混じってた殺し屋っぽいのは、彼が雇ったのだとは思うけれど。もしかしたら、あの強盗団の連中は、殺し屋連中が即席で雇った可能性が高いかもね」

狡猾そうなカントの表情を思い出し、キヤルが眉間に皺を寄せる。

「まあね。抜け目なさそうだし。でも、セインにまんまと逃げられているあたり、結構マヌケかもよ」

「ひどいなあ。心理を突いた僕の作戦が功を奏したただだよ」

「何にしたって、俺たちを騙して、賢者を誰にも見られずに攫ったのはあの男だってことは間違いねえんだ。それなりに頭は切れると思っぜ」

にやりと、嬉しそうにギャンガルドが顎の下を撫でながら、ちらりとセインを見た。

「足が不自由ってたって、あんたを攫うのは生半可な事じゃ出来ねえだろ」

「悪かったね。迂闊にも攫われて」

につこりと、セインが微笑み返した。

「…その微笑み返しはやめてくれねえか」

「さあ？どうしようか」

じつとりと額に汗の浮かんだギャンガルドに対し、微笑むセインに軍配が上がるのはいつものことだ。

「さて」

ギャンガルドが耐えきれなくなって眼を反らしたのを機に、セインが一息つく。

「キヤル、君はもう寝る時間だよ」

この発言に、当のキヤルが怒った。

「何よ！カントの事もあるし、明日の脱走の事もあるのに、あたしだけ寝ろっていうの?!」

睨んだその眼の下には、うつすらとクマが出ていた。

「そんな事言っていないよ。僕も寝る」

「え？」

「だって、疲れちゃったしね」

そういえば、この中で一番疲れているのは、セインかもしれない。「もう、くたくただよ。足も早く治したいのにさ。いろんな事ばかりあって、さつきから眠いんだ」

セインにしては珍しく、そんな事を言う。

「この家の客室はどうなってんだ？」

「へえ。さつき確かめましたかね、ツインルームが二つありやす。あとはあのパムルって人の寝室が一つ。五人はベッドで寝られやす」ギャンガルドの疑問に、タカがテキパキと答える。

「パムルの寝室なんて、使ってもいいのかな？」

「大丈夫じゃないかねえ？自由にしてくれって言っていたし、あの子の事だから、人数も把握してそう言っていたんだろっから」

「じゃあ、女性の部屋に男が入るのは不味いから、ジャムリムが使って。僕とキヤル、ギャンガルドとタカでいいよね」

「えー！あたし、ジャムリムと寝たい！」

部屋の割り振りに、キヤルが口をとがらせた。

「え」

「え、じゃないわよ。良いじゃない！男が三人もいるのよ。パムルの部屋にベッド一つ持ち込んで、女同士で寝たいわ！」

「あら。良い案だね。でも、キヤルちゃんなら一つのベッドで一緒に寝ても大丈夫じゃないかい？」

「よし！決まり！」

「えー……」

キヤルの提案にジャムリムまでが賛成したとあつては、男どもの出る幕は無い。

「あー、じゃあ、俺は男同士で同じ部屋なんざ、もうごめんだから、一人で寝させてもらっせ」

本心は、ジャムリムと同じ部屋で過ごしたかっただろうギャンガルドの声色は、なんだかしょんぼりしていた。

「じゃあ、僕とタカ？えっと、それでも良い？」

「おれっちはかまわねえっすよ。むしろ、誰かいねえと、旦那が大変でしょ？」

「あははー。ごめんね。ありがとう」

そんなこんなで部屋割が決まると、夜のティータイムの後片付けをして、それぞれが部屋に入って就寝する事になった。

「じゃ、私らはこっちな。お休み！」

「お休み」

楽しそうに女性陣は一番小さな部屋へと入って行き、ギャングルドはどこから持ち出したのか、ワインを片手に消える。

セインとタカも、残った部屋へと入った。この部屋だけ、他の部屋と違い一階にあるので、階段を上らずに済んで、セインはホツとした。

「旦那、剣にはならないんですかい？」

とつと寝てしまおうと、ベッドへ潜り込めば、タカが着替えながら聞いてくる。

「んー。その方が治りも早いから、そうしたいのは山々んだけど…。良い？」

「何遠慮してるんすか。旦那が健康な方が旅は楽になるし、いざつて時に備えた方が良いっすよ」

もつともであるので、本当ならもつと先に、セインロズドの姿になつてしまいたかったのであるが、今まで落ち着ける場所がなかったうえに、姿を変えても良い場面が無かったので、重い足を引きずって、現在まで来てしまったのである。

セインはセインロズドの姿になることで、大抵の怪我を素早く治してしまえる。普段「でも、治癒力は異常に高いが、セインロズドになつた時との差ははるかに大きい。

相変わらず、どういう仕組みなのかは、セイン本人にもわかってはいない。

多分、ヒトの姿でいるよりも、エネルギーを使わないからだろう、という、なんとも曖昧な持論しか持ち合わせてはいないのだが、この事柄に関しては、困ったことは無いのでセインもあまり考えないようにしている。

「まあ、タカが気にしないなら別に良いんだけど」

「何がっすか？」

普段と違い、なんだか遠慮がちなセインに、タカが首をかしげる。「見た目が物凄くシユールなんだ」

「……………」

思わず、ベッドの中できちんと枕をして横になっている抜き身の剣を想像した。

「…確かに、凄い光景かもしれねえ…」

しみじみと呟いた。

「それでも平気？」

言われてみれば、そんな状態の物体と、ベッドを並べて寝るのである。

かなりシユールだ。

「で、でも、お嬢は今まで付き合っただけでしょ？」

「そりゃあ、まね？」

八歳の女の子が耐えられたのだから、自分だって気にさえしなれば大丈夫なはず。

「旦那、今までずっとそうやって治して来たんでしょ？」

「まあ、そうだね」

「だったら、大丈夫！気にしません！たぶん！」

勢いよく胸を叩いたタカだった。

それで、安心したのかホッと息を吐き出して、セインはギャンガルドに向けるのとは違う笑顔をタカに向けた。

「ありがとう。それじゃ、遠慮なく」

ランプでうつすらと照らされていた部屋が急にまばゆく光り、思わず目をつぶったタカが、そうつと瞼を押し上げた時には、そこにセインの長身は無く、代わりに見事な刀身をきらめかせた剣が横たわっていた。

ベッドの中に。

「こりゃ、確かに…」

シユールだった。

森の中の小休止2（前書き）

えー、右手首を骨折しました。

手術しなきゃいけないようで、完治まで半年かかるらしいです。

最近は更新が遅かったんですが、さらに遅くなります…。

すみませんm(。_。;)m

でも、ちゃんと書きあげますので、よろしくお願い致します。

森の中の小休止2

深夜に差し掛かろうという時刻でありながら、ちらほらと蠢く男たちを後目に、パンナは大急ぎで城内を闊歩していた。

城主であり、領主でもあるパムルの命で、領民たちはもちろん、城に使える使用人たちも、見張り番以外は、本来ならば寝静まっていなければならないのだが、当のパンナ本人が寝てしまっている。バレなければ良い。

そういう事であるのだろう。あの、逃げたセインという青年を探して、カントの手配の元、使用人たちを含め、身のこなしが常人ではない者まで混じっている。

「何が、デユナス家の御為か…！」
尊敬しているといったその口で、パンナを欺いている執事に、パムルは苛立ちを隠せなかった。

せっかく捕らえた家庭教師に、連続して逃げられているのだから、隠密に事を進めたいのなら、あの雇い入れたらしい連中は何なのか。今まであんな連中は見た事がない。

それこそ、パムルがこうして目撃しているのだから、人にいくから見られてもかまわない、という事なのだろう。

得体の知れない連中を城内に招き入れたとパンナが聞けば、カント自身が窮地に立たされるだろうに。

「何か、考えているとしか思えない」

セインの予想を聞いていたわけではないが、パムルは独自にカントの行動の不可解さに気付いていた。

急ぐために、パムルの足は速くなり、歩幅も大きくなる。

目的の部屋に辿り着き、大きく息を吸い込むと、唇を引き結び、パムルは大きく堅い扉をノックした。

「…誰だね？」

「夜分遅くに申し訳ございません。わたくしです。パムルです。お

父様」

幸い、父は起きていてくれたらしい。

「そろそろ、来る頃だと思っていたよ」

父の言葉に、少し笑みがこぼれる。

「入りなさい」

ようやく入室の許可が下り、細い指先に力を入れて、ドアノブを掴む。

「失礼いたします」

そうつと、パムルは父の部屋へと、足を踏み入れた。

「あれ？」

朝。

鏡の前で、セインが一生懸命顔をいじっているのを、ジャムリムが見つけた。

「何やってんだい？」

「あっ」

見られているとも思っていなかったのだろう。慌ててセインが振り返った。

いろいろと人並み以上のこの男が、ジャムリムの気配にも気付かずに、鏡を覗き込んで何をしているのかと思えば。

ジャムリムは思わず小さく笑った。

「ひどいなあ」

「くくく、ごめんよ、セインさん」

滲んだ涙をぬぐって、ジャムリムは改めて、セインの顔を見た。

彼がナルシストで、一生懸命お肌のケアをしていたわけではない。それでもそれなりに、セインの顔は整っている。その、整った鼻筋の上に、いつもの眼鏡が乗っかっているのだが。

「どうしたっていうんだい？それ」

眼鏡が斜めになってしまっていた。心なしか、形まで変わって見える。

「あー、昨日、君らと再会する前に、ちょっとね」

考えてみれば攫われたり脱出したりと、昨日は大忙しだったセイ
ンである。あの城で、みんなと再会する前にひと悶着くらいはあっ
たのだろう。

「そういや、昨日は眼鏡、掛けていたっけ？」

「掛けていましたよ。けど、邪魔になつて途中で外したんですよ。
なにせ、コレですしね」

ぱ、と、フレームを支えていた手を離せば、眼鏡は盛大にずれた。
「眼は見えるのかい？」

「ええ。本当なら、眼鏡はいららないのですがね。無いと落ち着かな
いというか。習慣みたいなもんです」

苦笑しつつ、セインは眼鏡を外した。

「街へ戻れたら、眼鏡屋を探さないとねえ？」

「探して、修理してもらう時間があれば良いんですけどね」

「本当に、そんな余裕があれば良いけど」

下から聞こえた声に、視線を下げればキヤルが眠そうな目を擦っ
ていた。

「おはよう、キヤル」

「おはよう」

「おはよう、キヤルちゃん」

「おはよう、ジャムリム」

それぞれ朝の挨拶をかわすと、朝食の準備が出来ていると言って、
キヤルはリビングへと戻って行った。

「昨夜は寝るのが遅かったからなあ」

キヤルが顔を洗ったのは確認しているので、すっかり眼は覚めて
いるだろうと思っていたセインは、まだまだ眠たそうなキヤルの様
子に眉尻を下げた。

「キヤルちゃんだって、まだまだ子供だもの」

ジャムリムはキヤルの後ろ姿に眼を細める。

「さ。せっかく呼びに来てくれたんだ。早く行って朝飯食べちまお

うか」

セインに肩を貸そうと、手を伸ばして気が付いた。

「あら？」

昨夜は歩く事も立つ事も出来なかったセインが、壁に身体を凭れ掛けているものの、ちゃんと立っている。

「少し休んだら、だいぶ足も楽になりました」

よたよたと危なっかしくはあるものの、歩き始めた。

「一晩で、そんなに治るもんかい？」

「いやあ、常人より、もともと丈夫に出来ていますから」

それでもちよつと不安定な歩き方なので、結局無理やり肩を貸した。

「すみません」

「いや、これくらいは良しさ。しかし、丈夫とかいう問題かい？」

「はは。良く驚かれます」

笑ってごまかすセインに、ジャムリムはため息をつきつつ、ごまかされることにした。

「ま、良しさ。広い世の中、そんな事もあるだろうさ」

「恐れいります」

さすが、あのギャンガルドが気に入って、傍に置くような女性である。

セインはジャムリムの細い肩に体重がかからないように気をつけながら、ひよこひよこ足を進めた。

あとで、ホテルに残してきただろう松葉杖の代わりを、タカに作ってもらわないといけないだろう。

一晩のセインロズド化で、ずいぶんと足は良くなった。とはいえ、まだ完治とは言えない。

それに、このままさつさと完治して、とつと歩きだしてしまつては、さすがに言い訳するのがつらいだろう。

食卓に着けば、キャルが無言で椅子を引いてくれた。

「ありがとう」

席に着けば、テーブルの上は既に美味しそうな朝食が並んでいた。こんがりと焼かれたトーストにはバターがとろりと塗られ、好みに合わせるように手作りのジャムと蜂蜜が添えられている。淹れたてのコーヒーに焼きたてのビスケット。新鮮な野菜にチーズ。

ベーコンと根菜のスープは湯気と良い香りをたてている。

「おはようございます旦那！」

「おはよう、タカ。ごめんね、昨夜は」

「いいええ！面白いもん見してもらったんですから、貴重な体験でやした」

こそこそと、声を小さくしてしゃべってくるところが、気遣い名人のタカらしい。くすりと笑えば、にかりと笑い返してくれた。

「さ、食べようぜ」

ひとり、何だか機嫌の悪かったギャンガルドが、さっさとスープを口に入れていく。

よほど満足した味だったのか、どんどん機嫌が上昇するので、キヤルなんかは呆れて見ていた。

脱走中（前書き）

無事退院しました。

入院中に携帯でポチポチと書いてましたが、利き手は怪我するもんじゃないですね。

脱走中

「今、何か物音がしなかった？」

キヤルがスープをすくったスプーンを口に運ぼうとして、動きを止めた。

全員が、耳を澄ます。

遠くから、嘶きが聞こえた。

全員の視線がセインに注がれて、慌てて首を横に振る。

「クレイの声じゃないよ？」

「ご飯あげたの？」

セインの愛馬でありながら、キヤルのお気に入りでもある栗毛の馬は、今朝も元気に草を食み、セインを乗せて清々しい早朝散歩を堪能している。

なのに疑いの眼差しを向けるキヤルに、セインはムツとして反論しようとして口を開けた。

「ご飯どころか朝の散歩だってして」

ドガガン！！

最後まで言い終わらないうちに、玄関の扉がけたたましい音と共に吹っ飛んだ。

「皆さん！今すぐお逃げ下さい！」

馬で蹴り倒したドアを踏みつけて、馬に乗ったまま服も髪も乱して現れたのは、この家の持ち主であるパムルだった。

「どうしたっていうの！？」

あまりの登場の仕方に流石に驚いて、全員の動きが固まった。セインだけが、辛うじて声を上げて事の次第を問い質す。

「詳しく話している時間はありません！外に馬を連れて来ましたのでお早く！道案内は彼らが」

一息に喋って、パムルは馬から飛び降りる。彼女が指し示す外を見れば、カールとラルの兄妹が、馬を牽いていた。

「セイン様のお馬も、今お連れしますから！」

自分の乗って来た馬の手綱をジャムリムに手渡し、パムルはひらりと身を翻し、砕けたドアから外へと飛び出していく。ただ事ならない様子に、全員が一斉に動いた。

「忘れ物はないね？」

荷物を手早くまとめ、各々宛がわれた馬に飛び乗った。

最後に、駆けて来たクレイにセインが乗り、全員が馬上に居る事を確認して、パムルが自身の乗る馬の腹を蹴る。

「城壁の門まで走ります！遅れなきよう！」

彼女はスカート裾を翻し、振り向く事なく、灰色の馬を駆けさせた。

彼女らしい地味なドレスの下に、乗馬用のブーツが見える。急いでいるようで、何か計画があるらしい。

リン ゴーン リン ゴーン

朝靄の中を、突然重苦しい金属音が響いた。街だけでなく、領民全てに、朝食開始を告げる音。

「朝の鐘か。なるほど、きつちりしてら」

感心したように、ギャンガルドが呟く。

海賊王の馬にはジャムリムも乗っている。パムルの乗って来た黒毛の馬だ。

当のパムルは、カールの牽いていた馬に跨がっていた。

しんがりは兄妹が務めている。

城の建つ丘を降りた所で、タカの背中にしがみつきながら、パムルは振り向いた。朝焼けに染まり、黄金色に輝く森の輪郭とは裏腹に、高台にそびえる城は黒々と日の光を遮り、徐々に離れて行く。

「お日様の光って、朝は何でも綺麗にしてくれるものだと思っただけど、例外というのは必ず存在するものなのね」

城から興味を無くし、キヤルは前を見る。爽やかな空気で満たさ

れた目の前の街並みには、本来なら忙しそうに行き交うはずの人々の姿は見られない。

それはなんと寂しい光景だった。

城と街とを隔てる低い生け垣の前まで来ると、パムルが馬を止めた。

「私はこれまで。後は兄妹がご案内致します」

彼女とラルが入れ替わり、再び有無を言わず走り出す。

「パムル!!!」

セインがクレイの足を止めたのを、カールが制した。

「大丈夫ですからお止まりにならず!」

自分だけでなく、カールまで足止めさせるわけにはいかず、仕方なく、セインは再びクレイを走らせる。振り返れば、パムルが手を振った。

「お気を付けて!」

そう叫ぶと、彼女は馬首を廻らせ、城へと戻って行く。彼女一人、何かあったであろうあの城に帰すのかと、カールを睨めば、彼は唇を噛みしめていた。

「気を付けるのは、パムルの方じゃないの?」

「!...」

並走しながらカールから視線を外し、顔を見ずに尋ねれば、苦しげな沈黙が返って来る。

セインは大きくため息を吐いた。

「僕らは良い。君はパムルの側に戻って」

「貴方がたを無事に逃がすように仰せつかっております」

カールは思っているよりも、随分と生真面目な性格だったらしい。

「バカだな。会ったばかりの僕らと彼女、どちらが大事?」

「え?」

「君のご主人の娘で、このヘンテコな領地を立ち直らせられる数少ない人材は誰?」

生真面目な事は別に悪い事ではないが、今、この場で頑なになる

事ではない。時には融通も機転も効かせなければ。

「……」

驚いたように眼を見開くカールに、セインは更にたたみかけた。

「何より、彼女に何かあったら、君のご主人も、君も、君の妹も、取り返しがつかなくなるのじゃないの？」

ようやくこちらを見やったカールに、セインは微笑んだ。

「今ならまだ取り返しがつくよ。僕らの事はラルに任せて。君の妹は優秀だろう？」

先頭に行く小さな背中からは、しっかりとした意志が感じられる。その妹の背中を見つめ、カールはゴクリとひとつ、息を呑み込む。

「ありがとうございます」

小さく呟いた。

「何の。これでも修羅場は何度も経験している」

馬を近づけ、子供にするように、カールの頭をなでた。

一瞬顔を赤らめたが、すぐに厳しい表情に戻ると、馬の腹を蹴り、方向を転換させる。

「それでは、お気をつけて！」

「君もね」

振り返らずに、一目散に城へと馬を飛ばすカールに満足し、セインは仕方がないとばかりに子供を叱る親のような顔になる。

「さて？」

ほふ、と息を吐きだして、クレイのスピードを上げさせた。

「これで逃げっぱなしって、男が廢るってもんだろ？」

事の有様を、真っ直ぐ前だけ見ているようで、しっかりと把握しているらしい海賊王が、にやりと笑って振り向いた。

「…全く君って、油断も隙も無いよね」

「褒め言葉として受けとつとくぜ」

「ま、私だって、あの腹の立つ親子と執事に、ひと泡くらい吹かせてやりたいのよね」

キヤルまでが参戦する。

「ひと泡どころじゃ収まんないだろう？三つ四つ吹かせちゃいなよ！」

ジャムリムが笑う。

「おれっちもさんせい！」

タカはなんだか嬉しそうだ。

「じゃ、全員賛成一致ということだ」

にこやかに微笑むと、セインは先頭へとスピードを上げた。

「ラル！ちよつと相談があるんだけど！」

一心に馬を走らせていたラルは、急にかけられた声に驚いたらしい。小さく「キャ！」と声を上げて、肩も小さくすくめた。

「城壁の外まで無事に逃げられたら、詳しい話をしてくれるんでしょ？」

「はい！ですから、今はお急ぎを！」

まだ、兄のカールがパムルを追って城へ戻った事を知らないでいる彼女に、セインは申し訳ないと思いつつ、馬を近づける。

「うん、それでね。ラルなら、この城下町にも、城内にも詳しいだろうから、ちよつと案内を頼みたいんだ」

それは、せつかく逃げ切れても、再び城へ戻るというのだろうか。状況によりけりかな？まだ、君達から話を聞いていないからね」
セインの言葉に、ラルは眉をひそめる。

「で、ここの領主のお姉さんたちの嫁ぎ先って、遠いの？」

「あ、あの、近い方もいらっしやいますが、その？」

「そっか、近いのもいるのか」

にこやかなセインに、ラルはこの男が何を考えているのかさっぱり分からず、なんだか不安になった。

「君たちに迷惑はかけないし、僕らもあの城には戻りたくないし、大丈夫。何もしないから」

それは嘘だと分かったが、ラルはとにかく、何か企んでいるらしい、曲がった眼鏡の男に頷いて見せた。

「良くは分かりませんが、出来る限りご協力するように仰せつか

っております。私に出来る事でしたら、なんなりと」

眼鏡が曲がった原因を知っているだけに、無理にかけることもないだろうと思う。

「ありがとうございます！」

曲がったフレームを気にしつつ、嬉しそうなセインをちらりと見やり、ラルは笑った。

「まず、眼鏡を直しましょうか」

「へ？」

そんなに自分の言葉は意外だっただろうか。

きよんとするセインに、ラルはくすくすと笑った。

「やれやれ、女性って、やっぱり強いよね」

ぽつりと、セインが呟いた言葉は、聞かなかった事にする。

「さ、皆様もうすぐです！しっかりついてきて下さいまし！」

大通りを横切り、裏路地に行く。

馬でこんな事が出来るのも、あの変な条例で、道に人がいないおかげだ。何が幸いするのか分からないものである。

迷路だったり出口だったり壁だったり（前書き）

骨、くっついてきました。

りハビリしっつがんばります。

迷路だったり出口だったり壁だったり

狭い道で馬を疾走させるのは、なかなか難しい。

家々の隙間のような路地からは、街を囲むあの巨大な壁が見えない。

どのあたりまで来たのか心配になった頃、タカの馬がゴミ箱を蹴飛ばして、大きな音を発てたが誰も現れなかった。

「うー、気味が悪いぜ」

食事の時間は六時から七時まで。その間は、緊急事態でもない限り、領民は家から出ようとしない。

特別に許可を得た憲兵が街をうろついており、見つければ、捕まえられて牢に入れられてしまうからだ。

兄妹は、城勤めを利用して、憲兵のルートを調べ、彼らに会わずに済む道を知っているのだという。それでも、新しい家庭教師候補が逃げ出したことくらいは憲兵に伝わっているとみて間違いがないだろう。

慎重に馬を跳ばす。

やがて、行き止まりに辿り着いた。

「ここで降りて下さいませ。馬を牽いてこちらへ」

ラルが、馬から降りるなり、行き止まり正面の壁をノックした。

かたん、と、右の壁に備え付けられている、小さな窓が小さく傾いて、誰か人の気配がしたと思えば、目の前で壁そのものが、ごりごりと右にスライドした。

馬ごと人が通れるまで開くと、ラルがさっさと中に入ってしまった。

「着いて行こう」

セインがラルに続き、全員が中に入ると、また壁がスライドして、元に戻る。

「凄い仕掛けだね」

滑車をうまく利用して、屋根の下の壁のみを動かしている仕掛けに、セインが感嘆の声をあげた。

「へえ。こりやどうなってるんだ？」

ギャンガルドは興味深々とばかり、閉じた壁を触っては叩いている。

一軒家の壁の向こうは、入ってみれば家の中ではなく、家々の壁に囲まれた、小さな空き地になっていた。

スライド式の壁は、なるほど小さな路地に囲まれ、家々の密集した中にあるため、城からは見えない位置になっているらしい。

「面白いわ！こんな仕掛けを作っちゃうなんて！街中こんな風になっているの？」

「ふふ。そうだったら良いのですが、こんな大掛かりな仕掛けはここだけです」

きらきらと、大きな瞳を輝かせるキヤルに、ラルが微笑む。

「ここは、お嬢様がこっそりと造られた隠れ道です。ここから、閉ざされた門へと抜けられます」

ラルが指差した先を見れば、もうそこに、あの街を取り囲む壁があった。

「閉ざされた門？」

「ええ。この街は周囲の城壁に、門が正門のほかに裏門もあるので、他にも隠された門があるのです。普段使われない門なので、閉ざされた門、と呼ばれています」

ジャムリムの疑問に、動く壁を操作していたらしい大柄な男に、ラルは小さな革袋を持たせつつ、全員の疑問に答えた。

革袋を渡された男は、ラルに何か耳打ちすると、キヤル達には興味がないようで、のそのそとすぐ横の家の中に消えていってしまった。

おそらく、何らかの理由でパムルに協力しているのだろう。

「その門って、あの執事は知っているんじゃないか？」

普段使われない隠された門、というのは、だいたいが城に住む高

貴な人間を逃がすための物であることが多い。なら、代々領主に仕えている執事なら、その存在を知っている可能性は高い。

タカのもつともな質問に、城の可憐なメイドはくすくすと笑って馬を進めた。皆も、彼女に続く。

「うちのお嬢様は、あれでも商売上手でございまして。あの動く民家の壁同様、造ってしまわれたのですよ」

何処か誇らしげなラルは、領主の夫、クロムに仕えているとはいえ、パムルの事が大好きなのだろう。

「造った？」

「はい。お嬢様はホテルで儲けたお金を、困っている人のためにお使いになられます。この領地独特の決まり事で、家族を失い、希望を失った人には特に」

では、さきほどの男も、何がしかでこの街の法に振れでもしたのだろうか。

「彼は、妹さんが男性とお付き合いをしなかったために、病院に連れて行かれ、病室に入れられたままです。それで、家族全員での朝夕の食事が出来なくなつて、街から追放されました」

「なんだそりゃ？」

男女のお付き合いをしないと、病院に入れられて、それが原因で一家そろつて食事が出来なくなつたのに、街を追放されるなど。

全くもつて馬鹿らしいではないか。

「ここは、そういう所です。若者は、年頃になつたら必ず一度は恋愛対象を見つけないけません。もし、それが出来ずに成人してしまうと、異常とみなされて無理やり精神病棟に詰め込まれます」

「待て待て。家族の団欒だけじゃなくつて、恋愛感情まで自由にならないってことか!？」

こつくりと、ラルは悲しげに睫毛をふせて、小さく頷いた。

「彼は、他の領地に家族を置いて、一人残された妹さんの為に、この街に戻って来ました。それを、お嬢様がああ壁の見張り番として雇い入れているのです」

先ほど、男に渡していた小さな袋の中身が、彼の家族を養うための物であることは、想像に難くなかった。

「この領主は、本当に何だか見当外れも甚だしいわね」

鼻息も荒く、キヤルが憤慨する。

「あれでも、全く悪気はないのです。パンナ様はすべての事柄を、領民のために良かれと思つて制定しているのです」

「悪気がないのが悪いじゃないの」

「それは、そうなのですが…。悪いお方ではないのです。ですから、クロム様も寄り添つておいでですし、お嬢様も、ここを離れずに説得しているのです」

「説得して分かるような相手じゃないでしょ」

「…お目を覚まして頂きたいのは、領民全ての願いなのですけれど…」

「そうね。せめてあのバカ息子を跡継ぎになんて、考えないくらいにはなつてほしいわね」

矢継ぎ早なキヤルの言葉に、ラルの声はどんどん小さくなる。

「坊ちやまには、もっとしっかりしてほしくて、領主にしようとしていらつしやるようです」

「あの臍肩のしように、どうしつかりするのよ」

「私も、兄もそう思っています…。何分、思い込みの激しい方なので、お嬢様と坊ちやまは同じくらい手のかかる、同じように可愛がつて育てている、そう、本気で仰っていますので、クロム様やお嬢様の言う事には耳をお貸しになりません」

そこで、キヤルが首をひねった。

「あのパムルと、あのバカが同じ?」

「ええ」

下手すれば、とつくに女性実業家として独立していてもおかしくないようなパムルを捕まえて、あの、ぐだぐだ屁理屈を並べたてたらだらと、何が偉いのか人を見下したような中身の何も無いヘナチヨコと、同じと断言してしまうとは。

「つてか、あなた、アレのこと、坊ちやまとか呼んでいるの?」

「え?そう、お呼びしろと仰せつかっておりますので」

誰がそんな事を仰つたのか、聞く気になれないキヤルは、深々と溜め息を吐いた。

「クロム様つてのもねー、自分の妻でしょう。もうちょっと何とかしてやりや、あの子があんなに自信なさそうに、いつつもびくびくした子になんか、ならなかったと思うけどねえ」

ジャムリムが大きなため息とともに呟く。

「まあ、現状はどうしようもないよ。これからどうしたら良いか、考えるのが、君たち兄弟と、あの親子の問題でしょ?今までどうしようもなかったなら、打開策をうち立てないかね」

セインが、慰めるようにラルの頭を撫でると、昨夜と同じに、艶やかな黒髪を小さくまとめた頭を傾けて、ラルは泣きそうな顔で笑った。

「大丈夫だよ。キミの仕えるご主人は、この領地をこんな馬鹿げた決まり事に縛られたままにするような、そんな愚かな人間ではないだろう?」

にやりと笑って、セインは街を取り囲む大きな壁を見上げる。

おしゃべりしている間に、あの壁の目の前まで辿り着いていた。

「私は、クロム様とパムル様を信じています。パンナ様も、きっと分かって下さいます」

祈るように、ラルは顔を上げた。

「でなければ、兄さんが城に戻つた意味がありませんから」

ラルも、セインと並んで、高くそびえる壁を睨んだ。

「え?あの若いの、いなくなったの?」

「途中からいなかったわ。ジャムリムったら、ギャンガルドがデカすぎて、気付かなかつたんでしょ」

「俺のせいだよ」

「城に戻つたつてことは、パムルさんを助けに行ったんでやすか」
全員が、馬上のまま壁を見上げた。

真下で見上げる壁は、威圧感満点だ。

「開かずの扉つてのは何処にあるんで？」

タカが、きよろきよろと見まわす。扉らしきものはどこにもない。

「開かずの扉じゃなくて、隠された扉、だろ」

ギャンガルドが馬から降りて、壁をぺんぺんと叩く。

「隠された、ってくらいだから、隠れてんじゃねえの？」

「その通りです」

振り向いて自分を見上げる大男に、ラルはこくりと頷いた。

「ギャンガルド様、すみませんが、そちらの壁の、ああ、それです。

その鳶の葉が、一枚だけ穴が開いていますでしょうか？」

「んあ？」

ラルの指さす方向に、ギャンガルドの大きな手と、とぼけた視線が移動する。

「これか？」

一枚だけ、足元に小さな穴のあいた葉っぱが、ゆらゆらと揺れていた。

「その葉の裏のレンガを、引っ張り出して下さい」

言われるままに、ギャンガルドは葉をぺろりとめくり、その裏にあつた、壁に溶け込んで他のレンガと見分けのつかないようにカモフラージュされた、新しいレンガを引っ張り出した。

思いつきり楽しそうなのは、気のせいではないだろう。鼻歌まで歌っている。

引っ張り出したレンガは、後ろに金属の棒がくっついており、カクカクと直角に二カ所曲がっていた。

その先は、壁の中に消えている。

「えーっと、これってまさか……」

「そうです。それ、ハンドルになっていますので、時計回りに回して頂けますか？」

「お？良いのか？」

鼻歌続行で、ギャンガルドが逞しい二の腕の筋肉を盛り上げて、

ぐるぐるとハンドルを回しだした。

ゴトンー

「お？」

鈍い音がすると、ギャンガードはさらにぐるぐると勢いよくハンドルを回す。

ゴゴンー！ キャラキャラキャラ...

鈍く音を響かせて、目の前の壁の一部が地面へと吸い込まれていく。

セインとラルを除く全員が、ぽかんと口を開けた。

ギャンガードは楽しくなってきたようで、ぐいぐいとレンガを振りまわすようにハンドルを回した。

…ゴゴン

最後に小さな音を立てて、馬が一頭、通れるくらいの穴が、ぽかりと開いていた。

「さ、お早く潜り抜け下さいまし」
急かすように、ラルが促した。

ちょっと行ってみようと思いい立ち

「なんだ。もう終いかよ」

不満そうなギャンガルだったが、一番乗りで外へ出て、あちらこちらと壁を触っている。

「ギャンギャン、今の状況わかってんの？」

「お？もちろんさ。俺が外出たって何にもねえ。周り見たって誰もいねえ。壁の上だつて壁と空しか見えねえぜ」

キヤルに睨まれても、ギャンガルドは楽しそうだ。

全員が、馬を牽いて街の外へと出ると、ラルが深々と頭を下げた。「皆さま、ご達者でお過ごし下さい。我が主になり替わり、この度の事は深くお詫びいたしま、イタ！」

最後まで言い終わらないうちに、下げた頭に小さな衝撃があり、思わず舌を咬んだ。

「私たち、このまんまお世話に成りつ放しじゃすまないわ！」

顔を上げれば、キヤロットが小さな胸を反らして仁王立ちしている。

「え？で、でも」

どもるラルに、キヤルはさらに眉を吊り上げる。

「セイン！」

「はい？」

呼ばれて側に立ったセインの腹に、思い切り拳を埋め込んだ。

「！！！！！！」

よける事も出来ずに食らったセインが、うずくまって泣き出すのもかまわず、キヤルはラルに向かってにっこりと可愛らしくほほ笑んだ。

「今回は、セインが攫われたりしなければ、貴方たちに助けてもらう事もなかったし、こうして苦労する事もなかったのよ。お世話になったのはこちらの方だわ。ね？そうよね。セイン？」

「う、はい、それで、すね。ごふっ…、うっう」

よろよると立ちあがるセインの口端に、血が滲んで見えるのは気のせいだろうか。

「あ、あの、怪我人にあまり無体は」

「大丈夫、足じゃなくてお腹だから」

「そういう問題か？」

昨夜まで車椅子や松葉杖を利用しなければ、歩く事も出来なかったセインである。流石に気の毒に思ったのか、ラルやギャンガルドが口をはさむ。

しかし。

「いいのよ、セインだから」

とどめを刺された。

「旦那、元氣だしなよ」

「ありがと。うっう」

タカに支えられながら、新しい涙がセインの頬をつたった。

「実際、僕が油断していなければ、こんなに君たちに苦勞をかけずに済んだのは本当の事だし。それに、さっき僕言ったでしょ？壁の外に出たら、詳しく教えてくれるのかって」

久々に食らったせいも、いつもよりも痛む腹を撫でながら、セインはラルに、何とか微笑んで見せた。

「あ、それは」

馬で移動しながら、何か叫ばれて、とにかく急ごうと、適当に返事をした。そういうえば、そんな事を言っていたような気がする。

「なーんか、引つかかるんだよね。あの執事」

曲がった眼鏡を掛け直しながら、セインが唸った。

「そうなのよねー。私も気になっていたのだけど」

キヤルも、セインに並んで眉をひそめる。

「アレじゃね？例のバカな連中雇ったの、執事だろ」

ギャンガルドがどーんと大声で普通にのたまった。

「そのものズバリを言わないでよ」

「疑問に思っただけでも、口には出さないでよね」

セインとキヤル二人に、同時に睨まれても、ギャングルドはにんまりと笑って受け流す。

執事と出会う前。ジャムリムの町に立ち寄った一行は、変な刺客と遭遇した。一部はそれなりにプロなのに、下っ端らしい連中は、自爆してみたりなんだり、間抜けな盗賊だった。

おかげでセインは両足に大怪我を負い、散々な目にあっただ。

「まあ、ここに来る前に色々あってね。その首謀者が、あの執事、カントじゃないかなあー、と」

「色々ですか？」

「まあ、間抜けな連中だったから、身ぐるみ剥いでポイしてきたんだけどね」

ラルに、大雑把で簡単な説明をして、セインがポリポリと頬を掻いた。

「そういう事だから、恩返しついでに、仕返しもしたいんだよね」

「そうそう。仕返しは倍返しって、基本よね」

セインとキヤル。

二人とも顔は笑っているのに。

「眼が笑ってないね」

「実は怒ってたんスねえ」

「・・・くわばら、くわばら」

海賊二人とその愛人は、二、三步下がって二人を遠巻きにしたのだった。

「こほん」

セインが、一つ小さく、うやうやしく咳払いをする。

「と、いうことで、作戦を練ろうと思うんだ」

さわやかに笑ったものの、曲がった眼鏡の奥の瞳は、やっぱり笑ってはいなかった。

「なあーんでこんな事になってんのかしらね」

「仕返しするって言ったの、キヤルじゃないか」

「そりゃそうだけど。だからって、何でこんな格好しなきゃいけないのかって話よ！」

馬を走らせながら、二人は先ほどからこの調子で言い合いをしているのだが、他の三人は後ろでにこにここと上機嫌で、やっぱり馬に揺られている。

「良いじゃない。似合っているよ」

「あんたは思いのほか似合っていないわね」

一行は、現在いつもとは違った格好で、とある街を目指していた。可愛いんだから、いいじゃない」

にっこりと、心の底から褒めれば、小さな拳が確かな威力をもつてセインの顎を掠った。

「あひゃあ?!」

「避けんじやないわよ!」

ごいん

言いざまに飛んできた二発目は避けられず、結局痛い目を見たセインは、ずれっぱなしの眼鏡を胸のポケットにしまいながら、痛む顎と、星が飛び交う眼を押さえて呻く。

それを、やっぱり後ろで残りの三人がにこにここと見ているのは、ちよつと気味が悪かった。

「いつもの調子が出て来たんじゃないかねえか？」

「ああいう、元気なお嬢を見ると和むつすねえ」

「キヤルちゃん、可愛いねえ」

それぞれがそれぞれに、ばらばらな感想を持ちつつ、目の前に繰り広げられる二人のやり取りを楽しんでいる。

「いいじゃない。いつもの服も可愛いけど、今日みたいなフリルいっぱいのシックなドレスも似合うよ、うはあ!」

セインの鼻先すれすれを、またもやキヤルの拳が通り過ぎた。

「やれやれ。賢者もいい加減懲りればいいのに」

「お嬢のせいっぱいの照れ隠しっすからねえ」

「照れてない！」

クレイの背中に、セインと一緒に跨ったまま、キヤルはいつもと違ってかさばるスカートと裾を手繰りながら、後ろの海賊を睨んだ。

「ギャンギャンに懲りるって言葉を諭される日が来るなんて……」

セインはセインで、がっくりとうなだれた。

「でも、本当に可愛いじゃない？」

器用に馬を操りながら、ジャムリムがクレイと自分の馬の馬首を並べた。

キヤルの現在の服装は、セインの言う通り、普段の動きやすいものとは違い、色合いもアンティーク調にまとめられたローズ系で、スカート丈も長く、フリルやレースがふんだんに使われ、背中は大きく編み上げられて、いわゆるお貴族様の着るような服なのである。ついでに言えば、セインもベージュでまとめられ、袖にはレースのカフス、刺繍の施されたジャケットと、こちらもそれなりに貴族で通る服装だった。

眼鏡を除いて。

「ジャムリムだって、凄く綺麗よ」

「ありがと」

ジャムリムは黒っぽいレースのバスルドレスで、こちらも生地も仕立ても上等だ。大きく開いた胸元が白く強調されて、それはもう色っぽい。

手にはレースの手袋を履き、ドレスに合わせた色のレースで作られた日傘を差している。

どこから見ても貴婦人を通るだろう。

そしてギャンガルド。

派手好きの彼は真っ赤なコートに金の刺繍飾り、黒いズボンにベストとジャケット。下に着ているシャツは袖口も襟元もレースびらびらだ。

「君のはなんていうか、それこそ海賊だよね」
似合つてはいるものの、貴族には見えない。

「あ？俺様海賊だしな。良いんじゃないか？」

「…うん。まあ、良いんじゃないかな」

「キャプテンかつこいっす！」

自分の船長を絶賛するタカは、それなりに整った服装だが、如何せん禿げ頭と欠けた前歯が災いしてか、はたまた生来の物か。

「お前は似合わねえなあ」

「その前に早く脱ぎてえです」

自分の着ている服をつまんで、タカは眉間に皺を寄せる。

馬に乗りつつ、一行はちよつとした仮装行列と化していた。

仲良し兄妹縁結び旅

壁の前でラルと分かれたのち、キヤルたちは荒野を馬で駆けていた。

理由は簡単。

ラルの主人であるところの領主の旦那、つまりクロム公の使いで、領主パンナの兄妹を呼びに行くのである。

「あの兄妹も苦労しているわよね」

別れ際のラルを思い出し、キヤルが溜め息交じりに呟く。

「まあねえ。あの領主の周りは、みんな苦労してんじゃないのかい？」

以外に馬術に長けていたジャムリムが、馬の首を撫でながらキヤルに賛同する。

「城に戻ったパムルも心配だし、急ごう」

セインは自分の前に座るキヤルを、振り落とさないようにしっかりと支えて、愛馬クレイを走らせていた。

ラルの話では、パンナの兄弟は彼女を合わせて七人。

領主であるパンナが、夫であるクロムと娘のパンナの話を全く聞き入れないのなら、せめて兄妹に説得してもらおうと、クロムが何度か招待状を出しているのだが、誰も返事をよこさない。どうも、誰かが妨害しているらしいというのだ。

それで、キヤル達が直接、クロムの使いという名目で呼びに行くこととなった次第である。

と、言う事で、ラルからクロムの紋章の付いた指輪を借り受け、それを一人目の姉のところで見せて話をしたところ、了承してくれたのは良いのだが、

「その格好では、門前払いを食らいます」

と、呆れられ、衣裳部屋に連れて行かれたのである。

まあ、確かに、急いで馬を走らせた事もあって、結構埃っぽくな

つていたし、セインに至っては、ぶら下がったり何だりしていたので、ところどころ破れてもいた。

実は末の妹を心配していたらしい細身の夫人は、快く衣装その他を提供してくれると言うので、厚意に甘んじた一同である。

現在は三人目の村を目指しているのだが、一人目の姉も、二人目の姉も、やはりクロムの送った招待状は届いていないという事だった。

ふくよかな末の妹とは違って細い顎を傾けながら、そんなものは受け取った覚えがないと、夫人たちは不思議がっていた。

「兄妹が集まると、何か問題があるのかしら」

キヤルの眉間に皺が寄る。

「問題があるんじゃないかな？、問題が解決してしまうと困る、そういう事じゃないかな？」

「たとえば？」

「あの街が、というよりは、あの領主がまともになっちゃ困る、そういう事だろ？」

キヤルの疑問を、ギヤングルドがセインへの確認に変えた。

様々な問題がありつつも、領主のパンナは、別に悪党といえるような独裁者ではないらしい。家族を大事にし、時間を大事にし、若者の将来を憂えているのは間違いない。

ただ、その方法が、思い込みの激しさによって途方もなく間違っているのだ。

「パンナを陰から操って、私腹を肥やしている奴がいるって事で？」

タカが頭をつるりと撫でる。

「そう考えるのが自然だよな」

ジャムリムが日傘をくるんと回し、ギヤングルドへ微笑んだ。

「大方、見当はついてんだけどな。てえか、奴しか考えらんねえだろ」

家族らしくふるまえないという理由で、目障りな連中は追放し、他人の労働時間を極端に短くして外を歩けなくしておきながら、自

分の特権を利用して職務を全うするためと、街や城内を見回り取り締まる。

この領地も、しつかり者のパムルではなく、長男であるからという理由で、息子を溺愛するパンナに勧めて末のルキを跡取りにし、ただの悪たれ小僧の跡取りは、母と同じく操れば良い。

あとは、邪魔な彼女の夫と娘の言動に聞く耳を持たせないように工作すれば、思い込みの激しい彼女はあっさりと自分の家族を裏切るだろう。

家族は大事だと言いながら。

「複雑ねえ」

ジャムリムが半眼になって呟く。

パムルの自信の無さの原因は、母親にあると言っても良い。それでも、あの細い背中に、領地の人々と家族を背負って、彼女は今も踏ん張って立っている。

「家庭教師が逃げ出しているのだから、いくらパムルやクロムが手を貸しているとは言っても、上手く行き過ぎていると思うんだよね。まあ、あのバカ息子相手に、まともに教育しようなんて熱血漢がいれば、話は別だけどさ。あれは、精神の根本から鍛え直さないと無理だよ」

「んじゃあ、苦労して捕まえておいて、わざと逃がしてるって言うのか？」

「だろうね」

それももうすす感ずいていたから、セインを逃がすために、パムルはあんなに早く行動に出たのかもしれない。

「バカはバカのままでもいいって事よ。変な知恵付けられたら、将来困るんですよ。家庭教師を捕まえて来るのも、パンナへのパフォーマンスなのよ」

金色のふわふわの髪を背後に流し、キヤルが呆れたように言った。

「ぎゃふんと言わせるわよ。あのポケ執事！」

「まあ、そうなるよなあ」

「キヤル、暴れると危ないから」

小さな拳をぶんぶん振りまわすキヤルの頭を、セインが撫でる。

「暴れてない！急ぐわよ！」

見えて来た次の目的地を指差し、キヤルが勢いに乗って叫んだ。

三人目は、兄だった。

この兄は他の兄弟と違って人のあまり住まない場所を好み、小さな湖に出来た村の片隅に、ひっそりと住んでいた。

「そりゃ、御苦労さんだったね」

彼の家は手狭だという事で、湖のほとりに彼が作ったという櫓に来ていた。

「招待状は、俺のところには来ていないな。他の兄弟からも、そんな話は聞いていないよ。良い事だ」

妻も取らず畑仕事をして暮らす彼は、髭もぼうぼうで、本当にあの領主の兄かと思うくらい、ぼろを纏った人物だった。

「家族から逃げたくてさまよったが、如何せん何処へ行ってもあの家が付きまとう。逃げようとすればするほどうるさいのが分かってね。今は諦めてここに定住してるのさ。そうしたら、やっと静かに暮らせるようになった。逃げずにいれば、距離を置いていても放っておいてくれる」

静かな湖面を見つめながら、淡々と呟く。

「悪いが、一時でも城に戻る気はないよ」

疲れたような表情を浮かべた。

湖面を眺めて動こうとしない彼に一礼し、セインは全員を次の目的地へと促した。

「なんだか、見ているこっちが疲れたわ」

湖からずいぶん離れてから、キヤルが頬を膨らませた。

「故郷とは、遠くにありて思うもの。なんて言うしねえ」

ジャムリムが、寂しそうに微笑んだ。

「人生色々、人も家族も色々って事だろ」

ギャンガルドは面倒臭そうに眉間にしわを作っている。

面白い話が大好きなギャンガルドだ。たしかに、辛気臭い話は嫌いだろ。

「まあ、あの領主の家族ですからねえ」

そのタカの呟きに、全員がうなずいた。

「次はー、っと」

四人目の居場所を、キヤルが地図を広げて確認する。

案外近いらしい事に、キヤルは機嫌を治した。

「順調ね」

「良いじゃない。順調に越したことは無いんだし」

クレイの上で揺られながら、キヤルが地図をしまう。

「まあね。このまま本当に順調に行ってくれば言う事無しよね」

本当に、そのまま順調に物事が進めば、残りの三人も今日中には回ってしまえるだろう。

が、しかし。

物事というものは、だいたい邪魔が入るのが常であり、だいたいそれが世の理であったりもするもので。

「あらん？」

艶やかな唇にレースに包まれた人差し指を当てて、ジャムリムが呟いた。

「まあ、そう来るだろうなあ」

道の向こうから、馬が走って来る。
物凄い勢いで。

「見た事ある顔だなあ」

タカがのんびりと呟いた。

びよんびよんびよん、と、音を発して何か飛んできた。

「どいつもこいつも懲りねえなあ」

「君が懲りない筆頭でしょ」

ギャンガルドが馬を前に出すと同時に、セインは彼に前を開け、自分はキヤルを庇いながらクレイを下げた。

「おらよつと！」

しゅりん、と金属音を響かせたと同時に、腰に下げていた剣を引き抜き、間をおかずに飛んできたそれを、ギャリンと火花を散らせて跳ね返す。

「剣の正しい使い方じゃ無いよね」

「刃こぼれしないのが不思議だわ」

常人には不可能な荒業を、相手がギャンガルドというだけで決して褒めないのがセインとキヤルである。

「おお。当たった、当たった」

馬で走って来ていたのだから、打ち返されるなどとも思ってもいなかっただろう。

どこかで見たとような顔の彼は、自分の投げた幅広のナイフに勢いよく頬を平手打ちされ、盛大に鼻血を吹いた。

「おお。凄い。あれで落ちないなんて」

「意地かしら。素晴らしいバランス感覚と忍耐力だわね」

「……俺は褒めねえのに、あいつは褒めんのかよ」

道から外れて、鼻を押さえながら逃げてゆく刺客はそのままに、ギャンガルドが唇を尖らせた。

「だって、君だから」

「そうね。ギャンギャンだもの」

いつものキヤルとセインのコンビ攻撃が炸裂する。

すると、無言でギャンガルドは手近の木の枝を折った。

「うらー！」

既に小さくなった刺客の背中に、気合いもろとも投げつける。

枝はぶんぶんと良く回転し、遠くを走る男の後頭部にヒットしたらしい。小さく「ぎゃ」という声を聞いて、ギャンガルドは満足げだ。

「すぐ機嫌を直しちまうとこなんか、あの人の良いところだよ」

ジャムリムがくすくすと笑う。

「まあね、僕らも彼の腕だけは信用してるけどね」

「そうね。腕だけはね。腕だけは」

「あー、そうっすねえ」

タカが、何とも複雑な表情で、つるりと頭を撫でた。

そんな邪魔が入りつつ、四人目も、まあまあ順調に会う事が出来た。

しかもこの四人目、事情を全部話す前に、あっさりとパンナの城へ出向いてもらう承諾を得る事が出来た。

なんとなく、年上になればなるほど、離れてはいても本家の事情は呑み込んでいるようで、多くを話さずとも理解してもらえた。

しかもこの四人目は、パンナの一番上の姉で、風のうわさに本家の状況を聞き、自らもパンナへ親書を送っていたのに返事が来ていない、とのことだ。

勘の鋭さと情報収集能力は歳の功、とでも言うのだろうか。既に初老と言っても良いだろう。

なんとというか、貫禄のある女性だった。

「あの子の事だから、心配していますの。あの子、思い込みが激しいでございませよ？ 凄い事になっているのではないかと危惧しておりましたのよ」

足を悪くしたという、少し小太り気味の夫人は杖を突いていた。

「困っていましたの。お手紙のお返事が来ないから、里帰りといつても、行っていいものかどうか。そこへ、貴方たちを使いにお越しされるなんて、クロム公も気が利いておいでですわね」

溜め息を突きながら憂えた様子で言う。

「では、クロム公がこちらへ出されたという招待状は？」

「あら？ 届いておりませんわ。そんなお手紙をいただいておりますしたら、とつくに駆けつけておりますもの」

他の兄妹と同じことを、ゆっくりとした口調で喋る夫人は、結構マイペースなようだ。

「もう、私、待つのが嫌いで、ちょっと戻ってみようかと思いましたが」

手紙の返事がどうのこうの、などと言っていたわりに、行動派だったらしい。

「え？城へお伺いしたのですか？」

全員を代表して、出された菓子をつまむキヤルを膝に乗せ、紅茶を勧められながらセインが眼を丸くした。

「それが、馬車馬が途中で怪我をしまして。せつかく出かけたのに、全部無駄になってしまいましたわ」

「それは、残念でしたね」

「本当ですわ。怪我をした馬は主人のお気に入りで、私こつぴどく叱られてしまいましたのよ？なら、私にも馬をご用意くださればよろしいと思いませんこと？」

今度は、ぷりぷりと頬を膨らませて怒りだす。

「ご婦人は天真爛漫で可愛らしくいらつしゃいますから、ご主人さまも、ちよつと意地悪を試みたくないのでございましょう」

にっこりと、セインが微笑んで見せれば、一気に機嫌が治った夫人は、気前よくチップを包んで五人を送り出してくれた。

屋敷が離れてから、全員が笑いだしたのは言うまでもない。

「はっはっは！いやー、まったく、お前さんは天下一の役者になれるぜ！」

「おれつち、あのおばはん相手に可愛らしい、なんて、絶対言えねえ…。旦那流石過ぎ」

「セインさんのあの頬笑みは無敵だねえ」

「まったく、あの時のセインの顔ったら！」

少しでも情報を聞き出そうと努力した結果、全員に笑われて、セインは機嫌が悪かった。

「何だよ！仕方ないじゃないか。おかげで色々判明したる？」

その通りなのだが、ギャンガルドなどは、なかなか笑いが止まらないらしい。

「はは！まあな。ごくるーさん、ホント、流石だわ」

馬を並べてばしばしと背中を叩かれ、むせる。

「分かった。うん。もう、いい加減笑うのをやめないって言うんなら！」

手を合わせようとセイインが手綱を離した。

ぎよっとしたギャンガルドが、馬から落ちそうになりながら、セイインの片手を捕まえる。

「まままま、待て待て待て！」

「君なんか半分にしてやる！」

二人とも半分涙目だ。

「あー、悪かったわよ。セイイン。これあげるわ」

自分の前に座って、一緒にクレイの背に揺られるキヤルが、ごそごそと差し出したのは、彼女おとつときのチョコレートボンボンだ。中身はもちろんリキュールではなく、子供用のチョコレートシロップである。

「キヤル……」

その丸い包み紙を受け取って、セイインは何だか泣きそうになった。

「キヤルに子供扱いされたー」

「な、何よ、美味しいもの食べれば皆、機嫌が良くなるもんじゃないのー!?」

どうも、自分がいつもセイインにされている事をやってみただけだったらしい。

確かに、美味しい食べ物人は人を上機嫌にさせる。

「んふ。やっぱりキヤルちゃんみたいな女の子を産みたいもんだね」

ちろりとジャムリムに睨まれて、ギャンガルドも手を引いた。

「まあ、要点をまとめるとだ」

ギャンガルドがにやりと笑う。

「兄妹同士の交流を、妨害している奴がいる、って事ですかね？」
タカが禿げ頭をぼりぼりと掻いた。

「そうね。今のところ、クロム公が領主の兄妹に宛てて出したって

「いう手紙は、誰も受け取っていないわ」

「逆に、兄妹が領主やクロム公宛に出した手紙も、あの城へ届いたってという話は聞いてない」

「それに、さっきの夫人の言い様だと、誰かが里帰りの邪魔をしたと考えていいよね」

全員で、指折り数えていく。

「まあ、あの幅広ナイフが飛んできた時点で、分かっていた事だけだな」

ギャンガルドが、チップと一緒に渡されたクッキーを齧ろうとするので、キヤルが怒った。

「あ！ちよつとギャンガルド！それ一人占めしない！」

「良いじゃんよー」

「私だつて食べたいの！」

と、いうことで、全員でクッキーを山分けになった。

「まあ、あのナイフ野郎は置いといて」

置かれた状況はともかく、のんきに全員で厚焼きクッキーを齧る。

「まあーなー。だいたい見当は付いてるじゃねえか。お。うまいな」

「城に居て、最初に手紙を預かるのつて執事でしょ？」

「キヤル、零してる。んー、まあ、僕が知っている限りは、使用人

が受け取つて、主人に渡す前に執事に渡すかな」

「手紙を出すときはどうするんだい？」

「それは、人それぞれかな。でも、クロム公やパムルがあのカントを信用していない以上、カント以外の人間に任せているか、自分で手配していると思うよ。ちよつとこれ、シナモン効き過ぎじゃない？」

「そうっすね、ちよつとこれ、シナモンかけ過ぎっすね」

「疲れた時には甘いものに限るねえ」

夫人が手ずから焼いたというクッキーは、上品な甘さだった。

厚焼きだけあって、ちよつと食べただけで結構腹にたまる。

各兄妹の家で、お茶を出されているとはいえ、早朝から走りっ放

しの一同にはありがたかった。

「で、あのクロムのおっさんなんかが出した手紙って奴は、配達途中に盗まれるかなんかしてんだろっな」

「そうだろうね。で、兄妹の誰かが城へ向かおうとすれば、みんなそれなりにお歳だからね。馬や馬車を使うだろうし、どつとでも邪魔が出来る」

「それがぜーんぶ出来る人物っていったら？」

それはやっぱり。

「あの執事しかいないねえ」

ジャムリムの呟きに、キヤルがぷくりと頬を膨らませた。

「っていうか、あの執事で決定よ。もう、ホント腹立つ！」

「まあね。パンナは家族大好きだって言うくらいだもの。兄妹の行き来を邪魔する理由がないしねえ」

「あと、あのバカ息子にそんな小細工するほど能力も統率力もないだろうしね」

出会った時の、ルキの尊大な馬鹿さ加減を思い出したらしく、セインは渋面を作った。

「よっぽど嫌いになる何かがあったんでやすか？」

タカの質問に、さらにセインの眉間のしわが深くなった。

「何かあったって言うか、一目見て、もう見るのも嫌だっと思った。全身から馬鹿です！って訴えてるんだから、救いようがないと思うね」

めったに人を悪く言わないセインが、見るのも嫌だというのは、から、一同は同席した夕食に、ちらりとしか会っていなかった事を、密かに喜んだ。

あの食事の席でさえ、ルキの行儀の悪さと、それを甘やかすパンナの行動に、全員がうんざりしたものだ。

「確かに、あの顔見ながら食事なんてしたくないっすね」

タカが納得して何度も頷くのに、他の皆も一緒になって頷いた。

「次の一人で最後だ。妨害が入りそうだけど、やっっちゃって良いよ

ね？」

にこやかに物騒な事を言うセインの笑顔が怖かった。

そうして、そんなヤル気満々宣言をしたと思えば、セインがクレイの腹を軽く蹴った。

「キヤル、ちゃんと掴まってね」

言うなり、クレイの走る速度が上がった。

両手を合わせ、ずりりと掌からセインロズドを引き抜くと、そのまま横に薙いだ。

キン！

甲高い金属音が響き、地面にナイフが突き刺さる。

セインが弾いたのだ。

後方に置き去りにされる形になったギヤンガルド達がそれに気づくと同時に、街道沿いの林の中から木の上から、雨あられとナイフが飛んできた。

「へ！そう来なくっちゃなあ」

ギヤンガルドがぺろりと舌唇を舐める。

「タカ！ジャムリムの護衛に着いとけ！」

「アイアイサー！」

おどけた自船のコックの、軽快な返事を聞きながら、ギヤンガルドがセインの後を追ってナイフの雨の中へ突っ込んだ。

「こんなとこで待ち伏せとかふざけてるわ！」

そう言いつつも、馬上ながらキヤルの銃は確実に頭上の敵を仕留めていく。

「賞金もらえらと思えばいいんじゃない？」

セインはセインで、器用にナイフを弾き、避けながら、時にはナイフを受け止めて投げ返しつつ、飛びかかって来る男どもを叩き落して行く。

「景気が良いじゃねえか！」

「こんなことで喜ぶのは君くらいだよ」

「何なら全部あんたにあげるわ」

喜色満面で馬を横付けるギャンガルドは、馬の足元にセインが気絶させて落した刺客がいろいろがお構いなしで、時々馬に踏みつけられて「ぐえ」なんて声が聞こえる。彼らが内臓破裂で死んでない事を祈るばかりだ。

「おう！俺にくれるってんならうれしいねえ！」

セイン達を追い越し、ギャンガルドはドカドカと降り注ぐナイフを弾き返す。

あまりのその勢いに、投げるナイフが無くなれば、今度は一斉に切りかかって来た。

「僕、確信があるから飛び出したんだけど、まあいいや」

ギャンガルドの生き生きとした背中を、半ば呆れながら見つつつ、セインがクレイの足を遅くさせれば、タカとジャムリムが追いついた。

「旦那、どうしたんでやすか？」

「見ての通りよ」

目の前で繰り広げられるギャンガルドの暴れっぷりを指差して、タカの質問にキヤルが答える。

「あ。タカ。ちょうどいいや。キヤルとクレイを預かっててくれる？」

「へい？」

セインが、ひよい、とクレイから降りて手綱をタカに渡すので、思わずそのまま受け取った。

「あと、危ないから僕からちょっと離れてて」

「言う事聞いといた方がいいわよ」

「へ？」

状況が飲み込めず、ただ、キヤルとセインがそう言うので、とりあえずキヤルを乗せたクレイとジャムリムを伴って、ナイフも届かないだろう後方まで距離を摂った。

セインは、というと、にっこりと笑ってひらひらとこちらへ手を振っている。

見たところ、その手にはセインロズドが握られているので心配はないとは思いつつ、思わず手を振り返して、タカは不思議そうにキヤルを見た。

「えーっと、お嬢？」

「ん。あいつらの狙いって、多分セイン奪還なのよね」

「…はあ？…ああ？！」

最後のパンナの兄妹へ会いに行くのを邪魔しに来たのかと思えば、そうではないというキヤルの言葉に、一瞬訳が分からなかったが、思い当たることがあったので変な声が出た。

「ふうん？他の家庭教師候補は逃がしても、セインの旦那は逃げられたら困るってことかい？」

タカの代わりに、ジャムリムが納得した覚に微笑んだ。

「そういう事。多分、王都の貴族あたりの差し金じゃないかしら」
キヤルがおもむろに銃を打ち、飛んで来たナイフを弾いた。

見れば、彼らはギャンガルドを無視してセインに襲いかかっている。

「コラ！お前ら俺様を無視すんじゃないやねえ！」

ギャンガルドも、自分に向かってくる人数より、セインに群がる相手の数の多さに、馬首を巡らせて引き返す。

セインはセインで、向かってくる敵を、久しぶりに動く両足の嬉しさからか、くるくると円を描きながら、わらわらと倒して行く。

「もちろん、長男に来てもらっちゃ困るって言うのもあるんだろうけど？」

言いながら、スカートの下から二丁目の銃を取り出して、セインの援護射撃を始めるキヤルは機嫌が悪そうだ。

「あの執事が自分でセインを誘拐した時点でおかしかったのよ。そんなの、手下にでもやらせときゃよかったものを、セインだけは慎重に自分で攫ったわ。セインの腕前を目の前にしていたっていろいろ

もあるんだろっけど、同時に歩く事も出来ないって知っていたはずよ」

歩く事も出来ない人間を、わざわざ自分で連れ去ったという事は、それだけの理由があるのだ。

「そっいや、以前とっちめた連中の持っていた親書、どうしたっけ？」

「棄てたわよ、そんなもん」

ドン、とキヤルがさらに一発撃つと、それが最後であつたらしい。銃をスカートの下に戻したので、タカが顔を上げて前方を眺めれば、上機嫌でギャンガルドがこちらへ戻って来ていた。

セインはセインで、こちらに背を向けている。多分、セインロズドをしまっているのだろう。確かに、体内に剣を入れ込むあの光景は、あまり何度も見たいものではない。

本人はけるっつとしていているものの、見ていて痛そうだ。

海賊が何を言うかと思われそうだが、それはそれ、これはこれである。

「お疲れさま」

ジャムリムが、馬上でバランスがとりにくいだろうに、構わずギャンガルドに抱きついてキスをする。

「おう」

ギャンガルドもギャンガルドで、体重をかけるジャムリムの腰をしつかり捕まえてキスを受け取った。

「どうしたの？キヤル？」

一人、徒歩で戻ったセインが、クレイの手綱をタカから受け取って、キヤルを見上げた。

ちゅ。

「え？」

額に、柔らかな感触がした。

「…何？」

「え、な、何でもない」

額を手で抑えて見上げれば、キヤルに睨まれて慌てて眼を反らす。とりあえず、クレイの背に跨って、次の目的地へと進みだす。

今のつて、キスだよな？

額をそつと触る。

キヤルがそんな事をしてくれた事は今までなかったもので、いまいち自信が持てず、ふと、自分の腕の中に納まっているキヤルのつむじを見る。

「あれ？」

キヤルのふわふわの金の髪から覗く小さな耳も、一緒に見えた。

「さつきから何？」

「えへへー。何でもないよ？」

今度はこつちを見もしないキヤルに、セインは自然と顔が緩んでしまう。

ちらちらと、クレイに揺られて除くキヤルの耳は真っ赤だった。

「お？旦那、急に機嫌よくなりやしたね」

「うん。ちょっとやる気が出て来た」

機嫌が良くなりついでに、セインは段々とクレイの足を速める。

「ねえ、キヤル。さっきの連中だけど」

「多分、セインの考えている通りだと思うわ。遠目にも、ギャンギヤンには飛び道具使ってたけど、セインには直接飛びかかっていたもの」

それは、致命傷になろうが構わない相手と、そうではなく捕まえなかった相手との差だろう。

もちろん、セイン相手に切りかかろうが飛びかかろうが、相手が悪すぎた。両足が使えないならまだしも、今は足の踏ん張りが利くのみだから。

「じゃあ、やっぱり僕狙いか」

ジャムリムの住んでいた村で、セインとキヤルが襲われた。国王の命を受けているギャンガルド達の邪魔をしに来たのかと思ったが、結局のところ、セインの腕前を勝手に見込んだ貴族の誰かが、セインを我がものにしたかった、という事が分かった。

セインロズドの事がバレたわけではなかったため、キヤルとセインの二人で心底ほっとしたのを覚えている。

「あの命令はまだ有効だ、って事かあ」
深々と溜め息を吐く。

「うんざりする気持ちもわかるけど、どうなのよ？」

「どうなのよって？」

「カントが関わってんのかって事よ」

「まあ、この兄妹仲良し縁結びの旅を邪魔してんのも彼だしね」

セインがクレイの足を止め、街道の道案内の看板を確かめながら
呟く。

間違っていない事を確認したのか頷くと、後ろの三人に手で合図を送って、また進み始める。

「仲良し縁結び……」

「だってそうでしょ？」

あながち間違ってもいないが、その表現はどうなんだと、キヤルは肩を落とした。

「多分、今までの行動を見るに、彼は随分な野心家の様だし。プライドも高いと思うし」

セインは首をかしげ、考えながら喋っている。どうやら、頭の中で整理しているらしい。

「あの領地にいたって、いくら主人を欺こうが、操ろうが、彼は領主になれるわけではないでしょう？」

それはそうだ。あの壁の町にいる限り、彼は最後まで「執事」だろう。

「なら、あのパンナよりももっと位の高い人物にとりついて、今以

上の地位を得たいと思っっている筈だよ。自分はこんな所で、こんな地位で終わる人間じゃない、てね」

「あー、すっごく思っただわ」

「でしょ？」

セインの推測に、キヤルがうんうん、と大きく頷く。

「きつと僕を欲しがってるとかいう馬鹿な貴族に、取り入るつもりなんじゃないかな」

「世の中、権力者に馬鹿が多いのは何故なのかしらね」

「何故かな。永遠の謎だね」

呆れたキヤルの事番に、セインは間を伏せたが、キヤルは前を向いていて、セインの表情の変化には気付かなかった。

「さて。着いたみたいだよ」

目の前にはどっしりとした佇まいの、謙譲そうな屋敷が建っていた。

「ここか？」

ギャンガルドが馬を寄せて来たので、セインが頷いて肯定する。

「ここが、兄妹の長男のお宅だよ」

見上げれば、黒々とした壁に、瑞々しい蔦の緑が這い、それが美しい。

「何か用かね？」

明るく、間延びしたような声がして、全員が閉じられた格子の門の奥を見た。

「凄いな。気配がなかった」

「そうね」

「…へえ？」

気の抜けるような声の主は、キヤルやセイン、ギャンガルドに、まるで気配を感じさせなかった。

「こちらは、パンナ様の兄上様、トルム様のお宅ですか？」

クレイから飛び降り、セインが礼をとって訊ねれば、快活そうな老人は、ニコと笑って頷く。

「…ほう？妹のお使いかね？」

「いえ。パンナ様の伴侶であります、クロム公の使いです」

セインが頭を下げてそう告げると、トルムというこの老人は、じつと全員の顔を見た。

「ふむ、良かろう。中に入りなさい」

言つと、一見細いその腕で、軽々と鉄の格子の扉を開けて、五人を屋敷の中へと招いたのだった。

あともうちよつと

鉄製の格子の扉は、蔦のデザインが施され、簡素ながら趣があった。

その扉を過ぎると、屋敷の大きさの割には良いさな庭が広がっている。その庭もまた、きちんと手入れがされ、けして派手な花が咲いているわけではないのに、色とりどりの花が咲き、素朴ながら美しかった。

「今年は何が良く実ってね。良ければ、食べていくと良い」

彼が見上げた先には、赤く色づいた実をたわわに下げて、林檎の枝が広がっていた。

「お一人ですか？」

「まさか。妻がいるよ」

馬たちを繋ぎ、案内されて中に入れば、これまた細身の初老の女性が顔を出した。

「あらあら、お客様？」

「おお。アップルパイを出しておくね。あれは美味いからな」

「あらあら、張り切らなくちゃ」

「お構いなく」

引き止めようとしたが、パタパタと音を発てて、奥方は奥へと行ってしまった。

「あやつめ。挨拶もせずに行ってしまった。失礼だったね」

「いいえ、そんなことはないわ。当然訪ねて来たのは私たちだもの」
キヤルが、セインからクロム公の紋章を受け取って、トルム老へ掲げて見せた。

「クロム公のお使いというのは本当の様じゃな。まあ、なんとなくだが内容は分かる。さあ、とりあえずは座っておくれ。まずは落ち着こう」

促され、全員がテーブルの椅子に着いた。

この老人、あのパンナの兄妹とはいえ、何処か貴祿がある。

セインは、そつと探るように、彼の顔をうかがい見た。

「先ほど、僕らが訊ねて来た理由が分かると仰られておりましたが、それは、今の領地の状態が思わしくないと、ご存じだという事ですか？」

そう言つと、ぱつと、右眉を高く上げ、老人はにこりと笑つた。

「そういうことじゃな。いや、正しくは、領地の中心であるあの町のみ、と言つたがいいかな」

トルム老の答えに、セインが頷く。

今まで兄妹を訪ねて通り過ぎた町は、全て、あの壁の町のそこかしこに立てられていた、店舗の営業時間を知らせる看板が無かつた。もしかして、と思つていたが、予想は的中していたという事だろ

う。
「領主の命令を無視して、貴方がた兄弟は、自分たちの治める土地を守つていたのですね」

「治めとるわけじゃない。住まわせてもらつとるんじゃ」

次男を除き、兄妹達は嫁いだ先や、下つた先で、小さいながら自らの住む地域をまとめる役目を負つていたのでらう。

「兄妹が多いと大変でな。おのずとズレとる奴も出て来るもんじゃ。パンナは大丈夫だと思つておつたんじゃがな。良く考えればアレは未娘だ。良く出来ているようで、甘えん坊だったのを、我等は忘れていたんじゃな」

深々と、老人は溜め息を吐いた。

「徐々に兄妹が城から離れるにつれ、甘えられる相手がクロム公だけになつてしまつたのじゃらうな。何とかしなければと思つておつたが、手紙のやり取りも邪魔され、出かけるのも邪魔されりや、どうしようもできん。せめてもう少し若けりや、何とかなつたんじやが」

そこに、奥方が大きなキャスターに、アップルパイと紅茶を乗せて現れた。

「失礼しますよ。さあさあ、召し上げね」

目の前に並べられるパイも紅茶も、それはそれは芳しい香りを漂わせ、訊ねた先でクッキーやお茶を出されて口にはしているとはいえ、まともな食事を摂っていなかった一同は、遠慮なく頂くことにした。「美味しい！」

「ああああ。ありがとうねえ」

「素晴らしいねえ。マダム、作り方を教えていただきたいのですけれど」

「ああああ、でも、うちの林檎だから美味しいのよ」

女性は女性で盛り上がっている。

「お話の続きになります、領主でいらっしゃるパンナ様が無理な条例を敷いて、領民を悩ませているという事はご存知で、何とかしたいと思っていらっしゃるのに、邪魔が入るために身動きが取れないのですね？」

「うむ。心苦しいのだがのう」

大きく頷いたトルム老に、セインはにこりと微笑んだ。

「では、僕らと一緒に城へお戻りいただけますね」

「ほ？」

また、片眉を吊り上げたトルム老に、ギャンガルドが答える。

「途中で、大掃除して来たのさ」

「なるほど？」

老人は満足そうに頷いた。

「ああ、あなた、お出かけですか？」

今の今まで、キヤルとジャムリムと三人でお喋りしていた夫人が、おもむろに顔を上げた。

「うん。ちよつとパンナの顔を見て来るよ」

老人は口ひげを撫でて、妻を見やった。

「ああ。でも？」

「妨害する連中は、もういないそうだよ」

不安そうに眉尻を下げる夫人に、にこりと笑いかければ、夫人は

パチンと手を叩いて立ち上がる。

「あらあら。じゃ、お支度しなくちゃ。何泊くらいお邪魔して来るの？」

「三日かな。ああ、お前も来なさい。彼らが連れて行ってくれるぞうだ」

「あらあら。嬉しいわ。今から？」

「そう。今から」

「じゃ、急がなくなっちゃ！失礼するわね」

ぼんぼんと目の前でどンドン会話が進み、夫人は嬉しそうに席を立つと、またパタパタと音を発てて出て行った。

「ふわー」

キヤルが感心して、ぼかんと口を開けた。

「熟達した夫婦って、凄いわ」

「ふわ。将来、夫婦になるなら、こんな夫婦になりたいねえ」

キヤルとジャムリムは言いながら、飲み終わった紅茶のカップと皿を片付けだす。

「どうしたの？」

「だって、夫人も出かけるなら、急いで洗わなくっちゃ！」

「あたしら、夫人を手伝ってくるから、男どもはそのままお話ししてな」

イキイキと動き回る女性たちに頷いて、男は男で感心しきりだ。

「ほほ。女というのはいつの世も不思議な生き物じゃな」

「楽しそうに笑う老人に、セインもタカも、苦笑を返した。」

「だから止められねえんだろ？」

ギャンガルドだけが楽しそうに、最後のパイを口の中に放り込み、トルム老が大笑いをした。

「楽しそうね？」

「いや、何でもないよ。それより、もう良いの？」

キヤルとジャムリムが返ってきたので、一同は出かけるべく腰を上げる。

「台所はね。すつごく綺麗なの！夫人、きつとお掃除好きなのね」
「あたしらも見習うべきだねえ」

女性はやっぱり、女性のペースだ。

玄関先で、夫婦専用の馬車を点検しながらしばらく待つと、夫人が大きな荷物を抱えてやって来た。

「多くないかね？」

「あらあら。二人分ですもの。これくらいは当然よ？」

夫婦も夫婦のペースらしい。

言い合いながらも、ちゃんと馬車に乗り込み、手綱は老が取る。荷物を上げるのは、セインとタカが手伝った。

「さ、行きますよ」

セインの号令を合図に、老夫婦を交えて、来た道を戻る。

城へと進む道中は、来るまでとは違い、とても楽しいものとなった。

壁の町に戻った頃には夜になっていた。

「正面から行っても大丈夫かしら？」

相変わらず威圧的に立ちはだかる巨大な壁を見上げて、キヤルが眉間に皺を作った。

「大丈夫でしょ。他のご兄弟も、もう城に着いている頃だろうし」
入るのは簡単でも、出るのは難しいこの町に、また足を踏み入れる。

「パムルが心配だわ」

「ふむ。姪っ子が頑張っているようだからのう。わしらも何かしてやれば良いんじゃないか」

眠い目を擦りながら、老夫婦が黒々と浮かび上がる城を見上げた。
「僕らは、ここで別れたいします」

町の大通りを進む途中で、セインは馬の足を止めた。

「わしらと城まで行かないのかね？」

「ええ。申し訳ありませんが、僕らはちょっと見つかるはずの

で

トルムに笑って返すと、老人も笑い返す。

「なるほど？他の道を辿って来るのかな？」

「いいえ？彼らは城へは行きません。あとは、どうぞクロム様にお聞き下さい。それから、出来ればパムル様のお手伝いをしていただければ、領民は喜びます」

「ふむ。あい分かった。お互い、健闘を祈ろう」

にこりと、賢者の様に微笑んで、トルム老は夫人と共に城へと馬車を走らせた。

なんとなく、事情を飲み込んで、あまり深く聞いて来なかったトルムの行動は、流石というべきだろう。

「きつと、全部お見通しね」

「そうだろうね」

のうのうと暮らしていたわけではないだろう、かの老人の快活さと狡猾さ、背負って来たものの重さを知ったような気がした。

「金持ちだからって苦労しないのかって言ったら、人によるってことかね？」

「自覚しているかしていないか、そういうことだろう？」

ジャムリムにギャンガルドが答え、全員が馬首を巡らせた。

「さあ、仕上げと行くわよ！」

一列に並んで細い路地を駆けて行く。迷わずに進めるのは、一度通った道だから。

目の前に、見覚えのある行き止まりが現れた。

ラルがしたように、横壁をコンコンとノックすれば、小さな窓が開いて、男の目が覗く。

「家庭教師候補が来たって、ラルに伝えてくれる？」

そのままそう言えば、うるん気だった眼が二、三度瞬いて、目の前の壁が、朝と同様に、ゴリゴリと鈍い音を発ててスライドする。

「お帰りなさいまし！」

壁の向こうには、泣きそうな満面の笑顔のラルがいた。

「…あら」

一同を見るなり、小さな口元に手を当てて、少し驚いた顔で全員の様子を見渡した。

「お衣装、着替えられたのですね」

何故か頬を染め、恥ずかしそうに俯く。

「ああ、最初のお屋敷で、着の身着のままだと、信用されないからといって提供していただいたのだけど…。変だったかな？」

自分の見た目を気にして、着ている三つ揃えをチェックするセイ
ンに、さらに顔を真っ赤にして、ラルがぶんぶんと首と手を振った。
「いいえ！着るものが変わるだけで、ずいぶんと印象って変わるも
のですね…」

「こんなもの着るの、ずいぶんと久しぶりすぎて着慣れないから、
どうかとは思ったのだけど」

「だ、大丈夫だと思います」

「ありがとうございます」

にっこりとサインが笑ったところで、ラルはまるで湯気が出てい
るのではないかというくらい真っ赤っかになって、くるりと後ろを
向いてしまった。

「え、えと、えっと、こ、こちらです！お馬はここにお繋ぎ下さい。
ご案内いたします」

動きが、急にぎくしゃくときこちなくなったラルに、全員で着い
て行く。

ぼそりと、ギャンガルドが呟く。

「出たよ。天然タラシ」

「ほんとっすね。自覚ないってのが凄いです」

賛同したタカが、うんうんと頷いている。

「そ、それにしても、キャル様はお可愛らしく、ジャムリム様はお
綺麗ですわ」

聞こえたわけでもないだろうに、ラルが唐突に振り向いた。

「私も、着てみたいです」

すると、キヤルもジャムリムも、わらわらとラルを囲みこむ。

「まさかずつとメイド服しか着た事ないなんて言わないわよね」

「それはだめ。女は着飾って楽しまなきゃ損だよ!」

「え、いや、あの、私服くらいはありますが」

「よし、じゃあ貰っちゃいなさい!」

「そうよそうよ!これくらい服、ドーンとくれちゃうんだもの。

あと一着貰ったって気にしないわよ、あのおばさん」

「え?あの、どなたで?」

「ずいずいと詰め寄られるので、ラルの足がもつれて転びそうになった。」

その腕を支えて、セインが慌てた。

「こらこら。まだまだ僕ら、ひと仕事あるんだから。ラルを困らせちゃだめだろう?」

それで、キヤルがぼん、と手を叩く。

「そうだわ。私たち、一応全員回って来たんだけど、誰か来てる?」
本当に目的を忘れていたらしいキヤルに、溜め息をついたら思いっきり足を踏まれてセインは呻いた。

しかし、忘れていたのはキヤルだけではなかったようで、思い出したかのようにラルが口元に手を当てた。

「そうですわ!兄妹様方が、急にお集まりになられたので、パンナ様が驚かれて、それはもう大変です。次男のムルア様は来られないと連絡がございましたから、あとは、トルム様だけですわ!」

一同を案内しながら、少し興奮気味にラルが報告する。

「おじいちゃんも、奥さんと一緒に私たちと一緒に来たわよ。今頃はお城に着いている頃だと思っわ」

「本当に?ああ、素晴らしい事ですわ!ご兄妹がこんなにお集まりになられたのは本当に久しぶりなのですよ」

「それだけ、あのカントが邪魔してたって事ね」

カントの名前が出たことで、ラルが小さく笑った。

「そのカントですが、もう、顔色を白黒させております。見ていて

気持ちが悪かったくらいですわ。パムル様も、今朝とは別人のように元気におなりになられて、兄も一息ついております」

「へえ？」

城を抜け出たあと、すぐに別れた二人を心配していたが、どうやら無事でいるらしい。

「カントが、今まで家庭教師を連れて来ても、城で働く事を承諾しなかった理由はパムル様がいるからだ、全部をお嬢様の責任としてパンナ様に報告したのです。パンナ様はそれはもう、激昂されて、クロム様が宥めたのですが一向に効果がなくて。一時はどうなる事かと思いましたが」

ふう、と、小さな胸を上下させ、呼吸を整える。

「お昼くらいにパラルム様とパモーラ様が見えられて、カントからパンナ様を隔離して下さいました。それから次々とご兄妹がご到着されたんです。トルム様にご到着されたのなら、今頃カントは締めあげられていると思いますわ」

安心したように微笑むラルを、ジャムリムがぎゅっと抱きしめた。
「がんばったね」

「いいえ。私など、パムル様のご苦勞に比べれば些細なことです」
「そうだ。あの子も抱きしめてあげなくちゃ！」

ラルの頬を、ジャムリムは何度も撫でた。

ぼろぼろと零れ始めた涙をぬぐい、ラルが頷く。

「そうですね。私も、パムル様にくっつきたいです」

「よし、みんなでくっつくわよ！」

「おー！」

女性三人が何やら盛り上りつつ、男三人組は何だか取り残されながら歩いて行くと、周囲の建物よりも、一回りほど大きな建物の前に出た。

「ここです」

建物の前で、ラルが立ち止った。

どっこも一緒かも

全員で、見上げてみる。

入口の扉の上にはでかでかと「役所」の文字。

「ギャンギャン、入る？」

くるりと振り向いて、キヤルがギャンガルドを見上げた。

「お？何故聞く」

「そうね。聞かなくていいわよね」

ちなみにギャンガルドは一千万ゴールドの最高賞金首である。

「まあ、キャプテンなら大丈夫っすかね？」

「ギャンガルド、賞金首だったっけ？」

「あんまりここでギャンギャンの名前言わない方が良いよ。ジャム
リム」

言いながら、ぞろぞろと役所の中に入っていく。

もらった衣装のコーディネートが、いかにも子供向けの物語にでも出てきそうな海賊風の衣装なのが、なんとなく気にはなるもの、実際の海賊が、あんな重そうな上着を着て、フリルびらびらのシャツを着ているかといえば、現実には普通にシンプルな服装だったりする。ごてごてした衣装では、荒れる海の中で、船の甲板をうろつろなんか出来ないからだ。

「すいませーん」

とてととと、キヤルが役所の中の、「ヘッド・ハント課」と印刷されたプレートが、天井からぶらんと下がっているカウンターへ歩いて行った。

「どうしたんだい？お嬢ちゃん」

すぐに、にこにここと人の良さそうな眼鏡のお兄さんが、よれたワイシャツの腕をまくりながら出て来た。

「私、こういう者なんですけどー、ちょっと賞金掛けたい奴がいんのよね」

言いながら、キヤルが差し出した小さなカードを受け取って、係員らしいお兄さんは、眼鏡をおでこにずらして乗せて、じっとカードを睨んだ。

仕草がオヤジっぽいなー、などと思いながら見ていると、今度はキヤルの顔をじーっと見た。

「えーっと、君が、キャロット・ガルド？」

「そうよ。顔写真も載ってるでしょ？」

「あ、ああ、そうだね。同じ顔だ、うん」

キヤルに言われて、何度か頷くと、今度はカードの裏を見た。

どんと顔が青くなつたかと思うと、今度は赤くなり始め、耳まで真っ赤になったかと思えば、カードとキヤルを交互に何度も見では確かめる。

「え、えと、まさかとは思うけど、君…？」

おそろおそろ訊ねる係員に、キヤルはにつこりと、極上の笑みを贈った。

「そのまさかだわ」

しばらく間が空いた。

「しえええええええええー！！！」

係員が奇声を上げたものだから、全員驚いたが、当の奇声を上げた本人の方が、驚いているらしい。またもや顔を白黒させて、わたしと両手をばたつかせている。

それで、体格の良い作業着の口ひげを生やした中年の男が飛んで来て、

「ごいん！」

一発、良い音がした。

「何やってんだ！他の皆さんに迷惑だろうが！」

どつちやら、上司らしい。

「す、すいません！で、でもあの、このハンターカード！」

掲げられたカードを奪い取り、カードを見ると、上司の男はキヤルにハンターパスを返した。

「お嬢さんが、ゴールデン・ブラッディ・ローズかい？」

「っこりとほほ笑まれ、キヤルも、にこりと返す。」

「そう、呼ばれる事もあるわね」

ヘッド・ハンターは、世界中で犯罪者を捕まえられるようにハンターパスを発行される。それは同時に通行手形にもなり、また、彼らの身分証明証になる。

顔写真や名前はもちろん、裏には今までハントした賞金首の名前が記される。書き切れなくなったら、古い方から消されてしまうが、記録は王都の中央役場に残る仕組みだ。

「ふむ。噂はかねがね聞いているよ。キャロット・ガムって名前の凄腕のガン・レディ。ハントした賞金首は皆高額な連中で、付いた二つ名がゴールデン・ブラッディ・ローズってね。こんな町で、超有名人に会えるとは、光栄だね」

「ありがと。でも、有名人たって、一般の人はあんまり知らないわ」「はは。そうかもな。…で？うちは何の用だい？この辺にや、お嬢さんのお眼鏡に合うような高額賞金首はいなかったと思うがね。宿でも探してんのかい？」

腹をぼん、と撫でて、町の観光案内用のパンフレットに手を伸ばすので、キヤルは慌ててカウンターに乗り出した。

「違うわ。宿は確保してあるの」

「じゃあ、何だい？」

手を止めて、きょとんとこちらを見た口ひげに、キヤルはぺしぺしとカウンターの上の表札を叩いて見せた。

「これ！私の用事はこっち！」

表札には、「こちら賞金首募集中」と書いてある。

賞金首の受け取りと賞金の引き渡し、ハンターたちの世話以外にも、役所は賞金首の情報を収集する役目も担っている。というより、明らかに賞金首と成り得る犯罪者を探し、賞金額を出すスポンサー

も探すのである。

だいたいの場合、各国が賞金を出資しているが、それだけでは間に合わないので、個人や企業から融資してもらうわけである。

もちろん、自分から賞金を出したから捕まえてくれ、なんて言うのも、有りなワケで。「賞金首募集中」というのは、そういう情報集めの為のものである。

「だれか、捕まえて欲しい奴がいるんだったら、自分で捕まえたらどうだね？」

「だって、それじゃ犯罪者にならないわ」

「ああ。そうか」

「と、いうことで、登録して欲しいのよね。コイツ」

キヤルが差し出したのは、ラルに用意させていた写真である。が、その写真の人物を見て、口ひげは溜め息を付いて眉間に皺を寄せた。

「お嬢さん、この人はね」

「知ってるわ。お城の執事カントよ」

話そうとするのを無理にさえぎって、キヤルはまくしたてた。

「知ってて訴えているの。別に私利私欲じゃないわよ。そりゃあちよつとは入っているけれど、充分な審査したうえで登録して欲しいのよね、賞金首に。けしからん犯罪者よ。うそつきだし誘拐犯だし！」

「は？誘拐犯？」

「只事ならぬ単語を聞いて、眼鏡も口ひげもきよとんとしている。

「きよとんと二度目よ！そんな顔している場合じゃないわ！」

「いや、しかしだね？」

「しかしもかしこもなにも、うちの連れが攫われて、お城からやつと逃げ出して来たのよ！本人もここにいるし、証人もいるわ！」

眉を吊り上げて怒鳴るので、キヤルの声は役場中に響いた。

「えー、でも、良い爺さんだぜ？何かの間違いじゃ…？」

まだ信用しない役人に、キヤルはカウンターをドン、と叩いた。

「だから、うそつきだって言ってるでしょ！この町の変な条例も、

カントが領主に進言して出させてんのよ！」

「お、落ち着いて。済まないが、突拍子もなさ過ぎて、確信が持てないんだが……」

困り果てた口ひげの役人に、セインが近づいた。

「すみません、攫われたのは僕です。証人は他にもいます。それと、これを」

ことりと、セインがカウンターの上に置いたのは、ラルから預かったクロムの紋章だった。

「クロム公の……？に、偽物では、なさそうだけど？」

「私も、証明します。メイドの言う事は、信じられませんか？」

ラルが、前に進み出た。

「き、君は……城のメイドの？」

「はい。時々、書類を納めに来ておりますので、面識はございますね？」

ラルの登場に、カウンターの向こうの役人二人は、互いの顔を見やった。

「その紋章は、我が主様であるクロム様から、このお方が城から脱出する際に使ってくれとお渡ししたものです。お疑いになられるなら、クロム様へ直接お聞きになられればよろしい」

キツと、小柄な少女に睨まれて、役人たちの顔は青ざめた。

名高いヘッド・ハンターと、自分たちの領主の旦那が、カントが罪人だと認めているのだ。

「わ、分かった。しかし、我等は俄かには信じられない。カント様と言ったら、とても紳士的な方で、市民にも慕われている。厳重な審査の上で決定するが、それでも良いかね？」

「……いいですよ。僕らも、彼の紳士的で勇敢な態度に騙されましたからね。思う存分調べて下さい。今まで、パルムもクロム公も、誰にも信じてもらえずにいたから、訴え出なかつたのでしょうか」

自分たちの領主一家の、しかも苦勞しているのを知っている二人の名前を出されて、役人たちは何とも複雑な顔を作った。

「分かりました。早急に対処します」

ようやく取り出された申請書類に必要な事項を書き込み、サインをしてから、キヤルが首をかしげて考え込んだ。

「どうしたの？」

「うん。賞金額、いくらにしようかと思って」

「ふうん。君が出すんだし、好きにしたらいいんじゃないかな」

「そうね」

意気揚々と、賞金額を書き込んだ。

「はい！なるべく早くお願い。そしたらここの領地、きっと良くなるわ！」

にこにこ差し出された書類を、口ひげの役人も、眼鏡の役人も、神妙な顔つきで見つめていた。

「ひゃ、百万ゴールドっ!？」

思わず呟いた役人に、キヤルは首をかしげた。

「あら、安い？」

眉根を寄せる少女に、役人二人は首をぶんぶんと振った。

「普通、五十万とか、そんなもんでしょ。百万って言ったら、大罪人ですよ」

「だって、ム力つくんだもの、ソイツ。一千万ゴールドの賞金首だっているんだし、そもそも私が捕まえる連中自体がそれくらいが底辺なもの。妥当かと思って」

ケロリと言うが、言っている事はその見目とは全く相反する。

「でもさ、そんなに驚くくらい高い金額を、アレに出すのも勿体無いじゃない？」

攫われた、とか訴えるこの背の高い青年も、ケロっとそんな事を言う。どうして超のつく有名なヘッド・ハンターが、こんなちっさいんだろ。そして、どうしてこんなひよろつとしたのと一緒にいるんだろ。そもそも本当にこの女の子が、あのゴールデン・ブラッディ・ローズなのだろうか。

頭の中がぐるぐると混乱し始めたものの、訴えられている人物は、

この町ではたしかに大物で。

「ま、まあ、あのですね、厳重に、厳密に審査してから決定しますから、今金額を決めなくても…」

「そうなの？」

「はい。スポンサーを通すやり方もありますが、ガルム様の場合、ご自分で賞金も出されるようですので、審査がもし通ったら、額を決めて納めていただくのはその後になります。万が一、審査が通らなかつたりした場合に、お返しするのも手間ですから」

慎重に、言葉を選びながら眼鏡の役人が説明するものの、キヤルはどこか納得いかないらしい。

「ま、いいわ。あの馬鹿執事が皆を騙してるんだっていうのは決定事項なものね。疑うならクロム公とか、トルムのお爺ちゃんとかに聞くと良いわ。今頃、お城でごちゃごちゃやっている筈よ」

キヤルの出した人物の名前に、役人二人は一気に顔を青ざめさせた。

なにせ、今は一地方へ封ぜられているとはいえトルム公といえは、領主の兄で下手をすればパンナよりも上の権力者だ。

クロム公にいたっては、既に紋章もここに確認済みで。

「おい！」

「は、はい！」

口ひげの役人が眼鏡の役人に指示を出せば、どたどたと走って行った。

「今、城でごちゃごちゃやってるって言うってたな」

壁に引っかけてあったジャケットを取りながら、キヤルに視線を送れば、眉を吊り上げられた。

「そうよ。他の兄妹もだいたい集まっているわ。こんなところのたくたやってるから、本当の事が見えないのよ」

「はは…。お嬢ちゃんが最強だつていうのはホントみたいだな」

キヤルの書いた「賞金首申請書」をひつつかんで、そのまま部下をぞろぞろ引き連れながら出て行った。

少しだけ休憩しよう

「こうゆうのを、お役所仕事って言うのよね」

腕組みしながら、城へ向かって馬を跳ばす役人たちの背中を見送るキヤルに、セインは小さく肩を落とした。

「いや、彼らは行動早いと思うよ？」

「そうかしら？ だいたい、町のルールがおかしくなった時点で、王都にでも連絡入れておけばこんな事態にならなかったのよ。そう思わない？」

言われてみればその通りで。

「彼ら役人は、国の規律を優先されますから、この領地の規則は彼らには採用されないのです。ですから、感覚に多少のズレがあるのでしょうか」

ラルが城を見つめながら呟くように説明するので、キヤルは余計に鼻息も荒く、眉もつり上がり。

「そこで暮らす人々の暮らしを支えてこそその役所つてもんだわ！ やっぱり、お役所仕事って事よっ！」

今は役所の外に出ているとはいえ、正面入り口のすぐ手前である。こここそと様子を見に出て来ていた役人たちが、キヤルの一言で一斉に姿を消してしまった。

「じゃー、まあ、本元に会ったら、しっかり伝えなきゃね」

「そうね！」

ひとしきり城を睨みつけていたキヤルだったが、飽きたのか疲れたのか、くるりとラルに向き直ると、にっこりと笑って見せた。

「これで、明日にはあの変態執事、ヘッド・ハントの対象になっている筈よ」

それだけの確証がある。ここにいるセインとラルと、他にも生きている証拠が沢山の証言をしてくれるだろう。

ようやく、一同は今晚のねぐらとなる宿屋へと足を向ける。

今日は一日よく動いたせいか、キヤルはあくびを零してはうつらうつらとし始めるものだから、セインが途中でおんぶして、先日宿泊したホテルとは違い、コテージ風の小さな宿屋に案内された。

「今日は、ここでお休みになって下さい。ホテルと違い、小さな建物の方が、ごまかしがきかない分安全でしょうから」

「ありがとうございます。正直、あのホテルは何だか泊まり辛くてね」

セインが困ったように眉を下げるものだから、くすくすと笑うラルに連れられて、コテージの扉を開ける。

「お帰りなさいませ！」

扉を開ければ、思わぬ人物が両手を広げて待っていた。

質素なドレスは相変わらずだ。ちよつと見なかつただけなのに、ずいぶん久しぶりに会うような気がする。

「パムル！」

駆け寄る彼女を、全員笑顔で迎えた。

「ああ、皆さんご無事で！」

「それはこちらのセリフだよ！」

ジャムリムが、パムルの額をこつんと小突く。

「途中でいきなり城に引き返しちまうんだから」

「すみません」

ちいさく、首をすくめたパムルに横から小さな影が飛びついた。

「お嬢様！」

「ラル?!」

抱きついたまま、ボロボロと泣き出したラルの頭を、パムルが優しく撫でる。

「お前にも、心配をかけさせました。カールは無事ですよ」

「本当ですか？」

「ええ」

頷くパムルに、さらに涙がこぼれるようで、ラルは顔をあわててハンカチでぬぐった。

「よかつた！」

そのくしゃくしゃになった顔を、パムルも自分のハンカチを取り出してぬぐってやる。

「本当に、ごめんなさい」

「お嬢様が、謝ることではありません」

「でも、お前の兄を、危険な目に合わせてしまったわ」

「あれは、カールが勝手にした事です。それに、あの時、お嬢様を追わなければ、私が兄の尻を蹴りつけていましたわ！」

「まあ！」

大胆なメイドの告白に、二人でくすくすと笑った。

「私たち、お互いをそんなに知らなかったというのに、ずいぶんと近しい間柄に思えるのは何故かしら」

「不思議ですね」

「そうね」

傍から見れば、姉妹の様でもある二人は、本当に中睦まじく見える。

ラルが落ち着くのを見計らい、パムルが一同へ向き直った。

「ご無事で何よりです。何とお礼を述べて良いものか。本当に感謝いたします」

深々と頭を下げる。

「良いのよ別に。頭を上げてよ。そんな大したことしてないわ」

キヤルがぺん、と、目の前のパムルの頭を叩いた。

「でも」

「でも何もへったくれもない！まだ、あの変態執事、掴まってないのでしょ？」

顔を上げて、眉をハの字にするパムルに向かって、キヤルは両手を腰に当ててふんぞり返って見上げる。

ふわふわの金髪が、ポン、と揺れた。

「まだまだ解決したとは言い難いわ！これから勝負時よ。私たちにかまけている暇があるなら、お城に戻ってあの変態をふん縛ってしまえばいいわ！協力は惜しまないわよ！」

びし！つとパムルを指差して、鼻息も荒いキヤルに、セインが慌てて止めに入った。

「待って待って！今日はもう夜遅いし、お腹空かないの？眠くないの？」

「そうだなあ。腹減ったぜ。俺は」

「君に聞いてないっ！」

割って入ったギャンガルドを睨みつけ、セインはキヤルの瞳を覗き込む。

ぐつぐつぐつぐつぐつ

大きな音が、コテージ内に響き渡った。

「あーあー、しょうがねえなーもう。お嬢はそこに座つとけ。おれがちが飯作つてやるから」

タカの言葉に、キヤルの顔がぼん、と真っ赤になった。

「いひゃーっ！」

「セインが変な事言うから思い出してお腹鳴っちゃったじゃない！」

「ほえほくおへい？」

顔を見るために屈んでいたセインは、両頬をキヤルに引っ張られた。

「食料はあるのかい？」

「あ、はい。キッチンはこちらに」

そんなやり取りにも慣れたもので、タカはラルを案内に、全員の腹を満たすべく出て行ってしまった。

「あの…」

ぎゅうぎゅうと頬を引っ張り、引っ張られる二人に、おずおずとパムルが進み出る。

「今日は、お母様のご兄妹がおりますから、大丈夫です。カントも、今は自身の部屋へ謹慎中の身。あとは、何とかあります。皆さまにこれ以上のご迷惑をおかけするわけには」

屈んで、キヤルに微笑んだ。

「はえ？」

「キヤ、キヤル!？」

「いひゃーい！」

微笑んだ瞬間に、パムルは両頬を引つ張られて涙が出た。

「そういう事を言う口はこの口か！」

「キヤル、そこは口じゃなくてほっぺただよ、やめなよ」

「ひゃーあ！はらひへくははひ！」

「悪いことしたあとは何ていうの？」

「パムルは悪いことしてないよ。キヤルってば！」

「ごへんひゃひゃひ！」

セインが引き止めたからか、謝ったからか、ようやく手を離してもらえて、パムルは尻もちを付きながら赤くなつた頬を押さえた。

「きゃーるー？」

「あいたたた！」

これにはさすがにセインも怒つたらしくキヤルの両こめかみを、げんこつでグリグリと締め付けている。

「何よ！セインのくせに生意気よ！」

「うっわ、そういう事言うの？」

「だって、パムルが悪いんだもん！」

「え？」

何故頬を引つ張られたのが分からなかったパムルは、きよとんとする。

セインが深く溜め息を吐き、キヤルの頭を優しく撫でた。

「君の言いたい事も分かるけどね。ちゃんと行ってあげないと、パムルは分からないみたいだけど？」

セインの言葉に、キヤルがパムルを睨んだ。

思わず、びくりと身をすくませるパムルの頬を、今度はがっちりと掴んで、キヤルが吠えた。

「ここまで関わってんだから、最後まで関わらせなさいよ！」

その大声に、パムルはきんきんする耳をおさえて、ぱちくりと眼を瞬かせた。

「分かった？」

「は、はいっ」

ほとんど、条件反射的に頷いたものの、目の前の小さな女の子は満足したようで、ヒマワリみたいに笑って、パムルの頬を解放してくれた。

「よし！」

満足げに両手を腰に当て、胸を張る。

その様が、いかにもおかしくて、パムルは思わずくすくすと笑いだす。

「大丈夫かい？」

そつと、ジャムリムにハンカチを渡されて、こくりと頷いた。笑いながら、涙がこぼれて止まらない。

この人たちは、なんて。

「ふふ。ありがとうございます。私、失礼な事を致しましたわ。最後まで、どうぞ関わって下さいまし。よろしくお願い致しますわ」
スカートをふわりと広げて、礼をとる。

優しい人たちに巡り合えた幸運。

それは、今までの彼女の中にあつたわだかまりを、全て溶かしてくれるようだった。

「では、食事が終わり次第、もう一仕事だわね」

「そうだな。善は急げってな」

「ギャンギャンが言つと、何だか違うモノに聞こえるね」

「これから城へ取って返して、奴の息の根止めてやるのかい？」

「はいはい、まずは腹拵えッスよ！出来たのから運んで下せえ」

「あ！手伝うー！」

急に生き活きとし始めたのは、やはり全員腹が減っていたのだろ

う。

タカが作る、手早くも美味しい料理に全員で感心し、早々に胃袋に収めていくのだった。

全員ほぼ集合

就寝時間を知らせる八時の鐘の音が、辺りに響き渡る。

眠る時間はせめて自由にしてもらいたいところだが、この町には就寝時間さえも決められている。

「まあ、結局夜に活動できないので、店なんかも早朝に開きますから、みんな自然に寝るのが早くなります」

ゆったりとしたソファに腰掛けて、みんなでセインの淹れる紅茶を楽しんでいる。

「それにしても八時って早くないかい？」

「私だつて起きている時間だわ」

「今起きてるしね」

現在、城の一階の奥にある、小さな使用人用の客室で、密会していたりする。

「お母様が八時には眠ってしまったので、それに合わせているのです。それに、八時以降は外へ出られないようにして、集会を開かせたりしないようにする抑圧的な意味もありますわ」

喋りながら、パムルの視線はセインに向けられている。

なんとなく、視線の意味は分かっているのだけれども、面倒なのであえて気付かないふりをしているセインだった。

が。

「あ！」

ラルが大きな声を上げた。

どうも、パムルの視線の先に気付いたらしい。

「そう言えばセイン様！」

「…はい？」

「お御足のお加減はよろしいのですか？」

「ごまかせるなら誤魔化そうと思っていたのに、無理だったらしい。ラル、今気付いたの？」

キヤルが呆れたように言う。

「いえ、あの、色々あって、違和感はずーっと感じていたんですけど」

「私も、昨夜お会いしてからずっと気になっていましたわ。どう聞いたものか考えあぐねておりました」

「ここぞとばかりに、パムルが身を乗り出した。

全員の視線がセインに集中する。

「え、えつとね？もともと治りかけだったんだよ、僕の足。ただ、立ち上がると痛みがあつてなかなか？あの、森の隠れ家でゆっくりさせてもらつて緊張も取れたつていうか、えつと、…気合いで！そう、気合いで立てるようになったんだ！」

「だからと冷や汗を流すセインに、海賊は笑い、キヤルは眉間に皺を寄せた。

「む、無理あり過ぎだる賢者さんよ」

「う、うるさいなっ！説明しにくいんだから仕方ないじゃないか！」

「えーつと、ようするに？」

「要するに、体力馬鹿なのよセインは」

キヤルが紅茶を口に着けながら、出されたお茶菓子のビスケットを取った。

「体力がありあまつていると、お怪我也治るのですか？」

「何て言うかな。セインのは元々病気じゃないし、骨が折れているわけでもないし、ちよつと足をつぶされただけで、内出血とか酷かつたのよ。でも体力があるから、寝れば治りが早いよね」

「足がつぶされたのはちよつとなんてものではないような気がしつつも、とりあえず納得してみるパムルとラルは、お互いの顔を見合わせて、互いに首を傾げたりしている。

「ほら。緊張すると治るものも治りにくいでしょ？でも、パムルに助けてもらつて隠れ家ですいぶんリラックス出来たから、もう爆睡しちゃつて、朝起きたらなんとなく歩けたつていうか」

それも凄い話だが、パムルとラルは、本人が言っならと、無理やり納得することにしたらしい。

「はあ。そうですか」

「良かったですわ」

などと言って微笑んだ。

「う」

「どうした」

「良心の呵責が…」

紅茶のポットを抱えたまま、そそくさとおかわりを淹れに、使用人部屋を抜け出るセインの後ろ姿に、ギャンガルドがにんまりと笑う。

「面白がっているでしょ？」

「だって面白れえもん」

ぽかりと、キヤルに頭を叩かれた。

そこへ、遠慮がちに扉をノックする音が響いた。

「誰？」

ラルが声を上げる。

城の主人一家であるパムルが、使用人用の客室などに居てはおかしいからだ。

「俺だ」

声は、若々しい男の物だった。

「兄さん？」

ラルが嬉しそうに扉に駆け寄った。

一旦部屋の中を振り返り、一同に扉をあける同意を求め、パムルがうなづくのを確かめてからそつと扉を開いた。

「無事で何より」

「お互いさまよ！」

兄妹で、ひしと抱き合った。

「早くお入りなさい」

兄妹の水を差すように、パムルが二人を促す。

叔父や叔母たちの権限で、カントは隔離されて謹慎中とはいえ、何があるか分からない。

彼女は慎重だった。

「ふむ。その心構えは感心ものじゃな。お前は全く良い娘を持ったものだ」

「いえ、私に甲斐性がないもので、苦勞を掛けております」

カールの背後から、そんな声が聞こえる。

「お二人をお連れしました」

さ、とカールが扉から身体を寄せて、室内に新たな客が訪れた。

「お父様！それに、トルム様も！」

驚くパムルに、二人ともに笑顔を見せた。

カールは二人が室内に入ると、廊下に誰もいない事を確認し、ぱたんと扉を閉め、鍵をかける。

「この度はお手柄だったね」

ソファを老体に譲り、全員で新たな客を取り囲む。

「お手柄なんて。私ではありませんわ。全てはこの方々の尽力に寄るものです」

にこりと、パムルがキヤル達を差して笑う。

「そうじゃな。貴方がたには礼を言わねばならん」

「あら。それは必要ないわ。私たちは貴方たち兄妹をこの城へ呼んだだけだもの」

「ほほ。言われてみればそうかの」

「そうよ。まだあの変態、捕まっていないのでしょ？」

面白そうに笑うトルムに、キヤルは眉間に皺を寄せた。
とんとん。

突然、扉の向こうでノックする音が部屋に響き、全員で身構える。

「兄さん。誰かにつけられたんじゃない？」

「馬鹿な。それは無いよ」

兄妹が、扉にそっと近づくのを、ギヤングルドが押しとどめた。

「こういうのは俺様に任せな」

にやりと笑い、扉を一気に開きざま、一閃を浴びせる。
キン！

鋭い音が響いた。

「あれ？」

間の抜けたようなギャンガルドの声に、室内にいた全員が扉の向こうを見ようと視線を集中させるものの、大男であるギャンガルドの背中が邪魔で、何が起きているのか見えなかった。

しばしの間。

「…あのさ。どいてくれない？」

ムスツとした聞きなれた声。

ギャンガルドの剣を、手にしているトレーで受け止め、大いに不機嫌に眉間に皺を寄せているのは、セインだった。

「お前さん、何処行つてたんだよ」

剣を鞘におさめるギャンガルドを無理に脇に寄せ、不機嫌を隠さずに室内に入つて来る。

「お茶のおかわりの用意に、その簡易キッチンに行つていたんだけど？僕、君の目の前で出ていったと思つたけど？」

「ずい、と、ギャンガルドの一撃をふせいだトレーを、中身ごとギャンガルドに突き出して渡す。」

「まったく。トレーが金属製で助かったよ。おかげでティーポットは真つ二つだけだね！」

良く見れば、頭から紅茶をかぶつてずぶ濡れである。

「あ。わり」

「へー、それで済むと思つているの？ふーん？すつごい熱かったんだけど」

紅茶は時間をかけて蒸らすので、その分火傷するほど熱くはなかったらしいが、それでも熱いものは熱い。

「セインの紅茶台無しにしたわね？」

「うぎゃー！」

いつの間にもやら足元に来ていたキャルに、気付くや否や、思い切

り足の小指を踏まれて、ギャンガルドが飛びあがった。

「ポットがなけりゃ、おかわりも作れないじゃない！」

「怒るところ、そこ？」

もう少し、自分をいたわって欲しいセインだった。

「ほっほ。愉快、愉快」

「笑い事じゃないわ、おじいちゃん！」

三人のやり取りに、老人は笑いが止まらないらしい。

「ちえ」

ふてくされたようにギャンガルドが舌をうち、再び扉をぱたりと閉めた。

「このような状況で、まったく大胆不敵。ミスターセイン、この辺には誰もいないかね？」

急に名指しされ、キヤルの鞆からタオルを探し出しながら、セインはトルムを見やった。

「え。いえ。数名の気配はありますね。いらしていたんですか」
思わず身構えるこの城の住人に、セインは安心させるように笑って見せた。

「たいしたことは無いと思います。覚えのある気配でしたから」
頭や顔、眼鏡を拭きながら答える。

「覚えがあるって事は、あいつら？」

キヤルが呆れたように溜め息交じりに聞くので、セインも困った顔をしてしまう。

「まあ…そうだね」

「いい加減に諦めて欲しいものだわ」

「覚えのある気配という事は、あの」

顔を青ざめさせたパムルに、二人同時に振りかえる。

「大丈夫。たかが知れている連中だわ」

「自爆するような連中だから。気にしなくて良いよ」

きっぱりと言い切った。

「あれだろ？このジーさんたち兄妹の邪魔してた連中だろ？」

「僕たちの邪魔もしてくれてたけどね」

タオルを肩にかけ、セインが壁際の椅子を引っ張り出して座ると、その膝の上にキヤルが乗った。

「で、そちらの状況はどうなのかしら」

セインの膝に納まって、キヤルが腕を組む。

クロムが、ちらりとトルムに目配せをすれば、快活な老人は重々しく頷いた。

「まずは、私たちの執事が、不快な思いをさせてしまった事をお詫びする」

クロムが、深々と頭を下げた。

「それは、貴方の領民に後で言えば良いわ」

キヤルの容赦ない言葉に、クロムはさらに頭を下げた。

一件落着とはいかないけど、希望は見えたよね

「申し訳ない。それは重々承知している。事が治まり次第、王都へ行くつもりだ」

「それは、領主を辞めさせるという事？」

頭を下げたままのクロムに、キヤルは尚も冷やかに言い放つ。

それに、何も返さず頭を下げ続けるクロムに、キヤルはぴよん、とセインの膝から飛び降りる。

ガツン！

下げた頭に、一発拳をお見舞いした。

「うおー！」

まさかの痛みと衝撃に、クロムはバランスを崩して倒れ込み、慌てて立ち上がった。

顔を上げれば、小さな少女は、先ほどと変わらず、眼鏡の青年の膝の上に戻っていた。

「辞めりゃ良いってもんじゃないのよ。それで責任逃れされちゃ、領民だってたまったもんじゃないわよ」

「いや、しかし……」

「しかしもへつたくれもないのよ。責任は取ってもらわなくちゃ、パンナの為にだってならないと思うのよね」

紅茶で濡れて、色の変った服をまだ拭っている青年の膝の上で、金色の髪を揺らして少女が頬を膨らませる。

思わず笑ってしまった。

「何よ？文句でも？」

「ああ、いや。失礼した」

こんな可愛らしい少女に、叱られている自分がおかしくもあり、

自分の伴侶にまでこうやって怒ってくれている事が、ありがたくも
あり。

「貴女の仰る通りだ。パンナには、良い薬になる」

「大丈夫よ。おじいちゃん達がいるもの。もう、変態カントの言い
なりになんかならなくて済むわ」

にこりと笑うと、年相応の可愛らしいあどけなさが出る。

しかし、言葉の節々は大人なぞ太刀打ちできない迫力があつた。

「カントは、先ほど役人が来てね。今取り調べているよ。私も証言
する。貴女が賞金を提供してくれるそうだが、ここは私たちに出さ
せてはもらえまいか？」

思いもしなかつた申し出に、キヤルは眼を丸くした。

「あら。どうして？」

「どうしてって、彼は我が家の執事で、アレを野放しにしてしまっ
たのは私たちの責任だ」

「んー。それもそうだけど。代々執事をしてきていた家柄なんで
しょ？」

「まあ、そうだな」

「訴えにくかつたのでしょう？」

「訴えにくいというか、訴えても信じてもらえず、結果的に私より
もカントの方が信頼が厚かつたのだらうな。情けない話だが」

「それは、貴方の責任というか、見抜く目が役場や領民に無かつた
つてだけの話だわ。まあ、私たちも一回は騙されているから、人の
事言えないけどね」

きっぱりと言い放つ。

「政治を見分ける目を持つのも一般人の義務だからね」

少女に代わり、彼女に膝を提供している青年が右手を差し出す。

「僕はセイン。王都に行くのは、諦めた方が良いと思いますよ」

差し出された手に握手を返し、セインと名乗った青年の眼を見る。
色素が薄い、しかし、不思議と深い色をした眼だった。

「現国王は、貴方の息子に政治家としての能力は無いと判断して、

領地を没収してしまうでしょう」

「まさか！」

唐突に言われて、クロムもトルムも、顔をひきつらせた。

「僕もキヤルも、国王を知っています。もちろん、そのギャンガルドもね」

先ほど彼を襲撃した大男を差されて、思わず見返せば、ギャンガルドと呼ばれた男は、美女の肩を抱きながら、にやりと不敵に笑う。

「ああ。俺もあいつに脅されて旅してるようなもんだ。王様なら、やりかねえぜ？」

「君の場合は面白がつて、王の言葉に乗っかったただけだろう」

「そうとも言うなあ」

しらっと、そんな会話が交わされて、デユナス家の一同は驚きを隠せない。

「国王とお知り合いなのですか？」

パムルが呟くように聞くので、ジャムリムが首をすくめた。

「あたしは良く分からないけどね？」

そのままギャンガルドの顔を覗き込む。

「知り合いつつーか、俺はちょっとしか会った事ねえし。俺よつか、あつちの二人が詳しいだろ」

皆の視線が元に戻る。

「まったく。面倒臭いだけだろ？」

タオルを頭からかぶり、セインが溜め息を付いた。

「詳しいっていうか、僕の場合は単に腐れ縁なだけだし、キヤルはたまたまだっただけで、僕らは国王って言うより、その家庭教師と親しいっていうだけだよ」

「国王の家庭教師といえば、オズワルド卿か」

「そうです。ご存知ですか？」

にこりと嬉しそうに笑われても、オズワルド家と言ったら名門中の名門で、こんな領地の領主など、頭も上がらないような名家だ。

「いや、お会いした事は無いが、とても優れた御仁だと聞いている」

クロムが呆れたように笑えば、セインもキヤルも、首をかしげた。
「オズワルドのおじいちゃんも、とてもいい人よ。トルムのおじいちゃんも良い人ね。お年寄りって、良い人が多いのかしら？」

そのキヤルの発言に、セインが

「ああ、失礼なことを！」

と慌ててキヤルの口を塞ぐのだが、トルムは大口を開けて笑いだした。

「ふっふっふ、こりや参ったわい。ほほ、わしらは相当運が良かったな。対して、カントは運が切れてしまった様じゃぞ、婿殿」

「ふふ、そのようですね。兄上」

老齡の男二人で、愉快そうに肩を揺らす。

「オズワルド卿と親しいのなら、大臣も貴女方に手は出せますまい」「だいじんって？」

「貴女方、特に、セイン様を狙っていた悪い輩ですわ」

パムルが眉間に皺を寄せた。

「要するに、うちの執事が王都の大臣と手を組んでいたのですよ」「クロムが娘の頭を撫でながら説明する。

「アレは、我が家の執事で終わりたくなかったのでしょう。官僚の椅子を用意するからと、中央の大臣に、どうも貴方の拘束を命じられていたようです」

「あー、やっぱりですか」

「…ご見当はついておられましたか。本当に、馬鹿なことです」

忠実な執事を装い、善人の仮面をかぶって彼が得たかったものは権力だったか、他の何かだったか。

「あの馬鹿息子も、しばらくトルム様が預かって下さる事になりましてね」

「へえ！それは意外だわ」

「ええ、まあ、妻がまだ了承していませんのですが、構わず連れて行っていただく事にしました」

「それが良いわ。あのバカ息子、本当に貴方の息子？」

「面目ないが、あれでも我が子は可愛いものです」

「そうやって甘やかすから、パムルは苦勞するしあのバカはつけ上がるのよ」

「あー、その、申し訳ない」

「本当だわ!」

領主の一人息子の話題になった途端に、勢いを増したキヤルの攻撃に、クロムは大きな肩を、どんどん小さくさせていく。

「ほほ、それくらいにしてやっておくれ。あの甥があんな風になっ
てしまったのは、我が一族全ての責任。家族の言う事はもう聞か
ないというのだから、第三者に任せるが良かる。他人の痛みを理解も
想像もできないのは、哀れな事だ」

自分の恵まれた環境も分かるうとせず、モノを知らず、努力もせ
ず、ただ我が儘放題に時間を無駄に生きるのは、確かに哀れだ。

そして本人がそれを一番理解できていない。

我が儘に育ったのは彼の周りの環境と、彼自身の責任だ。

「せめて、人並みに人の痛みが分かる人間にしてやりたい」

父のこの切実な思いが、あのバカ息子に届けば良いが、それも時
間がかかるだろう。

「カントは、このまま役場に処遇を任せようと思います」

「あら。それは不味いわね」

ぴょん、と、眼鏡の青年の膝から飛び降りて、大きな青い瞳を輝
かせながら、金色の髪少女は、それはもう清々しく笑う。

「連れていかれる前に、一発殴らせて?」

笑顔とは正反対の発言だった。

「さて」

振り向きざまに、スカートの裾へ手を突っ込んだかと思えば、

ドドン!

天井と扉に向かって一発づつ、銃弾を放つ。

もちろん、その小さな両手には銃が一丁づつ握られている。

天井からはガタガタと何かが慌てて移動し、扉の向こうからはド

サリと思ひ物が倒れる音がした。

「まだ攻撃しなくても」

呑気な声を上げたのはセインだ。

「先手必勝！立ち聞きされてたのよ？！情報が漏れちゃうじゃない！」

「いや、洩れてもかまわないんじゃない？」

なにせカントは捕まったままだし、セインを狙ったとかいう大臣だって、どうにでもなる。

「あたしの気が済まないのよ！」

八つ当たりだった。

「全員伏せな！」

ギャンガルドが叫んだ。

次の瞬間、部屋の中に何かが投げ込まれる。

白煙を上げて転がるそのせいで、視界が一気に利かなくなった。

「馬鹿だなあ。自分らだって視界が利かなくなるのに、つと！」

この辺だろうと目星をつけて、適当に座っていた椅子を投げ付ければ、景気良くガラスの割れる音がした。

白煙は窓の外へと流れ出す。

「よつと！」

掴まれた腕を振り払いさま、逆に相手の腕を捕まえて床上に踏みつける。

「うー、眼にしみる」

「ぎゃー！」

「おお？」

「よつこらせ」

間の抜けたような声は、ギャンガルドとタカのものだ。

押しつぶされたような声は、聞いた事がないから多分襲ってきた連中のうちの一人だろう。

「ちよつと！前が見えないじゃない！」

「もー、キヤルが挑発なんかするからでしょー？」

さほど広くもない部屋に、すし詰め状態で集まっていたので襲撃しやすいとも思ったのだらう。様子をうかがっていたところに、キヤルが銃撃したものだから、慌てて突入して来たというところか。「何よあたしのせい？」

「半分？」

「ムカつくわね！」

言いながら、セインが踏み潰している男の顔を踏みつける。

「うぎゃっ」

「キヤル、それ、多分痛いと思う」

ぐりぐりと踵を回しているので、相手の顔は見えないが。

「痛いようにし、て、ん、の！」

「ご愁傷様です」

そうは言っても、自分も足を離さないセインだった。

煙が窓の外と開かれた扉の向こうに拡散されて、部屋の中がうっすらと見えてくれば、見知らぬ男の上に胡坐をかいて座るギャンガルドと、やっぱり見知らぬ男の口の中に、花瓶の中にあつた花束をありったけ詰め込んでいるタカがいた。

「す、凄い」

パムルが半分呆けたまま呟く。

「だから言つたじゃない。たいしたことない奴らだつて」

タカから花を分けてもらったキヤルが、セインが踏みつけている男の鼻の穴にその茎を突っ込みながら言つた。

鼻血が出た。

「ちよつとかわいそうじゃない？」

「いーのよ。懲りずにセインを攫おうとかするからこうなるのよ。思い知れば良いんだわ」

鼻血が出た時点で、男は気を失つたようだった。

扉の前の廊下で倒れていたのと、襲つて来たのと、もちろん全員素っ裸にひんむいてひとまとめに括りつけた。

「あ。なんか良いもん持つてやすぜ、コイツら」

財布やら何やら持物をばらばらと広げれば、なんだか高価そうなものばかりが出て来た。

「これで窓と扉と天井、修理したらいいわ」

煙草のパイプと財布の中身の金貨に銀貨、宝石のはめ込まれた装飾品。

「こんなもん身につけてる暗殺者ってあんまないよな？」

「だから間抜けなんだから」

「なるほど」

渡された物品をしげしげと眺めて、クロムはキヤルに向かって、につこりとほほ笑んだ。

「気のすむまでカントを殴って行きなさい」

「え?! 良いの?」

「我慢していたのだがね。うちの城にこんな連中はびこらせたのかと思うところ、なんですか。…怒りが」

いろいろと、押さえていたものが噴き出したらしい。

「こちらです」

そう言っただけでキヤルと、面白がったギヤングルドを連れて、クロムは部屋を出ていった。

しばらくして、城の一番高い塔の上。いわゆる時を知らせる鐘の中から、逆さに吊るされたカントが泣きながら謝る声が、壁に囲まれた街中に響いたのだった。

「気が済んだ?」

「もつちろん!」

上機嫌で戻ってきたキヤルは、物凄くさっぱりした笑顔だった。

クロム公の笑顔がさらに爽やかだったのが気になりはしたが、あまり詳しくは聞かない事にした。

翌朝、城から響く鐘の音は、初めて聞いた時とは違い、軽やかに朝の訪れを告げている。

クレイを引き取り、昨夜案内された宿で宿泊した一同は、旅支度

を済ませて町中を歩いていた。

「挨拶に行かなくて良いのかい？」

ジャムリムが、キヤルの顔を覗き込む。

「昨日のうちにやる事はやったし、私たち、別段役に立ってないわ」

「まあねえ。それはそうかもしれないけど。向こうはそうは思っていないみたいだねえ？」

振り向いたジャムリムの視線を追いかければ、一生懸命走って来る小さな姿が、朝の人ごみにまぎれてちらちらと見える。

彼女の叫び声に驚いたのか、それとも、彼女の正体を町の人々が知っているからなのか、さあつ、と人の波が割れて、小さな人影がこちらへ向かってくる道筋を作った。

「待って下さい！お待ち下さい！」

相変わらず地味なドレスの裾をたくし上げ、髪が乱れるのもかまわず走る姿は何だか微笑ましい。

「パムル！」

驚いたキヤルが声を上げた。

「待っているから、ゆっくりおいで！」

ジャムリムが手を振って応えているのに、ぜいぜいと息を切らして走って来る。

「あ、良かった、間に合って」

一同に追いついた彼女は、今にも倒れそうなくらい肩で息をして、乱れた髪を整えようと慌てる。

「馬で来たたら良かった」

「ふふ、そうだね。ほら、一息付きなよ」

ジャムリムから渡された水筒の水を口に含み、大きく息を吸うと、ようやく落ち着いたようだった。

「宿へ行ったら、皆さん、すでに出られたというじゃありませんか。

私、もつずいぶん久しぶりに全速力で走りましたわ」

「ごめんなさい。来るとは思ってなかったから……。何かあったの？」

キヤルの質問に、パムルは眼を瞬かせた。

「ご報告しようと思って」

こほん、と、小さく咳ばらいをした彼女は、キヤル、セイン、ジヤムリム、ギャンガルド、タカの顔を、ぐるりと見渡した。

「カントと、捕まえて頂いた侵入者は、そろって役場に引き取られました。カントを犯罪者として登録してくれるそうなので、これで私たちの領地も、ようやく豊かにする事が出来ます。出ていった民も、呼び戻す事が出来ます」

そう言うと、胸を張って笑顔を見せた。

「ホント？良かった！」

昨夜の様子では、カントは登録認証されるだろうと確信をしていたものの、心配していたキヤルは喜んだ。

「父も、喜んでいます。母は、まだ、もう少し時間が必要だとは思いますが、叔父様や叔母様が居ますから大丈夫です」

「それは良かった」

セインも笑えば、少し頬を染めてパムルも笑い返す。

「それで、あの、何かお礼が出来ないかと思いましたが……」
しかし語尾が小さくなっていく。

「お礼なんていらないわ。私たち、おじいちゃん達を呼んだだけなもの。郵便配達でも出来る仕事だわ」

キヤルが首をかしげた。

「いいえ！郵便配達にあんな危険な仕事はできません」

「そうだろうなあ」

ギャンガルドがうなずく。

「旦那も攫われたしねえ」

海賊は息びつたりだ。

「むし返さないですよ。はいはい。ゼーんぶ僕が悪いんですー」

むくれたセインに、ジヤムリムが笑う。

「でも、セインさんが足を痛めたのはあいつらのせいだよねえ？そのおかげで歩けなくて攫われちゃったんだし」

「だから仕返ししたただけだわ」

結論。

「仕返ししたかっただけ。」

「だから、目的が達成されただけなので、お礼される事は何もない。」「そういうわけにはいきませんわ！お世話になったのですもの！御迷惑もおかけしましたわ！」

パムルが詰め寄ると、周りがさわさわと騒がしくなる。

「なんだい？パムル様、どうかしたのかい？」

「何だね？パムル様が大声出すなんて珍しい」

脇から聞こえた声に、辺りを見渡せば、いつの間にやら、ちよつと遠巻きながらも人垣が出来ていた。

「あ！皆さんからも言つて下さい！この方たちのおかげですわ！新聞読みましたでしょ？！」

パムルが叫べば、わらわらと寄ってくる。

「例えば、パムルが走って来ている段階で、人々の足はこちらを向いていたように思う。」

「おお！あれか！新聞の！」

「私たちの恩人！」

「あんたたちか！ありがとう！新聞読んだよ！」

次々と握手を求められ、頭をなでられ、小さな子供には飴玉を差し出され。

「は？あの、新聞？」

もみくちやになりながら、サインが尋ねれば、

「なんだい、見ていないのかい」

「朝、一面で出てたんだよ。まだ信じられないけど、あのカント様が諸悪の根源だったなんてねえ」

「あんたたちが捕まえてくれたんだろ？」

「どうも、今回の事柄が大袈裟に新聞に掲載されたようだ。」

慌ててパムルに視線を戻せば、悪戯が成功した子供みたいに笑わ

れた。

「こういうときは、マスコミって便利ですわね」

「えええー?!」

「特ダネだって、喜んでましたわ。嘘偽りなく事実を述べましたの。ちゃんと記事にして下さいましたわ」

流石だ。

「城が騒がしい事に気が付いたらしくて、問い合わせがあったから素直に応じましたの。私たちが色々と説明するより、新聞に書いて頂いた方が、民衆には伝わりやすいでしょう?」

これでは、カントはこの町に戻って来る事は不可能だろう。それも計算に入っただけの事なのか。

「でも、権力がマスコミを利用するのは…」

「利用? いいえ。情報操作なんてしておりませんわ。ペンは剣よりも強し、なんて言いますけど。情報操作をいともたやすくしてしまうのもマスコミですもの。危険性は重々承知しております。今回は、事の顛末を説明してもらっただけ。経費削減ですわ」

パムルの手腕に呆れつつ、気が付けばキヤルは胸上げまでされている。

「この民衆の喜びを、無視なさるおつもり?」

空高く放りあげられるキヤルに、パムルは面白そうに叫んだ。

「分かった! 分かったから下ろしてー! きゃああ!」

軽いものだから、ぽんぽんとボールみたいに放り上げられて、半泣きだった。

人々が、ようやく気が済んだのか、しばらくしてからやっと下ろされたキヤルは、よたよたとセインにすがりつく。

見れば、ギヤングルドはジャムリムを連れて、うまく建物の陰に隠れていたらしい。離れた場所で、愉快そうに笑っていたので、思わず弾を一発お見舞いした。

クレイは少々びっくりしたようだが、ピタリとセインの横に控えて、首をゆすってセインに頬ずりをしている。

セインもキヤルも、ポケットやら懐やらに、いろんなものが詰め込まれていた。

「ああ、こんなとこまで」

キヤルの髪の毛の中からキャンディが転がり出る。セインのポケットからは包み紙につつまれたチョコレートやコインや、果ては時計まで出て来る。

「あ」

まさかと思えば、クレイの鬘からも、アメやら装飾品やらが掘り出される。

「持ち合わせでもなんでも、とにかくお礼をしたかったんだと思います」

「言葉だけで充分よ」

「うん、どうしよう、これ」

指輪やブローチやカフスなどの宝飾品まで、ベルトの隙間やなにかしから、ボロボロと出て来るので、ふたりで困り果ててしまった。

「ありがとうー！」

「それは取っとしてちょうだい！いらなきゃ捨てちゃって良いわー！」

なんて声が、去って行く人々から聞こえて来る。

「そういうわけにもいかないよ……」

靴を脱いでひっくり返し、出て来た軟膏の小さなケースやら、高そうな万年筆やらを手取る。

「それだけ、みんな感謝しているのです。受け取って下さいな」

言いながら、パムルが差し出したのは、綺麗な刺繍が施されたハシカチが人数分。

「きれい！」

キヤルが嬉しそうに見入っている。

「お金は、多分要らないっておっしゃるだろうと思いましたが、作りためていたもので申し訳ないのですけれど」

「これ、パムルが刺したの？」

「ええ」

「恥ずかしそうにはにかんだ。

「うん。これでいいわ。これで充分すぎるわよ！」

大喜びのキヤルだったが、

「えー。貰えるもんはもらつとこうぜ。報奨金とか出ねえの？」

そんなギャンガルドに、無言でキヤルがまた一発お見舞いする。

「うお！」

「避けんじやないわ」

「避けなきゃ死ぬだろ」

いつもの会話が繰り広げられ、くすくすとパムルが笑った。

「カントの賞金ですけれど、お父様が出すつて言い張っておりますが、どうされますか？」

「私が出すつて言つておいて。役所を通して、後であなたに届けさせるわ」

「そうおっしゃると思いましたが。では、何かお礼になるものをこちらからご用意させていただきたいのですけれど」

「さっきのハンカチで充分よ」

キヤルの言葉に、パムルがにっこりと笑う。

「あれは、私からです。うちの一族を上げて、何かしたいと言つていますわ」

「えー」

面倒臭そうにキヤルが言う。

「ふふ。申し訳ありませんが、お礼つていうのは、半分自己満足ですから。諦めて希望を仰つてくださいまし」

言われて、しばし首をかしげていたキヤルだったが、難しそうな顔をして、パムルにそつと耳打ちをした。

すると、パムルも、キヤルにお返しとばかりに小さく耳打ちする。

「ほんと？」

「ええ。でも、噂ですわ」

どんな言葉を交わしたかは分からないけれど、なんだか楽しそう
だ。

「おおーい！」

遠くから、声が聞こえて全員で振り向けば、一台の馬車が近づい
てくる。

「おおーい！」

同じセリフをまた叫んで、見れば、この町に来た時に、利用させ
てもらった馬車の御者だ。

「ああ。良かった。間にあった」

慌てて来たらしい。一同の前を少し通り過ぎてから馬車は止まっ
た。

「あんたら、これから王都に行くんだろ？」

「ええ。貴方にいただいたチケットもあるけど、駅馬車、まだ出発
しないのですよ？」

町を出て、王都に向かう駅馬車は、今日の昼過ぎまで出発しない。
その情報は、タカが調べて来てくれている。

「おう。だけど、あんたら歩いて行くんじゃない大変だろ？」

言いながら、彼は器用にテキパキと、慣れた手つきで馬から馬車
を外して行く。

「その兄ちゃんの馬、馬車あ、牽けるかい？」

問われて、思わずクレイの顔を見やれば、
ぶるる

と、唸って前に進み出た。

「え、でも、経験ないんじゃない？」

元々乗馬用で、馬車を牽く訓練は受けていないはずだが、クレイ
はどうもやる気らしい。

「はは！頭が良い、良い馬だ。大丈夫さ。この馬車、ちと小さいが、
あんたたちにやるよ」

御者はとつととクレイと馬車を繋げてしまった。

「え、でも」

「いっていいって！この町が、やっと普通の町になるんだ。出ていった連中も戻って来る。復興させられる。それにくらべりゃ、馬車一台くらい、どうってことねえよ。チケットは、料金分ならどこでも使えるから、とっときな」

「ばしとセインの背中をたたくと、

「じゃー！」

と言って、さっさと居なくなってしまった。

「えーっと」

どうしたものかと考えていると、ギヤングルドはとつと馬車に乗り込んでしまった。

「せつかくもらったんだ、使わにゃ失礼ってもんだろ？」

「君に言われたくないね」

タカもジャムリムも乗り込んで、荷物を整理し始めてしまった。

「いいんじゃないありません？そのお菓子も装飾品もコインも、みんな受け取って下さいまし。邪魔になるなら、私が責任を持って領民にお返ししますけど」

それはそれで、手間をかせえしまっし後味も悪い。

「いいわ。頂くわ。もう、貰っちゃえばいいのよね！馬車も貰っちゃったし！」

開き直ったキャルが、仁王立ちで胸を張った。

「でも、太っちゃったら責任とってもらっわ」

「そのときは、ぜひおいで下さいませ」

二人で顔を突き合わせて笑う。

セインは大きく諦めの溜め息を付き、御者台に上った。

「じゃあ、行くわ！」

「はい。道中、お気をつけて」

壁の町の巨大な門をくぐりぬけ、王都へ向けて走り出す。

パムルが、手を振るのを、こちらも手を振ってこたえていると、小さくなる門の周辺に、どんどん人が増えていく。

みんな手を振って、送り出してくれているのが分かる。

「ありがとうー!!」

大きな声で、身体を乗り出させて、キヤルが叫ぶと、向こうからも口々に

「ありがとう!」

「また来てね!」

「良い旅を!」

返事が返って来る。

大きく手を振るキヤルの傍に、ジャムリムとタカが寄って来て、一緒になって手を振った。

「良い町になるよ」

「そうね。きつと、良い領地になるわ」

カントの本性は見抜けなかったけれど、パムルの努力を、町の人々はちゃんと見ていた。彼女が声を出しただけで、集まってきた人たち。

ひとえに、パムルの人望の厚さだろう。

「大丈夫。みんなで力を合わせられるよ」

セインも、嬉しそうだった。

「ところで、さつき、何をパムルと話していたの?」

「さつきって?」

壁の町が小さくなって、人々の姿が見えなくなってから、キヤルが御者台が上がってきた。

「ひそひそ話、していたでしょう?」

聞けば、キヤルが楽しそうに笑った。

「ふふ。ナーイシヨ」

「えー?!」

「女同士の秘密よ。男には教えなーい!」

「おや。じゃあ、あたしは聞いても良いよねえ?」

ジャムリムがホロから顔を出す。

「いいわよ? ジャムリムには教えちゃう!」

「ええー? ずるいよ!」

セインが眉間に皺を寄せれば、意地悪そうにキヤルが歯を見せた。

「セインなんか、引っこ抜くんじゃなかったわ」

「え？なんで？なんで今、僕それを言われなきゃいけないの？」

泣きそうな顔になったセインをよそに、キヤルはジャムリムと笑いあう。

「ねえ！なんでだよ？！」

「さあ？おしえなーい！」

「ええー？」

今日はとても良い天気になりそうだ。

小鳥のさえずりが、高くなり始めた空に響いた。

一件落着とはいかないけど、希望は見たよね（後書き）

これで、壁の町のお話は終わります。

このお話を書く直前、ちよっと我が家で大事件がおきまして、家族全員で立ち向かわねばならず、落ち着いてきたと思っただら、利き手の手首を陥没骨折し、ようやく動くようになったと思っただら、未曾有の大災害が発生しました。

余震が続く中、皆さん大変な思いでお過ごしかと思えます。

読者の方々と、サインとキヤルのおかげで、此処までたどり着く事が出来ました。

この非常事態に、ネット上にあげるのはどうかと思いましたが、少しでも楽しんで頂く事が出来たらと思います。

どうか、被災した方々に、少しでも早く救援が届きますように。

がんばれニッポン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9902i/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！4

2011年5月4日23時53分発行